



# 目次

はじめに

## 【Q1 7】キリシタン大名・保護者の末路

- 1・関ヶ原の戦いのあとの状況
- 2・高山右近はキリシタンとしてどう生きたか
  - (1) 生い立ち
  - (2) キリシタンとなる
  - (3) 摂津国高槻城主となり、荒木村重の配下にはいる
  - (4) 荒木村重謀反による板挟み
  - (5) 信長の死、秀吉の許に参じる
  - (6) 他の武将への勧誘・高槻での布教活動
  - (7) 異教徒への態度
  - (8) 伴天連追放令、前田家の庇護
  - (9) マニラ追放
  - (10) 臨終
  - (11) 葬儀
  - (12) 人物像
  - (13) 所見
  - (14) 右近の一族

- 3・小西行長はキリシタンとしてどう生きたか
  - (1) 生い立ちから秀吉の家臣となるまで
  - (2) キリシタンとなる
  - (3) 肥後半国に入封
  - (4) 朝鮮の役に対する態度
  - (5) 秀吉の死、関ヶ原
  - (6) 行長のイメージって
  - (7) 所見
  - (8) 彼の一族

- 4・蒲生氏郷はキリシタンとしてどう生きたか
  - (1) 生い立ち
  - (2) 秀吉政権下で洗礼を受ける
  - (3) 会津入国
  - (4) 天下への大望
  - (5) その死
  - (6) 会津のキリシタン
  - (7) 所見
  - (8) 彼の一族

- 5・大村純忠
  - (1) 養嗣子になり家督相続
  - (2) キリシタン大名へ
  - (3) 入信目的
  - (4) 仏教や神道との対立
  - (5) 長崎の教会への提供
  - (6) 天正遣欧少年使節と晩年
  - (7) 最期
  - (8) 所見
  - (9) 彼の一族

- 6・有馬晴信
  - (1) 受洗
  - (2) 朝鮮の役・関ヶ原の戦い
  - (3) 運命の暗転―岡本大八事件
  - (4) 所見
  - (5) 彼の一族

## 【Q1 8】キリシタン大名・保護者の末路（その2）

- 1・関ヶ原の戦いで東軍について加増された大名たち
  - (1) 前田利長
  - (2) 福島正則
  - (3) 細川家の人々
  - (4) 田中吉政
  - (5) 京極家の人々

- (6) 筒井定次
- (7) 蜂須賀家政
- (8) 津輕為信、信枚父子  
ひでもち
- (9) 前田 秀以
- (10) 前田茂勝
- (11) 松浦隆信
- (12) 伊達政宗  
めい いろ は
- (13) 愛 姫・五郎八姫
- (14) 伊東家の食卓  
あきいえ ときようのすけ
- (15) 宇喜多 詮家 / 左京 亮 (坂崎直盛)
- (16) 寺沢広高
- (17) 板倉勝重
- (18) 本多正純

## 2・西軍について所領没収

- (1) 石田三成
- (2) 宇喜多秀家
- (3) 豪姫
- (4) 吉弘菊子・大友義統
- (5) 上杉景勝
- (6) 織田秀信
- (7) 織田秀則

## 3・所領安堵・減封

- (1) 織田長益 (有楽斎)
- (2) 木下勝俊
- (3) 宗義智
- (4) 毛利高政
- (5) 毛利秀包  
かど
- (6) 筑紫広門
- (7) 島津義弘

## 4・国外追放

- (1) 高山右近
- (2) 内藤忠俊 (如安)  
じょあん

## 5・その他 (関ヶ原の戦いに無関係)

- (1) 池田教正
- (2) 和田惟政
- (3) 一条兼定
- (4) 大友宗麟 (義鎮)  
しげ
- (5) 曲直瀬 道三  
まな せどうさん
- (6) 天正遣欧使節の少年たち  
はせくら
- (7) 支倉 常長
- (8) 原胤信 (ジョアン)
- (9) 牧村利貞 (政治)
- (10) 毛利重政
- (11) 志岐鎮経 (麟泉)
- (12) 税所敦朝

## 【コラム2】大名の改易

- 【表①】江戸時代以降の改易大名一覧
- 【表②】改易大名一覧 (時期別サマリー)
- 【表③】改易大名数 (年別)
- 【表④】改易理由

## 【コラム3】キリスト教布教の光と影、むしろ影の部分は？

- 1・キリシタン宣教師の野望
- 2・“日本人”を奴隷に売却、しかも、**50万人** (！？)
- (1) 秀吉が伴天連追放令を出した経緯—奴隷貿易
- (2) 天正遣欧使節の文書
- (3) その他の文書

### 3・布教の費用

(1) 宣教師たちの暮らしぶり

(2) 教団の収入

(3) 費用面

### 4・国家の独立を守る戦い

### 5・天草・島原の乱

(1) 悲劇というイメージ

(2) 天草四郎の正体

(3) 天草をスペイン艦隊の基地に

(4) アジア貿易のうまみ

### 6・キリシタンの残虐行為

### 7・まとめ

### 巻末史料

■キリシタン関連年表

■キリシタン大名等の改宗年表

### 参考文献

## はじめに

上巻、中巻では官兵衛そのものにスポットをあててきた。

下巻では、中巻で予告したように、他のキリシタン武將を比較対象としてあげていきたい。戦国大名について、華々しい戦歴や事蹟が挙げられることが多いが、大事なのは晩年であると思う。紆余曲折があっても右肩上がりで人生のあがりを迎えたのか、若いころに華々しい功績をなしたが、その後、零落してしまったのか、あるいは、幸せなことにずっとよかったのか。

キリシタンとしての官兵衛は、紆余曲折があっても右肩上がりで人生のあがりを迎えたきたと、私は思う。

しかし、他のキリシタン武將たちはどうだったのだろうか。また、どうしてそのような成功や失敗をつかんだのか、特にキリシタンだったことが彼らの人生に与えた影響をみていきたい。ただし、キリシタンとしての事蹟として伝えられているものは、武將によって多寡があるので、多少温度差があることはご理解頂きたい。

### 【Q17】キリシタン大名・保護者の末路

官兵衛にキリシタンになるように勧めた高山右近、小西行長、蒲生氏郷その後どうなったのか。人に勧めておきながら、自分は棄てたり裏切ったりしていないよね！？さすがに。

日本最初のキリシタン大名だった大村純忠、その親戚の有馬晴信はどうだったのか・・・まさか裏切ったりしていないよね！？どうだったんでしょうか・・・みてみましょう。

## 1・関ヶ原の戦いのあとの状況

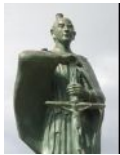
戦国末期～江戸時代初期におけるキリシタン大名やその関係者はたくさんあった。主な者だけでも60名。反キリスト教大名か、既存の宗教勢力からの迫害がある中で、秀吉の伴天連追放令があり、家康が嫌っていたことがあったなかで、これだけの広がりを見せたのであった。

官兵衛が亡くなった翌年の慶長10年（1605）頃は、キリシタンに厚意的な大名たちによって、キリシタンにとって繁栄を謳歌している時期であったようだ。

「若干の大名は、堂々と好意を寄せてゐた。三箇國の領主である肥前殿（前田利長）、安芸と備後を領し広島に城市を持つ福島ファヤドノ（福島正則）長岡越中殿（細川忠興）、博多に城市を持つ筑前殿カミドノ（黒田筑前守）柳河に城市を持つ田中兵部殿（田中吉政）の如き、之であった。内府様の寵臣で、京都の所司代板倉殿（板倉勝重）及び上野殿（本多上野介正純）も亦修道者に力をかすことを憚らなかつた。そのお蔭で、キリシタン宗は、首府の中ですら安全であった。」（『日本切支丹宗門史』第7章 傍線引用者）

とあるように、黒田長政、前田利長、福島正則、細川忠興、田中吉政、板倉勝重、本多正純をはじめ、キリシタンに厚意的な大名たちがいたようである。戦国時代を知るために、キリシタン武将たちの戦国を知るためには、官兵衛のことだけを見てもわからない。そこで、キリシタン大名たちの行く末について見てみよう。

## 2・高山右近はキリシタンとしてどう生きたか



高山右近像（高槻城跡公園）

高山右近は、キリシタンとして生き、キリシタンとしての信仰を貫いたことで知られている。彼は秀吉や家康によってスケープゴートとされてしまった感がある。右近というのは名前ではなく、名前は重友。右近は通称だ。でも右近の方が有名なので、こちらで書いていく。

秀吉の寵愛を受けたが、伴天連追放令により一転して迫害を受け、伴天連追放令の発令の際に、見せしめとして所領を没収され追放された。前田家のお預けの身となり、徳川幕府の禁教令により呂宋（フィリピン）に追放となった。秀吉の死後、家康からフィリピンのマニラに追放され、同地で客死している。

### （1）生い立ち

右近は天文21年（1552）に友照の嫡男として生まれた。父友照はもともと大和国の豪族で、三好家、松永久秀に仕えていた。摂津国人の中川清秀は従兄弟とされる。

### （2）キリシタンとなる

永禄7年（1564）に12歳でキリスト教の洗礼を受けた。それは父が奈良で琵琶法師だったイエズス会員ロレンソ・ア・ソウザの話を聞いて感銘を受け、自らが洗礼を受けると同時に、居城沢城（大和国）に戻って家族と家臣を洗礼に導いた。右近はユストの洗礼名を得た（父の洗礼名はグリヨ、母の洗礼名はマリア。ポルトガル語読みでは「ジュ」スト、ラテン語では「ユ」ストとなるが、右近は自身の花押として「重出」「寿須」「寿子」といった字を用いており、ジュストと発音していたと考えられる）。なお、このころのキリスト教団を取り巻く情勢としては、永禄3年（1560）に足利義輝がガスパル・ヴィレラにキリスト教の布教を許している。父、友照は初期のキリシタン大名の一人であった。よほどキリスト教との縁があったのだろう。

### （3）摂津国高槻城主となり、荒木村重の配下にはいる

三好長慶が永禄7年（1564）に没すると、内紛などから三好家は急速に衰退した。そして、足利義昭を擁する信長が上洛。摂津において和田惟政を高槻城に置き、彼と伊丹親興、池田勝正を加えた3人が摂津の守護に任命された（摂津三守護）。高山父子は和田惟政（キリシタン大名。後述）に仕えることとなった。

元龜2年（1571）、和田惟政が池田氏の被官・荒木村重と中川清秀の軍に敗れて討死（白井河原の戦い）。まもなくその村重が池田氏そのものに乗っ取った。村重は信長に接近して伊丹氏を滅ぼした。村重は信長から摂津一円の支配権を得た。

和田惟政の死後の内紛を制し、和田家を滅ぼした高山親子は高槻城主となった。この内紛のなかで、右近は首を半分ほども切断するという大怪我を負ったといわれており、奇跡的に回復し、一層キリスト教へ傾倒するようになった。本当、キリスト教の人って“奇跡”が好きですね。宗教の成り立ちから“奇跡”が不可欠だったから仕方ないか・・・本当はたいした怪我ではなかったかも知れないし、大怪我だったが教団による応急処置か外科手術を受けて助かったということと、別に“奇跡”じゃなかった可能性もある。教団ってそんな話でうち上げて布教に利用することはあった。他のキリシタン武将たちの身の上にも病氣から奇跡的に復活したなどという話も時々出てくる。そのため、この類の話を私は簡単に信じられない。

この後、高山父子は荒木村重の支配下に入った。村重は既に信長から摂津一円の支配権を得ていた。高山父子は高槻城主となり、まもなく高槻城の修築工事を行い、石垣や塗り壁など当時畿内で流行しつつあった様式を取り入れた。

ルイス・フロイスの「日本史」によると、右近は父ダリオと共に善政を敷き、今でいう「福祉国家」の様相を呈していたという。また、高槻城下である村人が亡くなった時、当時は身分が低い者の仕事であった棺桶を担ぐ仕事を率先して引き受け、領民を感動させたという（死や血に関わるものは穢れの思想があって、身分が高い者は忌み嫌っていた）。

「彼はそこで毎年、いろいろなことの世話にあたる四人の教会の執事を任命し、彼らは異教徒改宗のことに係わったり、貧者を訪問したり、告白や死者の葬儀のことで司祭たちに知らせたり、各地からそこに来た客たちをもてなしたりした。しかし彼自身もまたこの教会委員の職を帯び、他の委員たちに率先し、自ら範を垂れて彼らを導いた。・・・（中略）・・・」

ある戦いで大勢の寄る辺ない寡婦や孤児が残された。ダリオ（父、友照）は、次から次へと全員を世話し終えるまで休むことがなかった。その世話ぶりはいとも熱心で幼い者はまるで彼の子供のようであり、婦人たちは彼の近親者のようであった。それゆえ、その地で人々は皆、彼を自分の父のように見なした。・・・（中略）・・・

その地で二人の貧民が死亡した。ダリオはさっそく一台の棺を製作させ、真中に白い十字を付した黒緞子の棺布でおおい、ダリオと城主であるその息子右近殿は、棺を担ぐ役を自ら引き受けた」（フロイス「日本史」傍線引用者）。

父、友照は50歳を過ぎると高槻城主の地位を右近に譲り、自らはキリシタンとしての生き方を実践するようになった。この時代、友照が教会建築や布教に熱心であったため、領内の神社仏閣は破壊され神官僧侶は迫害を受けたともいわれている。父の生き方は当然息子の右近に大きな影響を与えた。



#### （４）荒木村重謀反による板挟み

天正6年（1578）、右近が与力として従っていた摂津の守護荒木村重が主君・織田信長に反旗を翻した（謀反の理由には諸説ある）。村重の謀反を知った右近はこれを翻意させようと考え、妹や息子を有岡城に人質に出して誠意を示しながら謀反を阻止しようとしたが失敗した（官兵衛も説得を試みて失敗）。

右近は村重と信長の間にあって悩み、尊敬していたイエズス会員・オルガンティノ神父に助言を求めた。神父は信長に降るのが正義であるが、よく祈って決断せよとアドバイスしたという。オルガンティノにとっては信長を敵に回すことは避けたかったはずであり、高山一族も大事だが、それよりも畿内の教団やキリシタンの方が重要だったのだろう。「正義」なんていうオブラートに包んでいるが。

摂津国高槻城は要衝の地であったため、信長はここをまず落とそうとした。右近が金銭や地位では動かないと判断した信長は、右近が降らなければ畿内の宣教師とキリシタンを皆殺しにして、教会を壊滅させると脅迫する。

城内は、信長への徹底抗戦派（父・友照ら）と、開城派に割れた。

この時、右近は迷った。

「信長様なら畿内の宣教師とキリシタンの殺戮をやりかねん。しかも、一度裏切ったら絶対に許してくれない。」

「しかし、主君の荒木村重殿への忠義もあるし、村重殿を裏切れば差し出した人質も殺されるだろう。」

畿内の宣教師とキリシタンと自分の人質のどちらを救うかの葛藤、迷いが生じて悩む。懊悩した右近はここにいたって城主を辞し、頭を剃り領地と城を明け渡し、従者をもつて信長の前に現れる。この政治の世界との絶縁を示すこの行為は、右近を思いもよらぬ結果へと導くことになる。彼は信長に許され、所領を安堵されただけでなく、荒木村重にさしだした人質も命が助けられるという、非常に幸運な結果となる。これは本当にラッキーであって、戦国時代の常識であれば人質は殺されていたはずだ（そのための人質だったから）。だから、むしろ村重の温情というか、優柔不断だったのかも知れない。官兵衛も殺されてもおかしくなかったが、命は助けられている。このあたりは興味あるところだが、別に機会に述べてみたいと思う。

人生最大の危機に直面して、右近は良心の声に耳を傾けることによって乗り越えた。

右近の離脱は荒木勢の敗北の大きな原因となった（後に村重の重臣であった中川清秀も織田軍に寝返っている）。

この功績を認めた信長によって、右近は再び高槻城主としての地位を安堵された上に、2万石から4万石に加増される異例の措置を受けた。

#### （５）信長の死、秀吉の許に参じる

天正10年（1582）6月に本能寺の変で信長が没すると、明智光秀は高山右近と中川清秀の協力を期待していたようだが、右近は高槻に戻ると羽柴秀吉の幕下につけつけた。秀吉は右近を信じ、人質も取らなかったという。光秀との旧誼もあっただろうが、先を見る眼があったのか、秀吉に味方したことで、運が開けた。

安土に向かったオルガンティノが坂本に着いたとき、光秀は右近に味方するように手紙を書かせた。オルガンティノは光秀の希望通りの一通のほかに、ポルトガル語で「たとえ、磔刑に処せられても光秀に味方せぬように」と記して使いに託したといわれている。いわゆる暗号電文みたいな感じで、外国人ならではのうまい方法だ。

右近の居城高槻城は山崎まで5km南西にあり、もし右近が光秀についた場合には違った戦いが展開されたと思われる。まもなく起こった山崎の戦いでは先鋒を務めた。中川清秀や池田恒興と共に奮戦、光秀を敗走させ、清洲会議でその功を認められて加増された。

また、本能寺の変後の動乱で安土城が焼けると安土のセミナリヨを高槻に移転し保護している。

賤ヶ岳の戦いでは岩崎山を守るものの、柴田勝家の甥、佐久間盛政の猛攻にあつて中川清秀は討死、右近はやつとこのことで羽柴秀長の陣まで撤退して一命を保った。



この際、戦わずして陣を放棄したため、周囲の非難を浴びたという（『黄微古簡集』『余呉庄合戦覚書』）。また、この件で柴田勝家への内通を疑われ、一時、居城高槻城を攻められたともいわれている（『多聞院日記』）。

その後も、小牧・長久手の戦いでは、はじめ先鋒をつとめることになっていたが、直前に近衛隊に配置代えになって命拾いしている。その他、四国征伐や九州征伐などにも参戦している。

## （６）他の武将への勧誘・高槻での布教活動

高槻城主となった天正4年（1576）に教会を建設。

「高山右近の領内におけるキリシタン宗門は、かつてなほど盛況を呈し、十字架や教会が、それまでにはなかった場所に次々と建立された・・・五畿内では最大の収容力を持つ教会が造られた」（フロイス「日本史」）

オルガンティーノ神父を招いて、荘厳、盛大に復活祭が祝われた。

天正5年（1577）には一年間に4千人の領民が洗礼を受け、天正9年（1581）には巡察師ヴァリニャーノを高槻に迎え、盛大に復活祭が行なわれた。同年、高槻の領民のうち、1万8千人（6～7割）がキリシタンであったとされる。

天正11年（1583）には修学寮も建設し、領内には20ヶ所の教会もあり、宗教活動を活発にしていたようである。

一方、秀吉は天正11年（1583）、大阪城を築き始めていた。右近は、秀吉にオルガンティーノ師をひきあわせて土地を与えられ、河内岡山（現大阪府四条畷市岡山）の教会を移した。この年の降誕祭は、河内はもちろん、摂津、京、堺などからもキリシタンが大勢集まり、盛大に新教会でミサが行なわれた。多くの大名や、武士たちが右近のすずめ教会を訪れ、彼の感化によって信仰に入った。

右近は人格高潔で、多くの大名が彼の影響を受けてキリシタンとなった。

たとえば、蒲生氏郷・小西行長・官兵衛・牧村政治などがそうである。前田利家・細川忠興は洗礼を受けなかったが、右近に影響を受けてキリシタンに対して好意的であった（全員、当巻にて取り上げている）。

## （７）異教徒への態度

右近はキリスト教徒にとっては名君ではあったが、神道氏子・仏教徒にとっては父・友照同様に暴君だったとする記録もある。友照の政策を継いだ右近は、領内の神社仏閣を破壊し神官や僧侶に迫害を加えたため、畿内に存在するにもかかわらず高槻周辺の古い神社仏閣の建物はほとんど残らず、古い仏像の数も少ないという異常な事態に陥った。領内の多くの寺社の記録には「高山右近の軍勢により破壊され、一時衰退した」などの記述がある。

一方、フロイス『日本史』などのキリスト教徒側の記述では、あくまで右近は住民や家臣へのキリスト教入信の強制はしなかったが（実際に寺社への所領安堵状も受洗後に出している）、その影響力が絶大であったために、領内の住民のほとんどがキリスト教徒となったがために寺社が必然的に減り、廃寺も増えたので、これを打ち壊して教会建設の材料としたと記されている。

宣教師側は、右近を、キリスト教弘宣の功労者として賛美する傾向があり、寺社側は右近によって領内のキリスト教徒の数が絶大的になり収入が激減したという事情があり、多分に誹謗中傷などをしている経緯もあるので、同じ事実でも立場によって見方は分かれるところである。

## （８）伴天連追放令、前田家の庇護

秀吉は、キリシタンを嫌う家臣や仏教僧らの言葉には耳を貸さず、右近に全幅の信頼を寄せていた。ある茶室で秀吉が、高山右近および荒木村重と同席した時のこと、秀吉は右近の勇気や親切について、大変な褒め方をした。村重は有岡城落城後、毛利家を頼って落ち述べると、右近とは仲のあまり良くなかった村重が、「右近の勇気は見せかけのものに過ぎませぬ」とけなした。秀吉は顔色を変え、「何を申すか。自分は、右近が全く表裏のない人物であることを熟知している。右近のことをそのように悪しざまに言う奴は好かぬ。出てゆけ!」と大声でしかり飛ばした。この一件以来、秀吉は村重と距離を置き、永いあいだ会おうとしなかったという。

ちなみに、村重は信長に謀反を起こし、有岡城落城後、毛利氏に亡命した。信長が本能寺の変で横死すると堺に戻りそこに居住。秀吉が覇権を握ってからは、大坂で茶人として復帰し、千利休らと親交をもった。しかし、有岡城の戦いでキリシタンに恨みを持っていた村重は、小西行長や高山右近を讒訴して失敗し、秀吉の勘気を受けて長く引見を許されなかった。さらに、秀吉が出陣中、村重が秀吉の悪口を言っていたことが北政所<sup>ふん</sup>に露見したため、処刑を恐れて出家し、荒木道薫となった。はじめは過去の過ちを恥じて「道冀」（道端のクソ）と名乗っていたが、秀吉は村重の過去の過ちを許し、「道薫」に改めさせたと言われている。

右近は、天正13年（1585）に播磨明石郡に新たに領地を6万石与えられ、船上城を居城とし、明石教会を建設。ちなみに、高槻は秀吉の直轄領となり、豊臣方の代官数名や新庄直頼が城主となったが、関ヶ原の戦い後、徳川氏の直轄地となった。

このように秀吉の寵愛を受けていた右近の運命が暗転していく。

天の巻（上巻）で述べたとおり、秀吉とキリシタンの蜜月は終わりを告げた。まもなくバテレン追放令が秀吉によって発令された。

このとき、友人や同信の者たちさえもが、表面だけでも信仰を棄てたと言って秀吉の怒りを和らげるようにとすすめた。右近は、「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得があるか」（マタイ一六・二六）の言葉をあげて、その誘いを退けたという。

秀吉は、右近を失うことを悲しみ、茶道の師匠である千利休を使いとして送って、「前言を取り消すならば」と持ちかけた。しかし、「主君の命令に背いても志を変えないのが真の武士である」と答え、右近は妥協しなかった。右近はむしろ、秀吉の前に出て、教えを説いて斬られることも考えたが、全教会に及ぶ危害を思っ、その衝動に耐えた。茶道をもきわめ、「利休七哲」の一人に数えられていた右近は、その夜、茶をたてて静かに瞑想と祈りにふけた。翌朝、彼は晴々とした顔で家臣たちに事の次第を伝え、「必ず天主が、皆の父となり給うであらう」と言って、信仰を失わないように諭した。こうして右近は、数名の従者だけを連れて、領地を去ったという。

右近は、信仰を守ることと引き換えに、領地と財産をすべて捨てることを選び、世間を驚かせた。その後、しばらく

くは小西行長に庇護されて小豆島や肥後などに隠棲していたが、天正16年（1588）にキリシタンに厚意的な前田利家に招かれて加賀国金沢に赴き、そこで1万5千石あまりの扶持を受けて暮らした。

天正18年（1590）の小田原征伐にも建前上は追放処分の方のままでありながら前田軍に属して従軍している。

金沢城修築の際には、右近の先進的な畿内の築城法の知識が大きく役に立ったともいわれる。また利家の嫡男・利長にも引き続き庇護を受け、政治・軍事など諸事にわたって相談役になったと思われる。

朝鮮出兵のときには前田家に従って名護屋城に在陣した。

その後、京都に戻った右近はベレスとともに越中に出かけたが、父タリオが病で亡くなった。そのころ、京・大坂で熱心な布教活動により多くの武士が洗礼を受けた。しかし、サン・フェリペ号事件をきっかけに、京・大坂のキリシタンが皆殺しにされるとの噂が流れた。事実、逮捕者名簿の冒頭に右近の名があったのを、石田三成が削らせ、命拾いしたとも言われている。

慶長14年（1609）には、利長の隠居城・富山城の炎上により、高岡城の縄張を担当したといわれる（越中国射水郡関野（現富山県高岡市））。



高岡城址公園

## （9）マニラ追放

慶長17年（1612）、岡本大八事件をきっかけに幕府の弾圧が始まった。前田利長は右近と内藤如安（後述）に棄教を勧めたが、従わなかった。

慶長19年（1614）、加賀で暮らしていた右近は、徳川家康によるキリシタン国外追放令を受けて、人々の引きとめる中、加賀を退き出した。

家康は、右近に対する処遇がキリシタンや、その武将たちをいかに刺激するかを、恐れていた。もし国内で右近を処刑するならば、その光景は、かえって人々に深い感銘を与えてしまうだろう。実際、かつて秀吉のもとで行なわれた長崎の「二六聖人の殉教」（1597年）が、そのいい例だった。26人の処刑は、キリシタンへの見せしめとしてなされたはずだった。ところが、天国の希望に喜々として死に就く彼らの姿は、かえって見ていた人々に深い感銘を与え、キリシタンになる者が急増してしまったのである。家康は、右近らを人知れず葬ろうと考えたという。

10月、右近ら約100名は小型船やジャンク船に乗せられて陸を離れ、その後エステバン・デ・アコスタ号に乗り移った。家康の期待に反して、船は立錫の余地もないほどであったという。

家康は、船が港を出たら撃沈せよ、と命じた。しかし、その命令を持った使いの者が港に着いた時、もう船の姿はそこにはなかった。

このあと、家康はいよいよ豊臣家を滅亡に追いやることになるが、豊臣方にキリシタン武将たちが糾合されては面倒なため、右近を抹殺としたのだろう。しかし、ここでも右近は命拾いしている。

家族と共に追放された内藤如安らと共に、長崎からマニラに送られる船に乗り、マニラに12月に到着した。当時のフィリピンはスペインの植民地であり、カトリック教国であった。マニラ総督ファン・デ・シルバは、すでにグスマン著『ゼズス会（イエズス会）東洋伝道史』を読んで、右近たちのことを知っており、右近たちは大歓迎を受けた。

## （10）臨終

しかし、船旅の疲れや慣れない気候のため、老齢の右近はすぐに病を得て、翌年の1月8日（1615年2月4日）に息を引き取った。享年64。

危篤になった右近は、苦痛を耐え忍ぶべきこと、信仰を守り続けること、バテレンの指導に従って教えを受けるべきことなどを、人々に諭した。また、孫たちには遺書として、「模範的キリシタンになるように」としたためたという。こうして右近は、息を引き取った。

妻ジュスタは夫の最期の装いとして、大切に日本から持ってきた武士の盛装をさせ、胸に十字架を抱かせながら語りかけた。「あなた様は良き戦いを戦い、走るべき道程を走り終え、信仰を守り通されました。こののち、殿のためには、天で義の冠が待っているばかりでございます」（二テモ四・七～八による）。そして、「安らかにお眠りくださいませ。私もいつかお跡（あと）を」と、そつと頬に触れたという。

## （11）葬儀

マニラ総督は、右近の死を知り、盛大な葬儀をとりおこなった。右近の遺体は立派な棺におさめられ、総督官邸の広間に安置された。その日は、マニラ中の教会の鐘が鳴り響くなか、右近の足に接吻しようとする市民や、棺をかつぐ役を得ようとする人々で、ごったがえした。そのあと棺は、サンタ・アンナ聖堂の大祭壇のかたわらに埋葬された。

葬儀は総督の指示によってマニラ全市をあげてイントラムロスの中にあつた聖アンナ教会で盛大に行われた。

高山右近の肉体に死が訪れたとき、彼は地上において、一切の領地を持っていなかった。彼にとっては、領地や権勢の中にあるのではなく、この世の財産の中にあるのでもない。それは、永遠の神との愛の交わりのうちにあつたのであろう。

右近の死後家族は日本への帰国を許され、現在、石川県羽咋郡志賀町代田、福井県福井市、大分県大分市に直系子



孫の3つの「高山家」がある。



マニラの右近の碑と子供たち

## (12) 人物像

羽目を外さない非常に真面目な人物だったらしく、秀吉を始めとする諸将がそのことを褒め称える証言や数々のエピソードが残されている。織田有楽斎の「喫茶余禄」による右近の茶道の評価は「作りも思い入れも良いが、どこか『清(きよし)の病い』がある」というものだった。

「ジュスト右近殿は、非常に活発で明晰な知性と、きわめて稀にみる天賦の才を有する若者であった。・・・またその大いなる徳操によって都地方の全キリシタンの柱となるに至った。また彼はいとも多才、かつ能弁であったので、彼がデウスのことどもを語る際には、それを聴く者はすべて、家臣たちも見知らぬ異教徒たちさえもそれがため驚嘆したほどであった」(フロイス「日本史」)。

## (13) 所見

彼がいなかったら、これほど多くの武将たちが心を動かされ入信することもなかったかも知れない。確かに彼は人格者で真摯な求道者には違いなかった。イエズス会の方針は、影響力がある支配層をキリシタン化することで浸透を図ろうとしたのであったから、彼は「使える奴」、ということが言えるかも知れない(私は右近が嫌いなわけでも、バカにしているわけではない)。武将の勧誘から、領民その他の感化のために活躍していた。

しかし、彼は不器用だった。うまくやる、という術を知らなかったであろう。特定の宗教が真実だと思いつめれば詰めるほど、それ以外のものを信じる人の気持ちが見えなくなってくるものだ。

権力者にとっても、右近は都合がよい道具で、右近を厚遇することでキリシタンの指示をとりつけ、逆に右近を罰することで、他のキリシタン武将たちを動揺させることができる、恰好の"広告塔"であった。キリシタンに理解を示していた信長が生き続けていても、同じ運命を迎ったかも知れない(何度も言うが、私は右近をこき下ろしたいわけではない)。

それでも彼は信仰を棄てなかった。むしろ、財産や地位を棄てた。なかなかできるものではない。財産や地位の執着心はひとそれぞれだが、潔い人はあまり見ない。その忠節や潔さは、称賛されるだろうし、宗教よりも現世欲を重視する人たちにとっては、愚かな選択だったと非難だろう。立場や見方によって評価は分かれるだろう。キリスト教は現世の幸せよりも来世につづく魂の救いを求める宗教だ。戒律を守って身を修めていこうとする点は、仏教も本質的には同じなのだが、その是非を論じて意味がない。彼にとっては当然の選択だったのだろう。

彼の熱情はどこから来たのかかわからないが、その真面目さが仇となって、追放の憂き目にあった。彼がキリシタンだったから追放されただけではなく(小西行長や蒲生氏郷などは秀吉の寵愛を受けたし、官兵衛も追放されたりしていない)、その融通のなさからであった。

官兵衛は右近が追放された事実をもちろん知っており、権力者の前での振舞いはよくよく注意しないと財産や地位を失って路頭に迷うことになることを見通し、右近と同じ轍を踏まないように注意したことだろう。そのため、官兵衛が棄教したのではないかという勘違いが起きるほど、うまく振舞っていたといえる(信仰を棄てたのでも、隠していたわけではないことは天の巻(上巻)で述べた)。権力者に真正面からぶつかることなく、また、家臣や領民たちと宗教対立を起こさないように融和的な政策をとり(三教共存の立場)、「うまくやった」のである。

## (14) 右近の一族

参考までに、右近に大きな影響を与えた父親、一族についても見ておこう。

### ① 高山友照(父)

彼の出自は摂津嶋下郡高山村(現在の大府府豊能郡豊能町高山)の土豪であった。大和国宇陀郡の沢城城主。勇猛で教養もあり、領民にも慕われ、誠実な武士の鑑として知られている。

(i)もとは大和国の豪族、キリシタンになった経緯

はじめ松永久秀に仕えた。イエズス会の宣教師ガスバル・ヴィレラが堺を訪問することを知った僧たちは領主の久秀に宣教師の追放を依頼した。久秀は宣教師と仏教についての知識のあるもので議論させた上で、なにか不審な点があれば追放しようと考え、清原校賢に議論の相手をさせ、仏教に造詣の深い友照と結城忠正を討論の審査役とした。キリシタン側はヴィレラに代わってロレンソ・ソサが議論を行ったが、議論の中で2人の審査役がキリスト教の教えに感化され、のちに友照はヴィレラを沢城に招いて嫡子の彦五郎(後の高山右近)をはじめとする家族とともに洗礼を受けた。

その後、高槻城主となった経緯は(3)を参照。

(ii)荒木村重の謀反と越前追放

天正6年(1578)、荒木村重が信長に対して叛旗を翻すと、組下であった高山親子も高槻城に拠って信長に反抗した。これ以前に信長に反旗を翻すか否かの会議上において、友照の娘(右近の妹)と右近の息子を「謀反するべきではない」という主張を通すために人質として荒木方に差し出したこと、信長が降伏しなければキリシタンを迫害すると通達したことなどにより、信長に降伏すべきとする右近派と、徹底抗戦するべきとする友照派が対立。キリシタン

としての心情と、人質を取られているという板挟みの中、結果として右近が単身城を出て信長に降伏した。

しかし村重が逃亡すると、抗戦した友照は捕縛され、処刑される場所であったが、右近らの助命嘆願もあり越前国へ追放された。越前では柴田勝家から客将として扱われ、建前上は幽閉の身であったが、相応の金子を与えられ自由に過ごしていたという。

信長死後は右近に従って各地を転々としていたようであるが、文禄4年（1595）に京で熱心なキリシタンとしてその生涯を閉じた。享年不詳。

長崎に埋葬してほしいとの遺志により、同地に埋葬された。

## ② 妙（妻）

洗礼名ジュスタ。出自は摂津余野の黒田氏といわれる。母は黒田マリア。子に高山長房（ジョアン）、初（ルチヤ）。

永禄7年（1564）にロレンソ了斎によって受洗した（右近と同じ年に受洗）。妻の実家、余野城主黒田家は、高山友照ダリオの勧めによって、一族や家臣たちが洗礼を受けた（永禄7年（1564））。のちに妻となるジュスタは、父と祖父は受洗後、ほどなく亡くなり、母はキリシタン嫌いの親類の圧力によって信仰を棄て、夫の弟を再婚したため、ジュスタの信仰も育まれなかったという。ただ、右近と結婚したことにより、彼女も夫婦ともに信仰を育んでいった。

その後、マニラに追放処分となった夫右近、高山マリア、子供とともにルソンへ配流。夫の死後、夫と持った幸福生活の思い出に生きた。当時、大名や武将は、複数の妻や妾を持つのが常であった。しかしジュスタは、夫ジュストの愛したただ一人の妻として、そののち天国で夫と喜びのうちに再会する望みを抱いて生きることができたのである。

夫の死後、3年後に長崎に戻った。日本に残してきた子や孫のことが心配だったのであろう。しかし、幕府の禁教令はいよいよ厳しくなり、後にマニラに戻り、同地で死去したといわれている。

### 3・小西行長はキリシタンとしてどう生きたか

小西行長の一家はキリシタン一家だった。関ヶ原の戦いで刑死するまで、信仰を貫いている。戦前の評価はよくなかったが、最近は見直しの動きもある。小西行長の正確な人間像が伝えられていないのが実情だ。敗死した武将の末路はあわれで、すべてが抹殺され、こき下ろされてしまっている（一方、加藤清正は神格化されているが、実際にそんなに凄かったのか！？）。その墓でさえもさだかではないのだ。

#### （1）生い立ちから秀吉の家臣となるまで



宇土城址の銅像（熊本県宇土市）

永祿元年（1558）、葉を主に扱う堺の商人・小西隆佐の次男として京都で生まれ、岡山の商人の家に養子として入り、商売のために度々宇喜多直家の元を訪れていた。その際、直家に才能を見出されて拔擢されて武士となり、家臣として仕えた。羽柴秀吉が播磨国三木城攻めを行っている際、直家から使者として秀吉の許へ使わされ、秀吉と出会う。この時、秀吉からその才知を気に入られ、臣下となった。豊臣政権内では舟奉行に任命され、水軍を率いていた。

宇喜多直家の目利きも凄いが、秀吉も人を見る眼があつて、天下人となる秀吉との出会いが、行長の運命を一気に開くことになる。

#### （2）キリシタンとなる

天正12年（1584）には高山重友（右近）に後押しされたこともあつて洗礼を受け、キリシタンとなった。このあと、死ぬまで一貫してキリシタンとして活動することになる。

しょうど

天正13年（1585）小豆島で1万石を与えられた。小豆島は瀬戸内海の交通の要地で、岡山と淡路島の中間にある大きな島（現、香川県小豆郡）。行長は水軍を預けられていたため、同地に封じられた。小豆島ではセスベス司祭を招いてキリスト教の布教を行う傍ら、島の田畑の開発を積極的に行った。また、天正15年（1587）のバテレン追放令の際に改易となった高山右近を島にかくまい、秀吉に諫言している。これは、非常に勇気のいる行為であろう。まだこの頃の秀吉政権では、秀吉対個人の関係が緊密であつたし、行長が秀吉の信頼を得ていたから、それができたのかも知れない。

#### （3）肥後半国に入封

天正15年（1587）の九州征伐、翌年の肥後国人一揆の討伐に功をあげ、肥後の南半分、宇土、益城、八代の20万石あまりを与えられた。行長は弱冠30歳で、摂津守に任ぜられて、宇土城主として一躍二十四万石の領主となった。異数の拔擢と言わねばならない。秀吉は、後の朝鮮出兵を視野に入れて、水軍を統率する行長を肥後に封じたという。宇土城を新規に築城し、本拠とした。



宇土城のイメージ図（現代の地図と重ねたもの）

その宇土城普請に従わなかった天草五人衆と戦いになり（天草国人一揆）、これを加藤清正（肥後国の北半分の領主）らとともに平定、天草1万石余も所領となった。

このころ天草は人口の3分の2にあたる2万3千人がキリシタンであり、60人あまりの神父、30の教会が存在したという。志岐氏の所領である志岐（熊本県天草郡苓北町志岐）には宣教師の要請によって画家でもあるイタリア人修道士ジョバンニ・ニコラオが派遣され、ニコラオの指導下で聖像学校が営まれ、油絵、水彩画、銅版画が教えられ聖画・聖像の製作、パイプオルガンや時計などの製作が行われていた。学校は後に、文禄3年（1594）有馬半島八良尾のセミナリオと合併し規模を拡大したが、これらイエズス会の活動に行長は援助を与え保護した。

行長の宇土城は水城として優れた機能を持っていたといわれる。運河と川で海につながっていたと思われる（海まで6kmほどの距離）。

ちなみに、宇土城は関ヶ原の戦い後に肥後一国の太守となった加藤清正の隠居城として知られている。

このほか、秀吉の意を受け、水軍指揮と海外貿易の適地であつた八代に麦島城を築城し、重臣の小西行重を城代として配置した。フロイス「日本史」には、八代の古麓一帯の風趣を「この地がいかに美しく、清らかで、（また）優雅で豊饒であるかは容易に説明できるものではない」と感嘆している。フロイスの叙述は自然についての描写を欠いているといわれるが、古麓城からの遠望によりど心を動かされたものと思われる。「見渡す限り、小麦や大麦の畑が展開し、清浄で優雅な樹木に蔽われた森には、多くの寺院が散見し、小鳥たちの快いさえずりが満ち溢れている」と称賛している。



麦島城

八代城と麦島城は前川と挟んで建てており、麦島城は船で八代海に出ることができた。しかも八代海は、九州全土と天草上島に挟まれた内海で、湖面を行くような思いをさせる。球磨川から押し流す泥土で、数キロの沖合まで遠浅になっている。ちなみに、対岸に立つ八代城は細川忠興の隠居城として知られている。

また、秀吉から追放処分となった高山右近の旧臣の多くが家臣に取り立てられた（同じキリシタン大名として高山右近を匿った縁もあり）。

バジェスの『日本切支丹宗門史』に「八代と野津の地方には、ドン・アウグスチノの家老で、一地方を治めていたヤコボ美作殿の命令によって、新たに14の天主堂ができた。ある大寺の長老であった一老僧は、偶像を破壊して、そこを天主堂にした」

「実際八代の一地方だけで、2万5千人の人々が洗礼を受け、國中一体が殊勝な道德の中心となった」

と当時のキリシタンの盛況ぶりを伝えている。

しかし、残りの肥後北半国を領した清正と次第に確執を深めることになる（それが秀吉の狙いだったともいわれている）。清正は日蓮宗の信者で、賤ヶ岳七本槍の一人として武功を挙げ、薬問屋出身の行長を「薬屋のせがれ」だと馬鹿にしていたという。

#### （４）朝鮮の役に対する態度

文禄の役に際しては、義理の息子対馬の宗義智らとともに、破竹の勢いで首府漢城を落とした。明の援軍に敗れて平壤を追われ、日本側が碧蹄館の戦いで明軍を破ると戦況が膠着し、講和交渉を主導する。しかし、秀吉の強い怒りを買ひ、死を命じられた。承兌や前田利家、淀殿らのとりなしにより一命を救われる。

行長自身もこの出兵には理がないとして、一刻も早く終わらせようとしたのであった。

「彼は、ただ朝鮮が再び受ける危難を回避させるとともに、このむなしい侵略を一刻も早く終わらせるために、族滅の危険を冒してまで朝鮮に（講和の）書状を送ったのである。

行長の過去を見れば、幼いときから京都の教会で宣教師から受けたキリスト教の理念による薫陶を考えざるをえない。いのちの尊厳の認識と目先の利害を超えての人間愛である。

行長をして、秀吉に対する欺瞞をおそれず、講和の道を探るため手段を選ばず狂奔させたのは行きがかりとか貿易の利の追求もあっただろうが、その根底には平和を求める固い信念があったというべきで、この時代の範疇を超えた人間性を見るのである。」（木村紀八郎著「小西行長伝」）

とあるように、講和交渉を主導したこと背景にキリスト教の人間愛（隣人愛）があったという説もある。この立場から、大義が見いだせない戦さを早く終わらせようとしたことになろう。朝鮮での戦いは義にあらずとしてむしろ朝鮮側に立った日本の武将が少なからずいて、行長のほかに、和平の使節として明に赴いた内藤如安（Q18の4参照）、朝鮮に出兵しながら戦わなかった志賀親次（大友家家臣で秀吉から天正の楠正成と称えられた。Q18の5参照）などがいる。

その後、慶長の役でも再び出兵を命じられ、講和交渉における不忠義の埋め合わせのため、武功を立てて罪を償うよう厳命されている。

#### （５）秀吉の死、関ヶ原

慶長3年（1598）8月に秀吉が死去すると、行長は12月に帰国する。その後は寺沢正成とともに徳川家康の取次役を勤めるなど、むしろ家康との距離を近づけているが、慶長5年（1600年）の家康による会津征伐に際しては上方への残留を命じられた。その後に起こった関ヶ原の戦いでは、石田三成に呼応し西軍の将として参戦する。

9月15日の関ヶ原本戦では、東軍の田中吉政、筒井定次らの部隊と交戦して奮戦。しかし小早川秀秋らの裏切りで大谷吉継隊が壊滅すると、続いて小西隊・宇喜多隊も崩れ、行長は伊吹山中に逃れた。19日、関ヶ原の庄屋・林蔵主に匿われた。行長は自らを捕縛して褒美をもらうように林蔵主に薦めたが、林はこれを受けず、竹中重門家臣の伊藤源左衛門・山田長之丞兩名に事情を話し、共々行長を護衛して草津の村越直吉の陣に連れて行った。

10月1日に市中引き回しのうえ、六条河原において三成・安国寺恵瓊と共に斬首された。その際、行長はキリシタンゆえに浄土門の僧侶によって頭上に経文を置かれることを拒絶（一説には、石田三成も拒絶）。ポルトガル王妃から贈られたキリストとマリアのイコンを掲げて三度頭上に戴いたあと首を打たれたと伝えられる。処刑後、首は徳川方によって三条大橋に晒された。死に臨んで告悔の秘蹟を同じキリシタンであった黒田長政に依頼したが家康の命もあって断られ、処刑当日も司祭が秘蹟を行おうとしたが接近できず受けることができなかったという。

遺体は改めて秘蹟を受けた上で絹の衣で包まれ、カトリックの方式で葬られた。教皇クレメンス8世は行長の死を惜しんだと言われる。

宣教師の記録にも、旧小西領を占領した加藤清正の命令で投獄された肥後の宣教師の釈放を、官兵衛が清正に働きかけたところ。釈放に成功し、セルケイラ司教や準管区長バジロは、官兵衛に感謝状を送り、官兵衛こそ小西行長に代って、日本のキリシタンの柱石と保護者になるようにと期待していたと記録されている（一六〇一年二月二十五



日、長崎発、カルヴァリヨの書簡)。つまり、教団側は行長に期待をしていたことが読み取れる。

しかし、行長のイメージは芳しくなく、戦国武将としての人気あまりない。なぜなのでしょう。

## (6) 行長のイメージって

従来は、勇敢な加藤清正とは対照的に卑劣な武将として描かれることが多かったということもその理由の一つだ。これは、明治時代以降に於ける喧伝やイメージ操作が影響している。

従来のイメージは、

- 勇敢な加藤清正とは対照的に卑劣な武将だった(朝鮮の役で和睦を画策したから)。
- 行長がキリシタンとして肥後領内で寺社勢力を弾圧した。
- 信仰と政治を両立させた行長の姿勢を秀吉に対する「面従腹背」であると強調している(遠藤周作『鉄の首枷』)

なぜ、悪いイメージがついてしまったのか。

- 明治に入り、日本帝国主義の勃興期において、好戦派として神格化されていく加藤清正の対立軸として、講和派の行長が語られ、悪者とされた。
- さらに17世紀初頭には行長の末路を神仏の罰とする理解があり、時代が進みキリスト教禁教が徹底されるにしたがって、「キリシタンだったから寺社を弾圧した」とする誤った行長評が寺社サイドから喧伝された。

しかし、実像は違っていたかも知れない。

関ヶ原の戦いで西軍に与して徳川家に弓を引いたとはいえ、江戸時代前期には「行長豪勇にして、機警あり、好んで兵書を読み、策略に長ぜり」(小瀬甫庵『太閤記』)などと、その才能は高く評価されていたのだ。

秀吉に対する「面従腹背」の背景は、行長の姿勢はむしろ「政教分離」を確立し、伴天連追放令の下でキリシタンの活動を継続させるための現実的な選択であった。政治に介入しない限り、宗教活動は黙認されることを計算していたことにあったのだろう。

また、行長が、領内の神社仏閣を焼却したということが、早くから喧伝されていたが、それは誇大な宣伝にすぎないという説がある。例えば、領内現小川町の正善寺が行長から焼き払われたといわれているが、寛永11年(1634)に建立された同寺が慶長5年(1600)に没した行長によって焼かれるはずはないという。そもそも、秀吉の寵臣であった行長が、領内の寺院を焼くという暴挙をするはずがない。

いずれにしてもモノはいいようで、良くないイメージも見方によっては、全く違って見える。近年では、行長のイメージの転換を図る動きがある。光があれば影がある、ということなのだろう。

## (7) 所見

関ヶ原の戦いの前には家康に接近したこともあったが、西軍についてしまった。なぜ、西軍だったのか、最大の理由は、東軍についた加藤清正との長年の確執であったと思われる。熱心な日蓮宗徒の加藤清正とは反りが合わず、領国は隣同士であり、境界線争いが絶えない関係で、朝鮮の役でも競争心むき出しだった。よって、清正と三成が敵対すれば行長が三成側に付くのは自然だったと思える。

そもそも、行長と清正の対立は根深いものがあり、

①両方とも肥後を領地としていて、領地の境界線での争いがたびたびあった

②清正は、堺の葉問屋の生まれであった行長を「葉屋の仔倅(こせがれ)」と公言してバカにしていた

③両者は、文禄の役(第一次朝鮮出兵)の際に釜山浦に一番乗りしたという軍功を争ったが、行長軍は清正軍を出し抜く形で上陸を果たしたために、「七本槍」の一員として武断派の代表格であった清正の面子が丸つぶれになった

④行長は、清正暗殺を画策し、清正軍の行動を朝鮮側にリークしたが失敗した

⑤慶長の役(第二次朝鮮出兵)時に作戦を巡って行長と清正は激しく対立した

⑥熱心な日蓮宗信者で、他宗派に対して排他的な考えの強い清正は、キリシタンである行長を快く思っていなかった

などが挙げられる。

行長は、決して石田三成のような文治派の秀吉新習ではなく、むしろ強力な水軍を持つ大名だった(関ヶ原の戦に際しては、家康は強力な水軍を率いる行長を取り込もうと画策)。

三成とは、慶長の役での戦局不利を見越して朝鮮側との講和を画策した頃から急速に接近しており、この頃の縁がきっかけで西軍に与したともいわれる。

この行長の判断を、結果を知っている我々が誤りだったとはいえないだろう。三成の周旋により毛利輝元を筆頭に、宇喜多秀家、上杉景勝などを味方にしており、兵力的には拮抗していた。実際に、関ヶ原の本戦においても、東軍に徳川秀忠の遅参があったとはいえ、小早川秀秋の寝返りがなければ、西軍は優勢だったとも言われていた。半日で決着することは予測不能であった。長期戦になれば、違った展開になっていただろう。行長が西軍についたことは重大な予測誤りだったとはいえない。

もし、西軍が勝てば加藤清正が改易になり、肥後一国は行長のものになったであろうし、そうなれば、キリシタン側としてもよかったはずだ。



領内での神仏排撃も実は行っておらず、混乱を招いていなかった。

ただ、人間関係、特に、清正との対立が彼の選択肢を狭めてしまった。官兵衛の場合には、三成らとの確執があったと言われていとはいえ、自ら選択肢を狭める行動をとっていない。

## （８）彼の一族

参考までに、キリシタン一家だった彼の一族についても述べてみたい。

### ① 小西隆佐（父）

隆佐は堺の豪商で、豊臣秀吉の家臣であった。「立佐」とも言われる。

永禄8年（1565）、ルイス・フロイスの師事を受けてキリシタンとなった（洗礼名ジョウチン）。天正13年（1585）から秀吉に仕え、河内国・和泉国における豊臣氏の蔵入地の代官に任命された。天正15年（1587）の九州征伐では兵糧の補給役を命じられている。

これらの功績から、天正18年（1590）、法眼に任じられた。天正20年（1592）、朝鮮出兵が始まると肥前名護屋城に入るが、まもなく発病して京都に戻り、そのまま死去した。

### ② 母

熱心なキリシタンで洗礼名はマグダレーナ。秀吉の正室北政所に仕え、佑筆をしていたといわれているが定かではない。夫隆佐の建てた病院に訪れて、ライ病の人に、いつも暖かく手当てをしていたという。

### ③ 菊姫（正室）

夫と同様に熱心なキリシタンであった（洗礼名ジュスタ）。美津は岡山で育った。岡山の呉服商納屋弥九郎右衛門に、堺の薬種問屋の次男坊だった行長が婿養子に入ったときに結婚した。のちに、行長が関ヶ原の戦い後に斬首されたあと、家康に許されたとのみ伝えられており、その後の消息は分からない。

なお、行長には他のキリシタン大名と同様、側室はいなかった。

### ④ 妙（娘、宗義智正室）

洗礼名マリア。関ヶ原の戦い後、直ちに離縁・対馬から追放された。追放後は長崎の修道院に匿われていたが間もなく家康によって大赦される。慶長10年（1605）、病没したという。

### ⑤ 小西如清（行長の同母兄）

小西隆佐の長男。生没年不詳。豊臣氏の家臣。

天正7年（1579）、キリシタンとなった（洗礼名ベント）。文禄3年（1594）、豊臣秀吉より生前に父が歴任していた堺代官に任じられ、石田三成の兄正澄と連携して職を果たした。関ヶ原の戦いの後に捕えられたと記す記録があるが、その最期は明らかでない。

### ⑥ 小西行景（行長の同母弟）

兄・行長が南肥後半国を与えられると5,000石を与えられ宇土城代とされた。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦いでは兄の留守中の宇土城を守備し、加藤清正が来襲すると麦島城の小西行重、薩摩島津氏に援軍要請の使者を差し守りを固めた。この使者は加藤軍に捕らえられたため連携は阻止されたものの、加藤家重臣で水軍を率いた梶原助兵衛を海戦で撃破、討ち死にさせるなど善戦した。その采配は敵方からも高く評価されたという。

行景は10月まで持ちこたえたが、10月20日行長家臣の加藤内匠、芳賀新伍の両名が行長自筆の書状を持って宇土に到着、西軍が大敗したことを伝え、家臣全員の助命を条件に23日開城、翌24日熊本城下の下河元宜の屋敷で切腹した。

忠右衛門と七右衛門の男子2人がおり、忠右衛門は小西家臣白井某によって宇土落城の際に鹿本へ落ちのびた。忠右衛門の子孫は小材氏として、七右衛門の子孫は津田氏として、それぞれ武家として存続した。

とのものすけ

### ⑦ 小西主 殿 介（行長の異母兄）

小西隆佐の子、小西行長の異母兄。父は小西隆佐。母は不詳。子に小西忠右衛門。官途は主殿助との表記もある。実名は不詳。洗礼名ベトロ。

小西行長の庶兄で、行長が肥後宇土城主となると隈庄城を預けられ城代となる。子の小西忠右衛門も城代となったという。天正17年（1589）天草五人衆の反乱では先鋒を任された。

主に島津氏との外交を担当したらしく、文禄2年（1593）12月28日付けの島津義弘宛書状、慶長元年（1596）7月9日付けの島津忠恒宛て書状に「主殿助行□」と署名している。後者には小西末郷（名は直好とも）の名も見える。

文禄の役当時は1万石を領して一門最高の禄高を有し、渡海して外甥にあたる宗義智とともに梁山城を攻略する手柄を立てている。慶長の役における秀吉死後の撤退戦に際して、行長を逃がすため鷹塚忠右衛門（小西行長家老）、小西末郷らと兵500で殿軍を務め、2万の敵軍に立ち向かい戦死した（『関ヶ原大全 三』）。

### ⑧ ジュリアおたあ（養女）

ジュリアは洗礼名、おたあは日本名。文禄の役の際に連れて帰った朝鮮人女子（両班の出身とも）。一説には、関ヶ原の戦い後、駿府城の大奥で侍女として仕えたという。しかし、おたあがキリスト教を棄てないため、伊豆の神津島に流れ同地で亡くなったという。

#### ⑨ マンショ小西（孫）

小西マリア（妙）の子で対馬に生まれた。行長が関ヶ原の戦いで処刑されたため、夫の宗義智から離縁され、小西母子は九州に追放された（Q18の3宗義智参照）。そのため彼は宗義智の子と認知されず母方の姓を名乗ったとされる。母の影響で島原半島八良尾のセミナリオでキリスト教を学んだ。

慶長19年（1614）の禁教令でマカオに追放された後、ペトロ岐部、ミゲル・ミノエスとともにインドのゴアに渡るが現地のカルヴァリヨ管区長の日本人への偏見のため受け入れを拒否される。この間、原マルティノ（Q18の5）の支援を受けた。その後海路でアフリカ喜望峰を経てポルトガルに到着、コインブラ大学で学んだ。ペトロ岐部が司祭となってポルトガルに赴いた際にはまだサン・ロケ教会の学舎で学んでおり、岐部は現地の司祭に彼のことを頼んでいる。その後ローマに渡り元和10年（1624）8月28日イエズス会に入会を認められ、聖アンドレ修練院で学んだ。経済的に恵まれていたらしく、入学時の所持品記録には多くの衣類の記載がある。履修科目は神学と人文学であった。寛永4年（1627）司祭の位を得た。

寛永9年（1632）に海路から日本に帰国し畿内で布教活動を行った。このとき日本国内に存在していた司祭の中では序列第4位に位置付けられており、上位3人が殉教した場合には日本管区を引き継ぐことになっていた。彼を含む4人の日本人司祭は資格が不足していたためその場合でも管区長とはならず、上長となることが巡察師ディアスの書簡に記されている。正保元年（1644）捕縛され高山右近の旧領音羽で処刑され殉教した。殉教地は飛騨高山ともいう。彼の死によって日本国内に正式に叙階されたカトリックの日本人司祭は存在なくなり、以後明治時代まで日本人司祭は誕生しなかった。

#### 4・蒲生氏郷はキリシタンとしてどう生きたか



氏郷は、信長に才能を見込まれ、秀吉の寵愛を受けたが、文禄の役で名護屋城に在陣した際に40歳で病死した。

##### (1) 生い立ち

弘治2年(1556)、近江蒲生郡日野に六角氏の重臣蒲生賢秀の嫡男として生まれる。幼名は鶴千代と名付けられた。

信長は氏郷の才を見抜いたとされ、娘の冬姫と結婚させた。信長自ら烏帽子親となり、岐阜城で元服し、織田氏の一門として手厚く迎えられた。

武勇にも優れ、永禄11年(1568)の伊勢国の北畠具教・具房との戦いにて初陣を飾ると、永禄12年(1569)の伊勢大河内城の戦いや元亀元年(1570)の姉川の戦い、天正元年(1573)の朝倉攻めと小谷城攻め、天正2年(1574)の伊勢長島攻め、天正3年(1575)の長篠の戦いなどに従軍して、武功を挙げている。

天正10年(1582)、信長が本能寺の変により自刃すると、安土城にいた信長の妻子を保護し、父賢秀と共に居城・日野城(中野城)へ走って明智光秀に対して対抗姿勢を示した。光秀は明智光春、武田元明、京極高次らに近江の長浜、佐和山、安土の各城を攻略させ、次に日野攻囲に移る手筈だったが、直前に山崎の戦いで敗死した。

##### (2) 秀吉政権下で洗礼を受ける

その後、羽柴秀吉(豊臣秀吉)に仕えた。秀吉は氏郷に伊勢松ヶ島12万石を与えた。秀吉に従い、天正12年(1584)の小牧・長久手の戦いに従軍。同年に、秀吉から「羽柴」の苗字を与えられる。

ルイス・フロイスのイエズス会日本年報によると、このころ、高山右近らの影響で大坂においてキリスト教の洗礼を受けた。

天正13年(1585)の紀州征伐(第二次太田城の戦い)、天正15年(1587)の九州征伐や天正18年(1590)の小田原征伐などにも従軍する。また、天正13年(1586)には従四位下・侍従に任じられる。その間、天正16年(1588)には飯高郡矢川庄四五百森(よいほのもり)で新城建築のための縄張りを行い、松坂城を築城。松ヶ島の武士や商人を強制的に移住させて城下町を作り上げた。同年4月15日、正四位下・左近衛少将に任じられる。豊臣姓(本姓)を与えられる。

一連の統一事業に関わった功により、天正18年(1590)の奥州仕置において伊勢より陸奥会津に移封され42万石(のちの検地・加増により92万石)の大領を与えられた。これは奥州の伊達政宗(会津は伊達政宗の旧領)を抑えるための配置であり、当初細川忠興が候補となったものの辞退したため氏郷が封ぜられたとされる。

##### (3) 会津入国

会津においては、町の名を黒川から「若松」へと改め、蒲生群流の縄張りによる城作りを行った。なお、「若松」の名は、出身地の日野城(中野城)に近い馬見岡綿向神社(現在の滋賀県蒲生郡日野町村井にある神社、蒲生氏の氏神)の参道周辺にあった「若松の杜」に由来し、同じく領土であった松坂の「松」という一文字もこの松に由来すると言われている。

7層の天守(現存する5層の復元天守は寛永年間に改築されたものを元にしている)を有するこの城は、氏郷の幼名にちなみ、また蒲生家の雉鶴の家紋にちなんで鶴ヶ城と名付けられた。

また、築城と同時に城下町の開発も実施した。具体的には、旧領の日野・松阪の商人の招聘、定期市の開設、楽市楽座の導入、手工業の奨励等により、江戸時代の会津藩の発展の礎を築いた。

以降は、伊達政宗と度々対立しながらも、天正19年(1591)の大崎・葛西一揆(この際秀吉に対し「政宗が一揆を扇動している」との告発を行っている)、九戸政実の乱を制圧。同年12月、従三位参議に任じられた。

氏郷は、武道ばかりだけでなく、文人でもあった。茶道では利休の七哲の一人に数えられ、千利休が、秀吉の怒りにふれ亡くなると、その子、少庵を会津領内に保護し、その後の茶道三千家への道筋をつくっている。

##### (4) 天下への大望

氏郷は、戦上手な上に行政手腕に長けており、家臣の信頼も厚かったのですが、それに加えて諸大名の人も望も厚かったようで、早死にしていなければ、徳川家康や前田利家などと共に五大老に名を連ねていたのではないかと評されており、作家・海音寺潮五郎氏も、「信長、秀吉、家康を別にすれば、あと天下をとれたのは黒田如水(黒田孝高)か蒲生氏郷」と言っているほどだ。

また、宣教師たちの間でも蒲生氏郷の評価は非常に高く、ルイス・フロイスは、氏郷のことを「彼は主要な人物の一人で、今日までこの地方でキリシタンになった者のうち、最も貫禄ある人物である。」と述べ、オルガンチノも「素晴らしい人気を博せる一人の大名」、「王(秀吉)が子孫に長く天下を保たしめるのに頼みとすべきは、彼(氏郷)のほかにはないと思っていた」と述べている。

そのような氏郷は天下への野心を抱いていたようで、次のような逸話が伝えられている。

あるとき、豊田秀吉が側近を集め、秀吉亡き後、誰が天下人になるかを皆で語ったことがあった。

血統と年齢の順でいえば、秀吉の甥で養子の豊臣秀次が順当といえた。

しかし、氏郷は秀次のことを「かの愚人に従ふ者、誰かあらん」と酷評した。

そこで、255万石の大大名・徳川家康の名を出すと、「かの人は吝嗇（りんしょく）。「けち」の意）に過ぎる。天下を得べき人にあらず」と評した。

次に、家康に次ぐ実力者である加賀の前田利家の名を出すと、氏郷はようやく領き、「加賀少将（前田利家）は御高齢。もし「利家が天下を」得ずば、我が得るべし」と言ったといわれている。

後世の創作の感もあるが、秀吉やその側近たちが危険視した、あるいは、家康をはじめとする五大老がライバル視したことはあっただろう。

## （５）その死

文禄元年（1592）の文禄の役では、肥前名護屋へと出陣している。この陣中にて体調を崩した氏郷は文禄2年（1593）11月に会津に帰国したが病状が悪化し、文禄3年（1594）春に養生のために京都に上洛し、秋には秀吉をはじめ諸大名を招いた大きな宴会を催した。しかしこの頃には病状がかなり悪化して誰の目にも氏郷の重病は明らかで、秀吉は前田利家や徳川家康にも名のある医師を派遣するように命じ、自らも曲直瀬道三（キリシタンであった）を派遣している。

その死は、医者曲直瀬玄朔（道三の養子）によれば、血を吐き、顔は青く、身はやせ細ったという。今で言うところの直腸ガン、大腸炎、胃ガンなどと言われている。高山右近は氏郷の臨終に際し、その枕元にあって聖像をかかげてコンチリサン（完全なる懺悔）を行い、パライズ（天国）の快樂（けらく）に至ることを説いたといわれている。

今日では病死説が定説になってきている。曲直瀬玄朔の『医学天正記』に氏郷の病状が記されており、その中で玄朔は氏郷の担当医でもないのに、氏郷の病態と死に関して長々と筆を走らせている。そのには当時から出ていた氏郷の死を巡る疑惑に応えたものだったかもしれない。

しかし、だがそこには若干不審に思われるところがある。

それは、氏郷が名護屋で発病した際に、玄朔は朝鮮にいて不在。堺の宗叔の薬で快方に向かう。翌冬に秀吉の命で9人の医師が、病状の悪化した氏郷を診断、玄朔を含む8人が重体と診断するなか、担当医の宗叔のみが軽症と判断。前田利家が玄朔に治療を命じるが玄朔はこれを拒否。結局死の間際まで宗叔が施薬し氏郷は逝去してしまう。

このことから宗叔の誤診または効果のない薬を与え続けられていた可能性がある。氏郷の病に対して最善の方法が採られていたとは思えない。

この不自然さが謀略だとしたら、誰が黒幕なのか。秀吉か、石田三成か、家康か、上杉景勝か・・・豊臣政権の行く末を警戒した秀吉または三成の謀殺、逆に豊臣政権の弱体化を狙った家康の謀殺、氏郷の死後に会津に入封した上杉景勝、ライバルの伊達政宗か、いろいろな可能性が出てくる。キリシタン大名の中では氏郷が一番強大であったとはいえ、氏郷はキリシタンとしての活動を表立って活動していないので、キリシタンとして抹殺されたわけではないだろう。

この蒲生氏郷の死はその後の豊臣の政局にも大きく影響を与える。本来ならば五大老の中に氏郷が入り、豊臣政権を支えるはずだった。結局、小早川隆景も卒中で倒れてしまい、前田利家も病によりこの世を去り、家康だけが生き残る。家康にとって居ては都合の悪い人物だけが次々と亡くなっていつている。このことはあまりにもよく出来すぎているように感じられ、何者かの手が関与しているように思える。氏郷の類まれな才能は陽の目を見ることなく、この世を去ることになる。

辞世の句は「かぎりあれば 吹かねと花は 散るものを 心みしかき 春の山風」と詠み、悲観したようすが伺える。「風など吹かなくても、花の一生には限りがあるので、いつかは散ってしまう。それなのに春の山風はなぜこんなに短気に花を散らしてしまうのか。」文禄4年（1595）2月7日、伏見の蒲生屋敷において、病死した。享年40。

## （６）会津のキリシタン

氏郷は、高山右近（たかやまうこん）や前田利家とも親しくキリシタン大名として、南蛮文化を取り入れた。会津若松城内には、国重文で神戸市立博物館とサントリー美術館に分かれて所蔵されている「泰西王侯騎馬図」が幕末の戊辰戦争まで城内にあり、その後、新政府軍の手に渡っている。



（上）神戸市立博物館

泰西王侯騎馬図左から聖型ローマ皇帝ルドルフ2世、トルコのスルタン、モスクワ大公、タタール大汗を動的に描く。ルドルフ2世は反宗教改革を推進者し、イエズス会と思想的に近い関係にあったことから、本図の成立にあたり大名家への贈答品として日本での布教を意図したイエズス会の関与が指摘されることがある。

（下）サントリー美術館

イスパニア国王、フランス国王、アビシニア皇帝、ベルシヤのシャーを静的に描く。

イタリア人宣教師を家臣とし、ローマへ使節団を送ろうとしたという。天正18年（1590）には、巡察師のヴァリ



ニアノが帰国する際には、伴天連追放令の下、「デウスが唯一の神である」と言い人々を驚かせたという。

城下には、教会が建てられ、氏郷の親戚で「パウロ・モーン」(蒲生郷安(米沢14万石の城主)、または、氏郷の妹を妻とした小倉作左衛門但馬(1万石城主))ら重臣の中にもキリシタンが多かった。

猪苗代にはセミナリオ(神学校)が磐椅神社南に建てられ(その跡には神社が建てられている)たど盛んであった。

## (7) 所見

秀吉の寵愛を受け政権の中樞にいた氏郷は、それなりにうまく立ち振舞ったと思われるが、本人からしたら辞世の句に見られるように、不本意な死であつたに違いない。すでに述べたように、まだ若かつたし、その器量を危惧されたか、政治の暗闘に巻き込まれた可能性もあるだろう。氏郷の死後に宇喜多家と同様に家中に騒動が起きる。このあたりは、きな臭さを感じる。誰が得をしたかという、呪郷の上杉家が会津に封じられたことになった石田三成と、蒲生秀行を味方に引き入れた家康ということになるだろう。

ただ、氏郷がキリシタンだったから、標的となった可能性はあつたのだろうか。その点については、否定はできないが、立証が難しい。氏郷自身は高山右近のような熱心なキリシタンではなかったようであるから、可能性は低いだろう。今後の研究を待ちたいところだ。

## (8) 彼の一族

参考までに、彼の一族についても述べてみたい。

### ① 秀行(子)

天正11年(1583)、蒲生氏郷の嫡男(次男あるいは長男)として生まれる。生来から病弱であつた。キリシタン大名だったともいわれ、統治した宇都宮や会津にはキリシタンとしての足跡が残されているようだ。

文禄4年(1595)、父・氏郷が急死したために家督を継ぐ。この時、羽柴の名字を与えられた。遺領相続について、太閤・豊臣秀吉の下した裁定は、会津領を収公して、改めて近江に2万石を与えるというものだったが、関白・豊臣秀次が会津領の相続を認めたことにより、一転して会津92万石の相続を許された。

その後、秀吉の命で徳川家康の娘・振姫を正室に迎えることを条件に、改めて会津領の相続が許されたが、まだ若年の秀行は父に比べて器量に劣り、そのため家中を上手く統制できず、ついには重臣同士の対立を招いて御家騒動(蒲生騒動)が起こった。

慶長3年(1598)3月、秀吉の命令で会津92万石から宇都宮18万石で移封された。理由として、先述の蒲生騒動の他に、秀行の母すなわち織田信長の娘の冬姫が美しかったため、氏郷没後に秀吉が側室にしようとしたが冬姫が厄になって貞節を守った事を不愉快に思った説、秀行が家康の娘(家康の3女の振姫(正清院))を娶っていた親家康派のため石田三成が重臣間の諍いを口実に減封を実行し上杉景勝を会津に封じるように仕向けたとする説もある。

慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いで上杉景勝を討つため、徳川秀忠は宇都宮に入った。その後、秀忠も家康も西に軍を向けて出陣したため、秀行は結城秀康とともに本拠の宇都宮で上杉景勝の軍の牽制と城下の治安維持を命じられた。

戦後、その軍功によって、没収された上杉領のうちから陸奥に60万石を与えられて会津に復帰した。秀行は家康の娘と結婚していたため、江戸幕府成立後も徳川氏の一門衆として重用された。

しかし、会津地震や家中騒動の再燃なども重なり、その心労などのため、慶長17年(1612)5月14日に死去。享年30。跡を長男の忠郷が継いだ。

器量においては凡庸という評価がなされているが、父は氏郷、母は信長の娘、正室は家康の娘という英雄の血を受け継いだ貴公子であつた。蒲生騒動の背景には、蒲生氏の減移封を目論んでいた秀吉及び石田三成らが騒動を裏で操って秀行を陥れたという説もあり、秀行の年齢・器量のみが原因と断定するには疑問が残る(蒲生騒動を参照)。

### ② 冬姫(妻)

冬姫は、織田信長の次女。彼女自身はキリシタンにならなかった。

永禄12年(1569)、近江六角氏の旧臣の蒲生賢秀が信長に臣従したとき、信長は賢秀の子・氏郷(当時は鶴千代)を人質として取つたが、その鶴千代の器量を早くから見抜いて、冬姫を与えて娘婿として迎えた。氏郷と冬姫の関係は良好で、2人の間には息子の蒲生秀行と娘(前田利政室)をもうけている。

文禄4年(1595)、夫の氏郷が40歳の若さで他界する。

氏郷死後、氏郷と冬姫との子の秀行は会津から宇都宮12万石に減封・移封され、冬姫も共に宇都宮に移った。

冬姫は美男子であつた父・信長の血を濃く受け継いでいたらしく、類まれな美貌の持ち主だった。夫の死後のこと、その美貌とまだ34歳という若さから、女好きだった秀吉に自分の側室になるように望まれる。しかし冬姫は、夫との貞操を守るためにこれを拒否した。激怒した秀吉は、慶長3年(1598年)に氏郷の跡を継いで会津100万石の領主となっていた秀行に、下野宇都宮12万石への減転封を命じる。

表向きの理由は蒲生氏家臣団の争いと、秀行が若年であり会津の大領の地にはふさわしくないためとしているが、このとき蒲生氏の減封工作に巧みに動いたのが三成であつた。三成は蒲生より自分と親しい上杉景勝を会津に配置したいと考え、秀吉と三成の蒲生氏勢力削減政策の一環であつたとも言える。

関ヶ原の戦いで秀行が東軍に与して功を挙げたことから会津60万石に戻される。

しかし慶長17年(1612)に秀行が30歳の若さで死去し、その跡を継いだ孫の蒲生忠郷は寛永4年(1627)に25歳で死去した。

忠郷には嗣子がなく、蒲生氏は断絶しかけたが、冬姫が信長の娘であることと、秀行の妻が徳川家康の娘（秀忠の妹）振姫であったことから特別に、冬姫の孫に当たる忠知（忠郷の弟）が会津から伊予松山藩20万石へ減移封の上で家督を継ぐことを許された。その忠知も、寛永11年（1634）に嗣子なくして早世し、結局、蒲生氏は無嗣断絶となった。

冬姫は寛永18年（1641）5月9日、81歳で死去。

## 5・大村純忠

日本最初のキリシタン大名で有名である。戦国大名としての規模は小規模だが、キリシタンになった大名としてその名を残している。



### (1) 養嗣子になり家督相続

有馬晴純の次男で有馬家の出身。では、なぜ大村姓を名乗っているかという点、母が大村純伊の娘であったために天文7年(1538)に大村純前の養嗣子となり、天文19年(1550)に家督を継いだためである。純前には実子・又八郎がいたが(庶子、後の後藤貴明)、母親が身分の卑しいものであったため、嫡子にはせず、又八郎は杵島郡武雄城主の後藤氏に養子に出してしまった。これに不満を持った家臣も少なくなく、武雄城に移ったものもいたという。

このような経緯から貴明は純忠に恨みを抱き、一方の純忠も「実子をおしのけて家督を継いだ」というプレッシャーを一生感じ続けることになったといわれる。また当時の大村領は、肥前佐賀の龍造寺隆信などによる周囲の圧迫もあり、打開策を模索していた。その中で彼が見出した答えがキリスト教であった。

### (2) キリシタン大名へ

永禄4年(1561)、松浦氏の領土であった平戸港でポルトガル人殺傷事件が起こると、ポルトガル人は新しい港を探し始め、永禄5年(1562)、純忠は自領にある横瀬浦(現在の長崎県西海市)の提供を申し出た。イエズス会宣教師がポルトガル人に対して大きな影響力を持つていたことを知っていた純忠はあわせてイエズス会士に対して住居の提供など便宜をはかった。結果として横瀬浦はにぎわい、純忠のこの財政改善策は成功した。

永禄6年(1563)、宣教師からキリスト教について学んだ後、純忠は家臣とともにコスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受け、領民にもキリスト教信仰を奨励した結果、大村領内では最盛期のキリスト者数は6万人を越え、日本全国の信者の約半数が大村領内にいた時期もあったとされる。

### (3) 入信目的

純忠の入信についてはポルトガル船のもたらす利益目当てという見方が根強い。養子であり、家督を継いだいささつや反キリスト勢力との葛藤から不安定な家中で、近隣大名家との戦いのため、資金が必要だった。

ただ、記録によれば彼自身は熱心な信徒で、受洗後は妻以外の女性と関係を持たず、死にいたるまで忠実なキリスト教徒であろうと努力していたことも事実である。

一方で、キリシタンになった理由は弱小である自国を安定させるため、ポルトガルに頼って富や武器を手に入れるという打算的な目的があったとも伝わるが、次第に純粋な信仰に目覚めて側室とは離縁し、正室のおえんとキリスト教に基づく結婚式をやり直して一夫一婦制を守り続け、大村領民6万人をキリシタンに改宗させるなどしている。

### (4) 仏教や神道との対立

また、横瀬浦を開港した際も、仏教徒の居住の禁止や、貿易目的の商人に10年間税金を免除するなどの優遇を行っている。しかし、純忠の信仰は過激なもので、領内の寺社を破壊し、先祖の墓所も打ち壊した。また、領民にもキリスト教の信仰を強いて僧侶や神官を殺害、改宗しない殺害されたり土地を追われるなどの事件が相次ぎ、家臣や領民の反発を招くことになる。

### (5) 長崎の教会への提供

純忠に恨みを持つ後藤貴明は、純忠に不満を持つ大村家の家臣団と呼応し反乱を起こして横瀬浦を焼き払ったが、元亀元年(1570)に純忠はポルトガル人のために長崎を提供した。同地は当時寒村にすぎなかったが、以降良港として大発展していく。元亀3年(1572)には松浦氏らの援軍を得た貴明の軍勢1,500に居城である三城を急襲され、城内には女子供も含めて約80名しかいなかったが、援軍が来るまで持ち堪え、これを撤退に追い込んでいる。天正6年(1578)に長崎港が龍造寺軍らによって攻撃されると純忠はポルトガル人の支援によってこれを撃退した。その後、天正8年(1580)に、純忠は長崎港周辺をイエズス会に教会領として寄進した。

大村純忠は天正8年(1580)にイエズス会との間に次のような4項目からなる契約を交わしている(寄進状は天正8年4月27日付)。

1. イエズス会に長崎・茂木を永久に無償贈与する。
2. パードレ(司祭)が選んだ者に死刑を含む裁判権を与える(治外法権)。
3. 入港する船舶の入港税、停泊税を永久に与える。
4. ただし、ポルトガル船などこの港に入港する船からの物品輸入税は予に留保する。

末尾には純忠・喜前父子の洗礼名「ドン・バルトロメウ」と「ドン・サンチョ」の連署がある(長崎寄進状・ロー

マのイエズス会文書館所蔵)。

同様に、有馬晴信も領地の"浦上" (現、長崎市浦上) をイエズス会に寄進していた。これは従来日本でもよく行われていた、特定の寺社に土地を寄付する習慣とは異なった契約内容のものである。これ以降、長崎の地はイエズス会知行所となり政教の実権はイエズス会のものとなった。

## (6) 天正遣欧少年使節と晩年

巡察のため、日本を訪問したイエズス会士アレッサンドロ・ヴァリニャーノと対面し、天正10年(1582)に天正遣欧少年使節の派遣を決めた。純忠の名代は甥にあたる千々石ミゲルであった。

純忠にはそれぞれ洗礼名を持つ4人の息子、喜前(サンチョ)、純直(リノ)、純直(セバスチャン)、純栄(ルイス)がいた。しかし、天正4年(1576)～天正5年(1577)頃には龍造寺隆信の圧迫を受け、喜前を除く3人を人質に取るなど、ほぼ従属状態にあり、天正12年(1584)の沖田畷の戦いにも龍造寺方として従軍している。しかし、親族である有馬勢との戦いには消極的で空鉄砲を撃っていたといわれる。このため、龍造寺隆信の戦死後も、大村勢は島津氏の追撃も受けずに開放されたという。

天正10年(1582)当時の九州北部のキリスト教信徒数は、大友宗麟の治める豊後で1万2千人、大村純忠・有馬晴信が支配する大村で7万人、天草草原は2万人、長崎に1万5千人ほどであった。

## (7) 最期

天正15年(1587)3月、豊臣秀吉の九州征伐においては秀吉に従って本領を安堵された。ただし55歳の純忠は既に咽喉癌並びに肺結核に侵されて重病の床にあり、19歳の嫡子・喜前が代理として出陣している。病で衰えた純忠は神父を呼んで来世の事をたびたび話して欲しいと願い、それを聞きながら大いに満足して涙を流した。純忠は死を悟り、領内に拘束していた捕虜200名を釈放し、死去の前日には可愛がっていた1匹の小鳥を籠から出して空に放たせた。この時、純忠には既に病のために小鳥を放つ体力さえなく、侍女にそれを頼んだのだが、侍女は小鳥をぞんざいに扱ったため純忠は怒りをあらわにした。しかし怒る事は神の意思に反するとして純忠は侍女に立派な帯を与えて、「小鳥はゼウス様が作られたものであるから、予はそれを可愛がっている。それゆえ今後とも愛情をもって扱ってほしい」と述べたと伝わる。フロイス『日本史』に伝わる小鳥の話にもあるように、敬虔なキリシタンとして侍女に小さな命にも愛情を持つ人間であってほしいとの祈りがあったという。

天正15年5月18日(1587年6月23日)、坂口の居館において死去。パテレン追放令の出る直前に亡くなっている。

## (8) 所見

脆弱な勢力基盤を補うために宣教師に近づいて財政の立て直しに成功し、本領の確保に成功しているが、キリスト教の信仰を貫いたか、あるいは、キリスト教団に要請にしたがったか、キリスト教以外の信徒を迫害し、これがもとで領内に混乱をもたらした点は、官兵衛も聞いていたかも知れない。もし、聞いていたら反面教師となったに違いない。

## (9) 彼の一族

### ① 大村喜前(子)

永禄12年(1569年)、大村純忠の長男として誕生。洗礼名サンチョ。

豊臣秀吉の九州征伐で所領を安堵された。文禄元年(1592)からの朝鮮出兵にも出陣している。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは、東軍に就いたために所領を安堵された。

サンチョという洗礼名を持つキリシタンであったが、父の存命時代に、龍造寺隆信の圧迫があったとはいえ、キリシタンへの弾圧行為は確認されている(フロイス『日本史』)。

慶長7年(1602)、熱狂的な日蓮宗徒であった加藤清正の薦めもあってキリスト教を捨てて日蓮宗に改宗し、領内におけるキリシタンを弾圧した。このため元和2年(1616)、それを恨んだキリスト教徒によって毒殺されたといわれている。なお、天正少年使節の副使・千々石ミゲルは従兄弟にあたるが、彼が棄教したのちも迫害を加えたという話がある。

なお、側室はいなかったようだ。

### ② マグダレナおえん(妻)

おえんは大村家と激闘を演じていた伊佐早(諫早)の西郷家から嫁いでいた。結婚当初はキリシタン改宗を頑なに拒んでいたが、長男喜前誕生によって変化が生じ、改宗した。そしてあらためてキリスト教式の結婚式をあげている。

夫純忠がキリシタンになったことによって、それまでいた側室と離縁したことは、正室であった彼女にとって喜びが体中を駆け巡るようなことだったに違いない。





キリシタン大名として知られる有馬晴信。はじめは父・義貞の時代に建てられた教会を破壊するなど、キリスト教とは距離を置いていた。その後、領土を守るための手段として晴信は洗礼を受ける。しかし、後年には心からキリスト教を信仰していくようになる。

また、海外交易で幅広い情報を手に入れていた晴信は、日本では数少ない国際的な視野を持つ人物でもあり、イエズス会や宣教師から重要視されていた。そのようなキリシタン大名・有馬晴信の半生を追う。

### (1) 受洗

元亀2年(1571)、兄の義純が死去したことにもない、晴信はわずか4才にして有馬家の家督を継ぐ。熱心なキリシタン大名として知られる晴信だが、最初からそうではなかった。父義貞は熱心なキリシタンであったが、領内ではキリスト教徒と仏教徒らの対立で混乱していた。洗礼を受けた父・義貞が病で床に伏せ、宣教師に会いたいと願ったときには、晴信はこれを拒んでいる。また、父の死後には教会や十字架などを破壊した。晴信ははじめ、キリスト教と距離を置いていた。

しかし、天正8年(1580)に洗礼を受けてプロタジオの洗礼名を持ち、熱心なキリシタンとなった。佐嘉の龍造寺隆信の勢力がいよいよ強くなり、有馬の地を脅かすようになると、晴信は一転して宣教師やイエズス会に支援を要請するようになる。ヴァリニャーノが天正7年(1579)に口之津に降り立った翌年には、自ら洗礼を受ける。このとき晴信は13才。まだ若い晴信が龍造寺氏に対抗するための軍事・経済力を手に入れるためには、イエズス会に支援してもらう必要があったのである。

このとき、側室がいたが、神父の説得にあっさりと同意して離縁している。

晴信はそれだけでなく、同じく龍造寺氏と対立していた島津氏にも助けを求めた。こうして晴信はイエズス会と島津氏のバックアップを受け、龍造寺氏に抵抗するようになる。龍造寺隆信は天正12年(1584)3月、数万におよぶ大軍を自ら率いて島原半島北部よりついに攻め込んだ。迎え撃つ有馬・島津連合軍はわずか6~8千余り。両軍は沖田畷(現在の島原市北門町付近)で対峙した。このときにはイエズス会が晴信に提供した大砲が大いに威力を発揮したといわれている。圧倒的に不利であったにもかかわらず、有馬・島津連合軍は隆信を打ち取ることができた。

晴信はこの戦いに勝利したことの恩賞として、当時領地として治めていた長崎の浦上村をイエズス会に寄進。浦上ではすでにキリスト教の布教が行われていたが、この寄進をきっかけに、より深くキリスト教が根付いていくことになる。

天正10年(1582)には大友宗麟や叔父の大村純忠と共に天正遣欧少年使節を派遣している。

晴信は龍造寺氏の脅威からは開放されたものの、今度は援助してもらった島津氏とイエズス会との間で板挟みになる。イエズス会は当初、浦上ではなく雲仙を恩賞として寄進するよう求めたが、島津氏がそれに猛反対した。薩摩の国と島津氏は仏教に深く帰依しており、もともと修験者の霊山だった雲仙において、僧院や仏像が再建されることを望んでいた。また、雲仙は火薬の原料となる硫黄の産地でもあったため、これが外国人の手に渡ることを恐れたとも考えられる。島津氏は折にふれてキリスト教を棄教するように晴信に勧告したという。

この窮地を救ったのは、同じキリシタン大名の小西行長だった。行長は所領の小豆島において司祭を招いてキリスト教を布教する一方、豊臣秀吉と諸大名を取り結ぶ役割も担っていた。晴信は彼を通して九州平定時に秀吉側についた。

こうして、龍造寺氏との戦いにおいても、九州平定時の島津氏との戦いにおいても、晴信を支えたのはキリスト教であった。戦国時代のめまぐるしく移り変わる勢力図のなかで、晴信はキリスト教に擦り寄ることで生き抜くことができた。

天正15年(1587)に秀吉が禁教令を出すまで、数万を超えるキリシタンを保護していたという。秀吉が禁教令を出したあと、晴信は苦境に陥った宣教師やセミナリヨを領内に引き受けて保護している。

その後も個人的にはキリスト教信仰を守り続けていた。

1590年8月13日には全国の宣教師が有馬領の加津佐に集まり、イエズス会総協議会が開催された。そこでは禁教下の布教方法として、天正遣欧少年使節が持ち帰ったグーテンベルク印刷機を用いてキリシタン版を印刷することが決定される。こうして日本初の金属活字本である「サントスの御作業(諸聖者の御作業)」が加津佐で印刷された。このようなイエズス会の活動は、海外交易を通して国際的な視野を持ち、かつキリスト教に厚い信仰を寄せる晴信の領地だからこそ可能だった。

ちなみに、関ヶ原の戦いで東軍に属して戦った有馬豊氏はと全く異なる。豊氏は、摂津有馬一族の出で、のちに筑後久留米藩初代藩主となったので、有馬晴信の流れとは全然別なので注意。

### (2) 朝鮮の役・関ヶ原の戦い

文禄・慶長の役では、同じキリシタン大名の小西行長の軍に属して従軍し、26歳から32歳までの7年間を朝鮮で過ごしている。

慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦では当初、在国のまま西軍に属したものの、西軍惨敗の報を聞くなり東軍に寝返り、小西行長の居城であった宇土城を攻撃、その功績により旧領を安堵された。小西行長が斬首されたことで、33才になった有馬晴信は当時の日本においてイエズス会から重要視される人物となっていた。だからこそ彼が後に引き起こす大事件は、キリシタンや宣教師にとって大きな衝撃を与えることになった。

### (3) 運命の暗転—岡本大八事件

慶長14年(1609)、マカオで晴信の朱印船の乗組員がマカオ市民と争いになり、乗組員と家臣あわせて48人が殺さ

れるという事件が起きた。これに怒った晴信は徳川家康に仇討ちの許可を求めた。そこへマカオにおけるポルトガル側の責任者アンドレ・ペソアがノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号（マードレ・デ・デウス号）に乗って長崎に入港したため、晴信は船長を捕らえるべく、多数の軍船でポルトガル船を包囲した。ところが船長は船員を逃がして船を爆沈した（ノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号事件）。

この時、晴信の報復処置への目付役として同行していたのが、家康の側近・本多正純の与力である岡本大八であった。

晴信の報復処置は、大八の報告によって正純を通じて家康に伝えられ、家康は晴信を激賞した。晴信は有名なキリシタン大名であり、実は大八もキリシタンだった。その関係から晴信は大八を饗応したのであるが、この時、大八が晴信に「旧有馬領であったが、今は鍋島氏の所領となっている藤津・杵島・彼杵三郡を家康が今回の恩賞として晴信に与えようと考えているらしい」という虚偽を囁いたという。晴信としては旧領の回復は悲願である。大八の主君・正純は家康の側近中の側近であり、正純が家康に働きかけてくれば、旧領の回復は間違いないと思い込んでしまったのである。そして晴信は大八に金品を渡すとともに、正純に家康へ働きかける運動資金として、大八を通じて金銀を提供したのである。しかし大八はこれらを全て自分の懐に入れていたのであった。

しかも大八は、晴信に家康の朱印状まで偽造して渡し、その見返りとして更なる運動資金の提供を求めた。その結果、晴信は6千両にも及ぶ金銀をつぎ込んだ。しかしそれも大八は全て懐にしまい込み、有馬氏の旧領回復運動の資金として遣うことは無かった。

はじかの

これが発覚し、家康は激怒。大八は火あぶりの刑になり、晴信もまた贈賄の罪をとわれて甲斐国初鹿野に追放された後で、死罪となった（岡本大八事件）。

キリシタンであった晴信は自害を選ばず、妻たちの見守る中で家臣に首を切り落とさせた（教会側の記録）。しかし、日本側の記録では切腹して果てたとされている。

なお、キリシタンである岡本の自白により家康の身边にも多数のキリシタンが潜伏していたことが発覚し、原主水は駿府を追放、ジュリアおたあ（Q17の3（7）参照）は伊豆神津島に流罪になった。

この事件をきっかけに、家康は信頼していた側近の本多正純の近臣や、九州の有力大名がキリシタンであることを知るに至り、キリシタン禁止の必要性を感じたに違いない。慶長17年（1612）の禁教令が出された。当初は全国を対象にしていたわけではなく、有馬領の迫害が最もひどかったという。これにこたえるように、有馬領に復帰した有馬直純はキリシタン弾圧を進めていくことになる。

## （4）所見

旧領回復は悲願だったとはいえ、その領土欲が道を誤るきっかけとなった。岡本大八事件は、別にキリシタンを禁教に追い込もうとして仕組まれたものというわけではなかったが、家康に禁教の口実を与えてしまった感否めない。幕府がキリスト教黙認から禁教に傾く、非常に難しい時期を生きたことは確かであった。彼の改易・追放を宣伝することによって、大名家に対しても禁教令の徹底を促すことにもなったのだろう。

## （5）彼の一族

### ① 有馬直純（子）

有馬晴信の子、禁教後は迫害者に転じる。

晴信系肥前有馬氏2代。天正14年（1586）、有馬晴信の嫡男として肥前国日野江城に生まれる。父同様、キリシタンであり、洗礼名はミゲル。

慶長5年（1600）、15歳から親元を離れ、駿府城で徳川家康に側近として仕える。慶長15年（1610）、キリシタンであった妻・マルタ（小西行長の姪）を離縁し、家康の養女・国姫（桑名藩藩主・本多忠政の娘）を正室として娶った。

慶長17年（1612）、父・晴信は岡本大八事件の責任を問われて（直純は早期の家督継承と、妻・国姫の意向を受けてキリシタンとの縁を切るべく、父を処断するように幕臣へ訴えたともされる）、改易のうえ死罪となったが、直純は家康との縁が深かったために連座を免れ、父の所領を受け継いで肥前日野江藩主となった。

同年の江戸幕府による禁教令に従い改宗し、領内のキリシタンを迫害に転じた。また、慶長18年（1613）4月25日には、父とその後妻・ジュスタの間に生まれた8歳と6歳の異母弟（フランシスコ（富蘭）とマティアス（於松）という洗礼名の残る）を殺害している。

しかし、慶長19年（1614）7月に日向延岡5万3千石に転封された。しかし、これらのことから良心の呵責に耐えかねて嫌気がさし、幕府に転封を願い出たといわれている。寛永14年（1637）に旧領で起こった天草・島原の乱においては、地理に明るいことから4,000名余りを率いて征伐軍に加わり、乱を起こした自らの旧臣や元領民と対決した。

寛永18年（1641）、参勤交代の途中、大坂屋敷にて死去した。享年56。一説には明石沖の船中にて死去ともいわれている。

### ② 妻

晴信の妻ルチアは、大村純忠の側室の子であった（純忠が受洗前の側室の子）。彼女の影響もあって、晴信は受洗した。その後、朝鮮で亡くなったといわれている。晴信が朝鮮に7年在陣していた折に渡海したのであろう。

その後、後妻となったジュスタも熱心なキリシタンであった。甲斐国に配流された夫に随い、夫を励まし、夫の最期を看取り、埋葬を執り行った（晴信の墓は山梨にある）。夫の死後は京都で夫の最後の子を産んだ。この子は近衛家に預けられた（のちの薬王院の寛尊僧道）。また、ジュスタは年々強まる迫害の中で、黒田直之の未亡人とともに

に、宣教師が潜伏できる施設の提供などを行っていて、宣教師の記録にもしばしば登場する。

## 【Q18】キリシタン大名・保護者の末路（その2）

前問で触れた武将以外でキリシタン武将やその家族に関して、“その後”をみてみよう。

なお、便宜上、大半の武将は関ヶ原の戦いの去就などに応じて適宜分類している。

まず、はじめにレオン・パジェス著『日本切支丹宗門史』第7章 1605年（慶長10年）をお読みいただきたい。この頃は、日本のキリシタンは隆盛を迎えていた。その記述の中には、キリシタンに厚意的な大名たちの名前も出てくる。

「當時、日本にはマカオや支那にゐる日本の教区に属する者を除いて、百二十一人のイエズス会員がゐた。日本の修道者達は、分れて二箇所の学林、同じく二箇所の中央の駐在所、一箇所の修業所、及び二十三箇所の伝道所に分れてゐた。

フランシスコ会、ドミニコ会、並にアウグスチノ会の修道者達は益々多くなり、その事業を拡張して行つた。

日本には、當時七十五萬人のキリシタンがゐた。この年、新に洗礼を受けた者は、五千五百人あり、長崎だけで千二百人以上もあつた。新に改宗した者の中には、富裕な商人と、可なり多数の武士がゐた。

若干の大名は、堂々と好意を寄せてゐた。三箇國の領主である肥前殿（前田利長）、安芸と備後を領し広島に城市を持つ福島ファヤドノ（福島正則）長岡越中殿（細川忠興）、博多に城市を持つ筑前殿カミドノ（黒田筑前守）柳河に城市を持つ田中兵部殿（田中吉政）の如き、之であつた。内府様の寵臣で、京都の所司代板倉殿（板倉勝重）及び上野殿（本多上野介正純）も亦修道者に力のかすことを憚らなかつた。そのお蔭で、キリシタン宗は、首府の中ですら安全であつた。

京都に、昔よりずっと美しい天主堂が、新たに建てられた。公方様の居城伏見でも、同じく天主堂と住宅とが建てられた。

長崎の町は、瞬く間に拡大し、住民は挙げてキリシタンで、又世俗の富を求めて来た異教徒と多数の商人達は、金銀なしに贖ひ得る精神的の富を得て、物質的にも精神的にも富裕になって、彼等の故郷に帰つて行つた。長崎は、司教の常住の地で、イエズス会の主要な学林と大きな駐在所があつた。司教の授品を受けた最初の日本人が、最も広大で町の人の出入の多い聖母の天主堂の主任司祭に挙げられた。

一六〇五年に、初めて盛大な聖体行列が行はれた。信者の熱心は驚くべきもので、聖体行列に与かることを第二の洗礼と心得てゐた。宣教師達は、注意して彼等に十分この恩寵を得させるやうにした。」

ということで、上記でキリシタンの理解者として名前が挙がっている、前田利長、福島正則、細川忠興、田中吉政、板倉勝重及び本多正純をはじめ、キリシタンになったと言われている人たちを、以下であげている。1605年は官兵衛が亡くなった翌年で、幕府も黙認状態であり、キリシタンが隆盛を迎えていた様子が理解できると思う。

## 1・関ヶ原の戦いで東軍について加増された大名たち

### (1) 前田利長



関ヶ原の戦い後、西軍に与した弟・利政の能登の七尾城22万5,000石と西加賀の小松領12万石と大聖寺領6万3,000石(加賀西部の能美郡・江沼郡・石川郡松任)が加領され、加賀・越中・能登の3ヶ国合わせて122万5千石を支配する日本最大の藩・加賀藩が成立した。

利長はキリシタンに大変好意的で、自分は10のうち6までキリシタンだと言っていた人物。キリスト教禁令の時代だったのでも自らは洗礼を受けなかった(極秘に受けたという言い伝えもある)が、利長がキリシタンを褒めているのを聞いた妻と娘がキリシタンとなった。彼自身、側室は持たなかったようだ。

能登国七尾の本行寺はキリシタン大名・高山右近が、前田利家、利長の庇護を受け、国外追放直前までの26年間関わった寺。右近は寺の一角を占める谷(右近谷)に修道所を建て(慶長4年(1599年))、ペレス神父とともに北陸一円のキリスト教宣教に傾注した。また、本行寺は海上交通の要所である七尾湾を擁し、南蛮医学・土木・航海・建築・火術などの修得する、北陸最大の文化拠点でもあった。

もともと浄土真宗が盛んな土地柄であった。父、利家が一向一揆勢を見せしめのために釜茹での刑にしたようで、一向一揆には手を焼いたと思われる。利家や利長が一向宗を抑えるためにキリシタンを保護した可能性はある。ただ、大規模な宗教対立を誘発したというわけではなく、宗教政策をうまく治めていったことがうかがえる。

### (2) 福島正則



正則の一般的な事蹟については省略する。類書等でご確認いただきたい。

彼自身はキリシタンではなかったが、文禄4年(1595年)尾張国24万石清洲城主であった頃から一貫してキリシタン保護政策を堅持していた。宗教に対しては寛容な政策を採っていたとされる(中巻Q16でも述べた)。

キリスト教を徹底的に嫌った加藤清正(熱心な日蓮宗信徒)とは対照的で、正則はキリシタンを積極的に保護し、宣教師のために教会も建てている。彼自身は入信しなかったが、家臣の中には洗礼を受ける者も少なくなく、改易となったキリシタン大名の部下を召し抱えたため、1年間に1千人ずつ信者が増えていくほどキリスト教が普及していった。

一方、慶長6年(1601年)3月に関ヶ原の戦いにおける第一の戦功により、安芸・備後49万5千石の大大名となった。領内の寺社の保護にも熱心であり、慶長7年(1602年)には厳島神社の平家納経を修復させたことが知られている。

慶長19年(1614)、幕府が禁教令を発令し、宣教師や信徒に迫害を加えるようになっても、正則は宣教師や信徒を保護したという。ただし、キリシタンたちの活動は地下にもぐったらしい。

元和3年(1617)、ローマに、迫害された信者を助けなかったという神父たちの噂を否定する書状を送っており、この手紙には福島氏の家臣が名を連ねている。表向きでは幕府に従っていても、そこまでひどく弾圧していなかったのかもしれない。

そして、この手紙をローマに送った翌々年、正則は信州川中島に改易された。家康死後まもなくの元和5年(1619)、台風による水害で破壊された広島城の本丸・二の丸・三の丸及び石垣等を幕府に無断で修理したことが武家諸法度違反に問われる。正則はその2ヶ月前から届けを出していたが、先年にも一城令発布後にもかかわらず新規に築城を行ったとして、毛利家から報告を受けた幕府より該当城の破却を命じられた後のことでもあり、幕府からは正式な許可が出ていなかったという。

この改易の主な要因について、幕府が示した罪状を以下のとおりで、キリシタンのにおいはしない。

- 正則は家康に忠節をつくしたので、安芸、備後の大祿を下賜したのに、功を誇り邪意にまかせ伊奈図書を切腹させたこと。
- 正則父子とも、豊臣秀頼に志を通じたことが発覚した。真否は別として罪状に加う。
- 正則父子は陰謀を企て、従わない家来を酔ったふりをして殺害におよんだ。  
とが
- 小さい科をもって大罪とし、家来を殺害した。
- 子息備後守は大坂陣に際しては一度も志をあらわさず、不審千万のこと。
- 世人は正則に反逆の心ありとして歌に唄っていること。



□ 子息備後守は京都で弓矢、具足などの武具を新調した。これは時節柄不審なこと。

というようになっていく。もともと豊臣恩顧の大名の中で大物として警戒されていたが、大坂の陣が終わってすでに豊臣家もない状況で、ようやく、大大名である福島家を取り潰せる時期が来たためだと言われている。改易の経緯の詳しい説明は類書に譲るが、正則がキリシタンの保護者だったから、幕府に目を付けられたということは、表向き見られない。

なお、彼の側室の記録はない。

### (3) 細川家の人々

#### ① 細川忠興



細川忠興は父、幽齋と同様、信長、秀吉、家康と器用に仕えて出世し、丹後12万石から豊前小倉34万石（及び豊前杵築6万石を合わせて40万石）の大大名となり、子の忠利が肥後54万石に封じられている。その出世ぶりは官兵衛・長政親子と似たようなものを感じる。

彼自身はキリシタンではないが、親キリシタンだった。天の巻（中巻）Q11で述べたが、キリスト教に入信しなかったのは、一夫一妻の掟がネックになっていたからのようである。側室が4人いた。だが、のちに弾圧に転じている。

細川忠興は元々仏教には懐疑的な意見を持っていた様で、妻玉子にキリスト教の存在を最初に教えたのは忠興だといわれる。正室の玉子への愛情は深く、その父・明智光秀が本能寺の変を起こしたときも離縁せずに、幽閉して累の及ぶのを避けている。

玉子は忠興に無断で洗礼をうけた。これは嫉妬深く他人に玉子を見せるのすら嫌った忠興の神経を逆撫でた。玉子の美しさに見とれた植木職人を手討ちにしたという話もある。朝鮮出兵中、忠興は玉子に何通もの手紙を書いているが、その内容は「秀吉の誘惑に乗らないように」というものだったという。それよりも、改宗したのが、秀吉がパテレン追放令を出した直後だったため、これに激怒して侍女の鼻をそぎ、さらに玉子を脅迫して改宗を迫ったと言われている（この頃から夫婦仲が冷めた可能性もある）。

しかし、ガラシャはこれを受け付けず、やがて関ヶ原の戦いの時に三成方に大坂の屋敷を囲まれ、老臣に胸を突かされて死んでしまった。

この時、細川家の菩提寺などの寺社の者は、処罰を怖れて西軍に逆らって死んだガラシャらの遺骸を掘り起こして埋葬しようとはしなかったが、ガラシャと親交のあった教会の神父たちは処罰を怖れず遺骸を掘り起こし、勝手に葬儀をしてはならぬ、と忠興の帰りを待って、これを引き渡した。

忠興はいたく感じ入って感謝のしるしとして金を与えると、神父たちはこれを貧しい人々に分け与えてしまったらしい。

これを聞いた忠興はさらに感動して、ガラシャの葬儀と一周忌をキリスト教式で行わせ、自分がキリシタンでもないので領内でのキリスト教の布教を自由にしたという（豊前国中津城下には、黒田家時代の教会堂があり、信者も多かったため、それへの配慮もあっただろう）。

領内でのキリシタン保護の主な記録をざっとあげてみると、慶長7年（1602）、小倉城主となったが、そのとき小倉には、キリシタン400名、司祭1名、修道士2名がいたという記録がある。また、慶長9年（1604）、子の忠利が中津城主となり、キリシタンに理解を示しており、慶長10年（1605）、小倉のキリシタン2千人、慶長12年（1607）、中津に教会堂が建設、慶長14（1609）、中津にレジデンシアが建設され、この年125名が受洗、慶長15年（1610）、忠利、ガラシャのために記念のミサを催したという記録がある。

後に、熱烈な法華経信者だった加藤清正が「キリシタンでもあるまいに」とこれを諷めた所、掴み合いの喧嘩になりかかったともいう。

ただ、そんな忠興も慶長15年（1610）頃になると、徳川家康・秀忠のキリスト教弾圧の意を汲み取り、豊前領内でキリシタン弾圧を行うようになった。慶長16年（1611）には領内で多くのキリシタンが処刑され、教会側の記録に「宗教とその宣教師の敵として名乗りを上げた」と残っている。慶長16年（1611）、中津のグレゴリオ・デ・セスペデス神父が死去し、忠利は禁教に転じた。

慶長17年（1612）中津の教会が閉鎖され、中津で14名殉教。また、天正遣欧使節の一人、伊東マンショ神父が長崎に逃れて死去した。

慶長20年（1615）の大坂夏の陣でも参戦。戦後、松平の苗字の下賜を辞退。元和6年（1620）、三男の忠利に家督を譲って隠居。この頃、出家して三斎宗立と号した。

寛永9年（1632）、忠利が豊前小倉藩40万石から肥後熊本藩54万石の領主として熊本城に加増・移封されると、忠利に44万5000を残し、自らは八代城に入り9万5千石を隠居領とした。

臨終の際には「皆共が忠義 戦場が恋しきぞ」と述べており、最後まで武将としての心を忘れていなかった。享年83。

キリシタンに対して一定の理解を示していたのは、実利目的ではなく、仏教への懐疑とキリスト教への共感、宣教師たちの真摯な姿勢への感動があったものと思われる。

忠興は利休七哲の一人であり、利休が切腹を命じられたとき、利休にゆかりのある諸大名の中で見舞いに行った者は、忠興と古田織部だけであったとされる。秀吉から咎められることのリスクよりも優先したのである。一方で、家族に対して情け容赦ない面も見せている。

世の潮目を読み、トップにうまく取り入って、世渡りしたという印象だ。超人的な智略があるわけでもないで、権力者に対してひたすら気に入られるようにして生きたのだろう。幕府が禁教令を出したら、容赦なく弾圧に転じている点は黒田長政と同じで、個人の感情よりもお家の存続を優先する現実主義者だったのだろう。利休を見舞ったりするところには人間味を感じるが、生き残るためには手段を選ばないという冷徹な印象を受ける。

## ② 細川ガラシャ



明智珠（明智玉）は、明智光秀の三女で細川忠興の正室。ガラシャは洗礼名。明治期にキリスト教徒らが彼女を讃えて「細川ガラシャ」と呼ぶようになり、現在でもこのように呼ばれる場合が多い。子に、<sup>おちよう</sup>於 長（前野景定室）、忠隆、興秋、忠利、多羅（稲葉一通室）などがいる。

- ・忠興に嫁ぐ

永禄6年（1563）、明智光秀と妻・熙子の間に三女（四女説もある。ただしこの場合、長女と次女は養女であり、実質は次女となる）として越前国で生まれる。

天正6年（1578）、15歳の時に父の主君・織田信長のすすめによって細川藤孝の嫡男・忠興に嫁いだ。珠は美女で忠興とは仲のよい夫婦であり、天正7年（1579）には長女が、同8年（1580）には長男（細川忠隆、後の長岡休無）が生まれた。

- ・本能寺の変

しかし、天正10年（1582）6月、父の光秀が織田信長を本能寺で討って（本能寺の変）自らも滅んだため、珠は「逆臣の娘」となる。忠興は天正12年（1584）まで彼女を丹後国の味土野（現在の京都府京丹後市弥栄町）に隔離・幽閉する。

この間の彼女を支えたのは、結婚する時に付けられた小侍従や、細川家の親戚筋にあたる清原家の清原マリア（公家清原枝賢の娘）らの侍女達だった。

- ・キリシタンとなる

天正12年（1584）3月、信長の死後に覇権を握った羽柴秀吉の取り成しもあって、忠興は珠を細川家の大坂屋敷に戻し、厳しく監視した。この年に興秋が生まれている。それまでは出家した舅・藤孝とともに禅宗を信仰していた珠だったが、忠興が高山右近から聞いたカトリックの話をすると、その教えに心を魅かれていった。もっとも忠興の前ではそ知らぬ風を装っていた。

天正14年（1586）、忠利（幼名・光千代）が生まれたが、病弱のため、珠は日頃から心配していた。天正15年（1587）2月、夫の忠興が九州へ出陣すると（九州平定戦）、彼女は彼岸の時期である事を利用し、侍女数人に囲まれて身を隠しつつ教会に行った。教会ではそのとき復活祭の説教を行っているところであり、珠は日本人のコスメ修道士にいろいろな質問をした。コスメ修道士は後に「これほど明晰かつ果敢な判断ができる日本の女性と話したことはなかった」と述べている。珠はその場で洗礼を受ける事を望んだが、教会側は彼女が誰なのか分からず、彼女の身なりなどから高い身分である事が察せられたので、洗礼は見合わされた。細川邸の人間たちは侍女の帰りが遅いことから珠が外出した事に気づき、教会まで迎えにやってきて、駕籠で珠を連れ帰った。教会は1人の若者にこれを尾行させ、彼女が細川家の奥方であることを知った。

再び外出できる見込みは全く無かったので、珠は洗礼を受けないまま、侍女たちを通じた教会とのやりとりや、教会から送られた書物を読むことによって信仰に励んでいた。この期間にマリアをはじめとした侍女たちを教会に行かせて洗礼を受けさせている。

しかし九州にいる秀吉がバテレン追放令を出したことを知ると、珠は宣教師たちが九州に行く前に、大坂に滞在していたイエズス会士グレゴリオ・デ・セスベデス神父の計らいで、自邸でマリアから密かに洗礼を受け、ガラシャ（Gratia、ラテン語で恩寵、神の恵みの意。ただしラテン語名に関して、ローマ・バチカン式発音により近い片仮名表記は「グラツィア」という洗礼名を受けた。

それまで、彼女は気位が高く怒りやすかったが、キリストの教えを知ってからには謙虚で忍耐強く穏やかになったという。

バテレン追放令が発布されていたこともあり、彼女は夫・忠興にも改宗したことを告げなかった。

- ・壮絶な最期

九州から帰ってきた忠興は5人の側室を持つと言い出すなど、ガラシャに対して辛く接するようになる。ガラシャは「夫と別れたい」と宣教師に打ち明けた。キリスト教では離婚は認められないこともあり、宣教師は「誘惑に負けてはならない」「困難に立ち向かってこそ、徳は磨かれる」と説き、思いとどまるよう説得した。

慶長5年(1600)7月、忠興は徳川家康に従い、上杉征伐に出陣する。忠興は屋敷を離れる際は「もし自分の下の折、妻の名誉に危険が生じたならば、日本の習慣に従って、まず妻を殺し、全員切腹して、わが妻とともに死ぬように」と屋敷を守る家臣たちに命じるのが常で、この時も同じように命じていた。

この隙に、西軍の石田三成は大坂玉造の細川屋敷にいたガラシャを人質にとろうとしたが、ガラシャはそれを拒絶した。その翌日、三成が実力行使に出て兵に屋敷を囲ませた。家臣たちがガラシャに全てを伝えると、ガラシャは少し祈った後、屋敷内の侍女・婦人を全員集め「わが夫が命じている通り自分だけが死にたい」と言い、彼女たちを外へ出した。その後、家老の小笠原秀清(少斎)がガラシャを介錯し、ガラシャの遺体が残らぬように屋敷に爆薬を仕掛け火を点けて自刃した。「細川家記」の編著者は、彼女が詠んだ辞世の歌として、「散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」と記している。

ガラシャの死の数時間後、神父グネッキ・ソルディ・オルガンティノは細川屋敷の焼け跡を訪れてガラシャの骨を拾い、堺のキリシタン墓地に葬った。忠興はガラシャの死を悲しみ、慶長6年(1601)にオルガンティノにガラシャの教会葬を依頼して葬儀にも参列し、後に遺骨を大坂の崇禅寺へ改葬した。他にも、京都大徳寺塔中高桐院や、肥後熊本の泰勝寺等、何箇所かガラシャの墓所とされるものがある。

なお、細川屋敷から逃れた婦人のなかには、ガラシャの子・忠隆の正室で前田利家の娘・千世もいたが、千世は姉・豪姫(宇喜多秀家正室)の住む隣の宇喜多屋敷に逃れた。しかし、これに激怒した忠興は、忠隆に千世との離縁を命じ、反発した忠隆を勘当廃嫡してしまった。彼女の死後、忠利が興秋を差し置いて家督を相続、不満を抱いた興秋が大坂の陣で豊臣側に与する原因となった。

#### ・異説

一般には上記の通り、玉子はキリシタンの戒律及び夫の命を守り、自害することなく、少斎の手にかかって死亡したとされている。

しかし太田牛一の「関ヶ原御合戦双紙」蓬左文庫本では、彼女が自ら胸を刺した、とあり、河村文庫本では更に、十歳の男児と八歳の女兒を刺殺した後に自害した、とある。

#### ・所感

逆賊の娘ということで幽閉された点や、その後高山右近の勧めもあって入信した点は官兵衛と似てなくもない。伴天連追放後の夫の冷淡と“浮気”に心を痛め、夫との離縁を願うが、キリスト教の教えに従って離縁せずに耐えた。三成方の人質となることを避けるために、ここでもキリスト教の教えを守って自害せずに家臣に介錯をさせた。このように、キリスト教の教えに殉じた人だった。宗教を真剣に信じるというのは、命をかけることだったのである。

しかし、なぜ彼女がクローズアップされ、悲劇のヒロインとなったのか。その理由を知りたい。

### ③ 細川興元(忠興の弟)

細川幽齋の次男で、忠興の弟。下野茂木藩主。のち常陸谷田部藩の初代藩主。兄の忠興が細川輝経の養子になり奥州細川家を継いだため、興元は藤孝の和泉半国守護細川家の分家として家を興した。

永禄9年(1566年)、細川藤孝(幽齋)の次男として生まれる。

はじめ父や兄と共に織田信長に仕え、大和片岡城攻めなどで活躍した。信長没後は羽柴秀吉に仕えて小田原征伐、文禄・慶長の役などでも活躍している。一時キリスト教に帰依し洗礼名も持つ。子がなかなかできず、忠興と細川ガラシャの次男・細川興秋を関ヶ原以前に養子にしたこともあった。

#### (4) 田中吉政



筑後柳河藩初代藩主。パルトロメヨの洗礼名を持つキリシタン大名でもあり、領内のキリスト教徒を保護したという。

彼は、転封の過程で居城とした近江国・八幡(現滋賀県近江八幡市)、三河国・岡崎(現愛知県岡崎市)、筑後国・柳河(現福岡県柳川市)などに、現在につながる都市設計を行った。そのことは現代でも高く評価されている。

秀吉の甥の羽柴秀次(のちの豊臣秀次)の宿老となり、天正13年(1585年)に秀次が近江八幡43万石を与えられると、その筆頭家老格となった。

文禄4年(1595)、秀次は自害させられ、多くの家臣が処分を受けたが、吉政ら宿老にはお咎めはなかった。その際、石田三成が関与したかどうかは不明。「秀次によく諫言をした」ということで加増され、文禄5年(1596年)に三河国岡崎城10万石の大名となった。

秀吉の死後は家康に接近し、関ヶ原の戦いでは東軍に属した。東軍勝利後、三成の居城佐和山城を落城させるとともに、伊吹山中で逃亡中の石田三成を捕縛する大功を挙げた。

ちなみに、石田三成の護送に当たった時、有名な話が残っている。捕らえられた時、三成は腹痛で病んでおり、医師は薬を勧めたが三成は拒否。そこで吉政は一考し、腹痛に良いという理由でニラ粥を勧め、三成はそれを食したという。

また三成は、捕縛される時に『他の者に捕らえられるより、貴殿に捕らえられたほうがいい』と吉政に言い、自分



を捕らえた功績をかつての知人である吉政に与えようと思っていたとか。その際、三成はあくまで礼を尽くす吉政に対して、かつて太閤秀吉から給わった脇差しを授けた。この脇差は現存しており、東京国立博物館に収蔵されている。

吉政は戦後に、これらの勲功により、筑後12万石の国持ち大名となった。

三成の推挙で武士になり世に出ることになったといわれる田中吉政は、三成を捕縛することによって国持ち大名となった。三成に対して恩を仇で返した形になったが、三成はこの事を恨んで思っていなかったようだ。むしろ脇差を送った事により吉政に対してなにか特別な想いもあったのかも知れない。

筑後では、柳川の掘割を整備することで水運や稲作のための用水路を整備し、近代的な街作りを行った。水路以外にも柳川と久留米を結ぶ田中街道（現県道23号線）や柳川と八女福島・黒木を結ぶ街道を作るなど、陸路の整備にも力をいれた。また、矢部川の護岸整備や有明海沿岸に慶長本土居と呼ばれる堤防を整備したほか、収入の増加を目指して有明海の干拓にも熱心に取り組んだ。慶長14年（1609）に京都伏見で没した。享年62。

田中家は跡を継いだ忠政は、早くから父の策略で江戸の徳川家康のもとへ人質として送られていた。四男であれば本来なら家督を継げるはずもなかったが、忠政が家康と親しかったこと、長兄の吉次が吉政の勘気を受けて追放され、三兄の吉興も病弱だったため、家督を継いだのである。ちなみに次兄の康政は福島城主となっている。同年、秀忠の計らいで従四位下、侍従となる。その後は江戸城西の丸の普請、柳河の開拓などで功を顕す。

慶長19年（1614年）からの大坂冬の陣では徳川方として参戦する。翌年の大坂夏の陣でも徳川方として参戦しようとしたが、家臣団の一部で旧主の豊臣氏に与すべきという反論が起こり、さらに財政難などもあって遅参した。このため、駿河にいる家康に謝罪し、罪は許されたが代償として7年間の江戸滞留を命じられた。さらに忠政は、父と同じくキリスト教に大きな興味を示して信者を手厚く保護した。あるとき、家臣の一人がキリシタンを殺害したのを知って忠政は激怒し、その家臣を即座に処刑している。

元和6年（1620）8月7日、36歳で死去した。嗣子が無く、柳河藩田中氏は無嗣断絶となり、改易された。ただし、忠政の兄・吉興が近江に2万石を与えられている。幕府の禁教令の中でキリスト教を保護したのは稀有なことであり、その件が幕府の不興を買って田中氏改易に結びついたとの指摘もある。なお、傍系の親族は他家の家臣となることなどで家系を存続させている。

吉政が統治した領域は、前領主がキリシタン武将の毛利秀包であり、彼がキリシタンを保護したことで、久留米はキリシタンが盛んな地域であった。教会側の記録を斜め読みすると、慶長4年（1599）には久留米地方のキリシタン4千人、慶長5年（1600）久留米にレジデンシア（伝道所）、教会堂建設、慶長6年（1601）に田中吉政、柳川城主となり、その年400人が受洗。慶長12年（1607）イエズス会、準管区長フランシスコ・パシヨ神父、秀忠・家康に謁し、大阪で秀頼訪問、また柳川に新設されたレジデンシアと領主田中吉政を訪問するため柳川に来る。その年、柳川のキリシタン1400人などの記録があり、官兵衛のいた博多、黒田直之の所領秋月と並んで、柳河・久留米はキリスト教の盛んな土地であった。

なぜ忠政の代で田中家が改易になったのだろうか。表向きの取り潰し理由は、嗣子がいなくて改易となっていて、一見ルールに乗っ取って淡々と取り潰されたように見える。しかし、実はそれは表向きだったのではないだろうか。まず、時期として福島正則の取り潰しの翌年である。田中家は豊臣恩顧の大名で、20万石。大坂の陣が終わり、そのあとに、遅参の責めを負い、7年間の江戸滞留を命じられ、その間に亡くなっている。もしかして毒殺？と思ってしまふのは私だけだろうか。

忠政がキリシタンに寛容で（もしかしたら受洗していたかも知れないが）、側室は持たなかった。正室との間に子がないなら、養子縁組をしておくことは当然の処置であろうが、それをしていないあたりは不自然ではないだろうか。36歳と若いから、まだ子を成す望みを捨てていなかったのか。弟を養子にしておくこともできたはずだ。いずれにしても、幕府からターゲットにされやすい存在であったに違いない。

## （５）京極家の人々

### ① 京極マリア（京極高吉正室）

高次、高知、竜子（松の丸殿、京極殿、西の丸殿）、他に2人の娘（氏家行広室、朽木宣綱室・マグダレナ）を設けた。

天正9年（1581）、夫・高吉と共に安土城城下でオルガンティノ神父より洗礼を受け、洗礼名としてマリアを授かるが、その数日後に高吉は死去する。

天正15年（1587）に伴天連追放令が発せられた後も信仰を貫き、秀吉の側室となった竜子を除く4人の子が洗礼を受けたとされる。京や大阪での布教活動を経て、関ヶ原の戦いの後には次男の高知が領した丹後国泉源寺村（京都府舞鶴市）に移り住み、高知の庇護の許、此御堂という建物を中心に布教活動を行い、更なる信仰を深めたという。泉源寺村は丹後の最東端に位置し、若狭との国境に近いことから選んだとされ、長男が領する若狭の小浜にもたびたび足を運んだともいわれている。

「丹後の大名（京極高知）と、若狭の大名（京極高次）との母であるドンナ・マリア（京極高吉夫人）は、依然その信心にかけては最も良い手本を示し、家庭を一個の修道院のやうにしてゐた。」（『日本切支丹宗門史』第十四章）とあるように、家族ぐるみで信仰していたという記録がある。

地元の民には「泉源寺様」と呼び慕われていたという。元和4年（1618）7月1日に死去。

### ② 京極高次



京極マリアの子。秀吉、家康に仕えて近江大津、若狭小浜を領した。生母は京極マリア。妻の初（常高院）は、浅井長政・お市の方の次女（淀君の妹、お江の方の姉）。関ヶ原の戦いでは大津城に籠城し西軍の軍勢の一部を大津城に引きつけて関ヶ原へ向かわせなかった。その功績が高く評価され、若狭一国8万5千石へ加増転封された。慶長6年（1601）頃、妻お初や弟の高知の働きかけもあり、高次は入信。その時、高次39歳。

母より9年早く47歳で亡くなった。母マリアからも最後まで信仰的な励ましや慰めを得たことだろう。高次夫妻や京極マリアは家康や秀忠などとの姻戚関係や親交があり、家康の信任も厚かった。なお、側室の記録はない。

### ③ 京極高知



京極マリアの子。高次の弟。秀吉、家康に仕えて信州伊奈、丹後宮津を領す。

早くから豊臣秀吉に仕え、その功により羽柴姓を許されて羽柴伊奈侍従と称す。文禄2年（1593）、義父毛利秀頼の遺領を（秀頼の嫡男秀秋を差し置いて）任され、信濃飯田城主として6万石を領し、従四位下侍従に任ぜられた。また、領内にキリスト教の布教を許可し、文禄4年（1595）、自ら招いた宣教師により高遠城（天下一の桜で有名な現、長野県上伊那郡高遠町）にて洗礼を受け、ジュアンと称した。

秀吉死後は家康に接近し、慶長5年（1600）には岐阜城攻めに参戦し、関ヶ原の戦いでは大谷吉継隊と戦うなどの戦功を挙げた。戦後は丹後12万3千石を与えられた。田辺城に入城後、宮津城に拠点を移す。静かに隠居して迫害はしなかったといわれている。元和8年（1622）亡くなった。享年51歳。

なお、側室の記録はない。

### （6）筒井定次

永禄5年（1562）、慈明寺順国（筒井順国）の次男として生まれ、のちに筒井順慶の養子となった。

彼は、三箇マンショと呼ばれるキリシタンを匿っており、彼の話からキリスト教への関心を持っていた。天正20年（1592）、三箇マンショの仲介によりアレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父の知遇を得、キリスト教の洗礼を受けた。ルイス・フロイスは定次とヴァリニャーノの面会に同席していたが、定次を「人格の優れた人物」と評しているほか、高山右近もその人となりを評していた、とフロイスの記録では言及されている。フロイスの記録では、当時太閤秀吉を中心にキリスト教を迫害する風潮があった中、定次は伊賀にキリスト教を広く布教させる意思があることを述べていたという。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは東軍に与し、戦後、徳川家康から所領を安堵された（上野城を陥落させた西軍の摂津高槻城主新庄直頼、直定父子は改易された）。

しかし、慶長13年（1608）、幕命により突如として改易され、ここに大名としての筒井氏は滅亡した。

改易の理由については、度々大坂城に赴き、豊臣秀頼や大野治房らと誼を通じていたこと、領国における悪政、酒色に耽溺したから、キリシタンによる訴訟など、数々の理由が挙げられているが、最近では筒井氏も豊臣恩顧の大名であり、さらに伊賀という大坂近郊の要地を支配していたことを危険視した幕府によるでつちあげの改易ではないかとされている（事実、定次改易後の伊賀には外様ながら譜代並の藤堂高虎が入った）。どちらにせよ、定次は改易された後、その身柄は鳥居忠政のもとに預けられることとなった。

そして慶長20年（1615）3月5日、大坂冬の陣にて豊臣氏に内通したという理由により、嫡男順定と共に自害を命じられた。享年54。

切腹を命じられた経緯について、『伊陽安民記』『翁物語』は、大坂冬の陣の際、城中から放たれた矢の一つに筒井家で使われていたものがあり、その矢が内応の示唆を疑わせ、自害を命じられたと記している。しかしこの矢は筒井家が改易された際に四散したものが大坂城に紛れ込んだものと考えられており、幕府がこれを内応と解釈したのは定次を葬る為のでつちあげであつた。

ということなので、改易と切腹について、キリスト教の影響があったかについては明確な根拠がなく、不明である。

その後、筒井氏は家康の尽力で、定次の従弟に当たる筒井定慶が継いだ。大坂夏の陣で豊臣方に大和郡山城を攻め落とされ、逃亡した後に自害した。定次流以外の他の筒井氏一族は東大寺住職や奉行や旗本などとして存続した。

なお、側室1名記録があり、全体として2男5女を設けた。正室秀子は明智光秀の娘で織田信長の養女とも言われている。

### （7）蜂須賀家政

蜂須賀正勝（子六）の子で、父の代わりに阿波国の大名に任じられて徳島藩祖となる。

四国攻め後、その戦功により秀吉は正勝に対して阿波一国を与えようとしたが、正勝は秀吉の側近として仕える道を選んで辞退し、秀吉はやむなく家政に阿波を与えたという。こうして家政は天正14年（1586）に阿波18万石の大名となり、同年、従五位下阿波守に叙任する。

徳島城を築城した。一説に阿波踊りは、城が竣工した折、家政が城下に「城の完成祝いとして、好きに踊れ」という触れを出したことが発祥ともいう。

徳島毎日新聞（今の徳島新聞の前身）の記者だった石毛賢之助が明治41年（1908）に出版した「阿波名勝案内」で、阿波に入国した蜂須賀家政が、現在の徳島公園に城を完成させた天正14年（1586）7月、それを祝って乱舞したのが始まり、というふうに築城記念説を唱えて以来、一般的にはその説が有力だ。

阿波踊りの歌に「阿波の殿様」という言葉があるが、これは家政のことだといわれている。

阿波踊りが、契約の箱とともに喜び踊ったダビデと重なってみえると言っている人もいる。いかにもうれしげに喜びの表情で踊るのが似ているという。このことが本当ならキリスト教の影響といえよう。

また、蜂須家の家紋はカギ十字（ハーケンクロイツ）でキリスト教の影響だと思われる。



秀吉が死去し、慶長4年（1599）に前田利家が死去すると、三成を襲撃しようと蜂起したり（資料によっては参加していないとするものもある）、子の至鎮と徳川家康の養女の縁組を結ぶなど、典型的な武断派・親家康大名として活動している。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは、西軍から親徳川の姿勢を糾弾され高野山へ追放されたが、家康の上杉景勝征伐に同行させていた至鎮は関ヶ原の本戦で東軍として参加して武功を挙げたため、戦後に蜂須賀家は淡路一国を与えられ、25万7,000石に加増された。しかし自身は家督を至鎮に譲り、蓬庵と号して隠居した。

慶長19年（1614）から始まった大坂の陣では、豊臣方からの誘いに「自分は無二の関東方」と称して与力を拒絶するとともに、駿府城の家康を訪ねて密書を提出している。嫡男の至鎮が戦功を挙げたため、元和6年（1620）に至鎮が夭折した後は、幼くして襲封した嫡孫・忠英の後見を幕府から命じられ、忠英が成人する寛永6年（1629）まで政務を取り仕切り、藩政の基礎を築いた。

戦国以来の長老として、第3代将軍・徳川家光の側に御伽衆として出仕することもあったという。寛永15年（1638）に81歳で死去。

領国の阿波にどれくらいキリシタンがいたかわからないが、家政自身は静かに隠居してキリシタンを迫害しなかったといわれている。

## （8）津軽為信、信牧父子



津軽氏は南部氏に臣従していた。南部晴政の代に、南部氏の領土版図は、北は現在の青森県下北半島から、南は岩手県北上川中央部までに広がった。しかし、天正10年（1582）に南部晴政が没すると南部家内は後継者問題で分裂。その混乱を利用して為信は独立を果たす。その後、秀吉政権に取り入り、独立大名として認知をされた。

為信は、西洋の文物を欲してキリシタンになろうとしたが、側室（1名）がいたためにキリシタンにはなれず、慶長元年（1596）子供たちをキリシタンにすることで経済力・軍事力を強化しようとした。現在青森に残るキリシタン遺構はその名残だ。

長男信建はキリスト教信仰の道を進んだ。

三男信牧は秀吉や家康がキリシタン弾圧の方針をとったのを見てキリスト教からはなれたようだ。慶長12年（1607）、父・為信の死により家督を継承し、家督相続のお礼言上に江戸へ伺候した際、南光坊天海に弟子入りしている。天台宗に帰依改宗して教義を学び、藩内に天台宗寺院を建立して天海の高弟を迎え布教に尽力した。津軽藩の江戸藩邸は、天海のある上野寛永寺そばに設けられ、後に津軽家の菩提寺津梁院となる。

なお、為信、信牧はそれぞれに側室が1名いたといわれている。

ひでもち

## （9）前田 秀以

豊臣政権の五奉行の一人前田玄以の長男。洗礼名パウロ。

父と共に秀吉に仕え、羽柴姓を与えられた。父が京都所司代としてキリシタンを保護することが多かった影響からキリシタンとなり、文禄4年（1595）には正式に洗礼を受けた。

慶長元年（1596）、秀吉の命令でキリシタンが弾圧されることになると、父の玄以も消極的ながら秀吉の命令に従って畿内のキリシタンを弾圧した。しかし秀以は密かにキリシタンを匿ったと言われている。前田家の長男がキリ

シタんであつては改易されかねないことを危惧した父・玄以は秀以に棄教するように促した。しかし秀以はこれに応じず、弟の茂勝に家督相続権を譲って前田家と離縁した。一説に玄以の怒りに触れて追放されたともいわれる。

慶長6年(1601)閏11月6日に父に先立って死去(享年26歳)。一説に父の命令で自害に追い込まれたとも、殺害されたともいわれる。弟の茂勝とは仲が良かったらしく、兄の葬儀に際してはキリスト教式の葬礼を行なったとされる。正室もいなかったようだ。

### (10) 前田茂勝

前田玄以の次男。洗礼名コンスタンチノ。

文禄4年(1595)にキリシタンとなる。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは西軍に与して東軍方の細川幽斎が守る丹後田辺城を攻め、開城の使者も務めた。だが、戦後に父玄以が持っていた朝廷とのパイプなどを考慮されて所領を安堵された。

慶長7年(1602)、父・玄以が死去したために家督を継ぎ、亀山から八上に移封された。しかし熱心なキリシタンであつたために幕府に危険視され、また、茂勝自身も藩政を省みずに放蕩に耽り、終には発狂して諫言する家臣・尾池清左衛門父子をはじめとする多くの家臣を切腹させたために、幕府から改易を申し渡され、甥の堀尾忠晴に身柄を預けられた。

このあたりの事件はいつもながらきな臭さを感じる。小早川秀秋も同じような感じで亡くなっているが、やはりきな臭い。なぜおかしくなったのか。納得できる理由が欲しいところだ。

ただ、改易後はキリシタンとして真面目な生活を送つたと言われている。

元和7年(1621)に死去(享年40歳)。正室もいなかったようだ。子孫は旗本として存続した。

### (11) 松浦隆信



松浦氏28代当主。肥前平戸藩第3代藩主。第2代藩主松浦久信の長男。曾祖父(松浦隆信(道可))と同名を名乗る。母、松東院は大村純忠の娘で洗礼名メンシア。正室は大胡藩主・牧野康成の娘、継室は大村喜前(洗礼名サンチョ)の娘。なお、彼には側室はいなかったという。

幼少時に父によって受洗したが、江戸幕府の禁教令により棄教している。慶長8年(1603)、父・久信の死により12歳で家督を相続、祖父・鎮信(法印)が後見した。

祖父は平戸イギリス商館や平戸オランダ商館開設に尽力した人物として、イギリスでは日本のルクルスと呼んで賞賛されていたが、隆信は貿易に無理やり介入して多大な損を被らせた人物として、「Foolish tono(バカ殿)」という不名誉な仇名が付けられていたという。寛永14年(1637年)没した。

なお、ルクルスとは、共和政ローマの軍人、政治家。スッラの支援者で、小アジア、黒海沿岸を征服した。引退後のルクルスは、共和政時代随一と言われた豪邸を各所に建て、中近東から持ち帰った膨大な美術品や書物を並べた。ヨーロッパでは食通の代名詞とされる。現在でも豪華な食事を「ルクルス式」という。

### (12) 伊達政宗

彼の遺品にロザリオがあつたことなどから、政宗は密かにキリスト教に帰依していたのではないかとする説もある。政宗の妻愛姫や長女の五郎八姫は一時期キリシタンだったことがある(後述)。しかし、正室・愛姫と、少なくとも7人の側室があり、五郎八姫など10男4女を儲けている。彼自身はキリシタンではなかったものと思われる。

政宗は幕府転覆を図るために、支倉常長を使者としてローマに派遣した(慶長遣欧使節)。

このときのことを示す有力な史料もある。支倉常長はローマとの軍事同盟交渉のとき、国王・フェリペ3世に対して、「政宗は勢力あり。また勇武にして、諸人が皆、皇帝となるべしと認める人なり。けだし日本においては、継承の権は一に武力によりて得るものなり」と発言している。

また、仙台藩の庇護を受けていた宣教師のジェロニモ・デ・アンジェリスも、次のような手紙を本国に送っている。

「テンカドノ(家康)は政宗がスペイン国王に遣わした使節のことを知っており、政宗はテンカに対して謀反を起こす気であると考えていた。彼ら(家康・秀忠父子)は政宗がテンカに対して謀反を起こすため、スペイン国王およびキリシタンと手を結ぶ目的で大使(支倉常長)を派遣したと考えた。」

支倉常長はローマ教皇にも謁見した。この時代の日本人がローマ教皇に謁見した史実は、日本の外交史の中で特筆される実績であり、今でもスペインのコリア・デル・リオには現地に留まった仙台藩士の末裔と推測される人たちが存在している。彼らは「日本」を意味する「ハボン」を姓として名乗っている。

### (13) 愛姫・五郎八姫

愛姫は伊達政宗正室。その長女、五郎八姫は家康の六男、松平忠輝正室。

愛姫は(一時期)キリシタンだった。そのため、五郎八姫もキリシタンになったと言われている。五郎八姫が忠輝と離婚した時は20歳代前半の若さであり、父政宗や母愛姫は娘の五郎八姫を心配し再婚を持ちかけたが、五郎八姫は断り続けていたといわれている。両親や周囲にいくら勧められても終生再婚しなかったのは、教義上「離婚」を認め



ないキリシタンの信仰ゆえ、と一般には考えられている。

ちなみに、忠輝もキリシタンだったとする説がある。それが、秀忠から改易された要因の一つとも言われている。

## （14）伊東家の食卓

伊東家は日向の大名で島津家に敗れるところだけがクローズアップされるが、本書ではそんなぞんざいな扱いをしない。

### ① 伊東義賢

伊東義祐の嫡孫。

伊東義祐は日向の戦国大名で、一時勢力を築いたが、京風の奢侈に染まり弱体化したところに、島津氏に大敗。母方縁戚である豊後国の大友宗麟を頼ったものの、その宗麟も耳川の戦いで島津氏に大敗した。

義賢は、大友宗麟の影響でキリシタンとなった（洗礼名バルトロメオ）。

父・義益が永禄12年（1569）に病死したため、祖父・伊東義祐の手によって養育された。天正5年（1577）8月に正式に家督相続するが、幼少のため実権は祖父・義祐の元にあった。同年、伊東氏は没落し日向国から逃亡、母の縁者である大友氏に助けられ、その保護を受けた。この時に大友宗麟の影響を受けてキリシタンになり、天正10年（1582）に受洗した。天正15年（1587）、九州征伐の後、叔父・伊東祐兵が飢肥城に復帰すると帰参した。

文禄の役で伊東勢の一人として朝鮮に出兵するも病気となり、文禄2年（1593）帰国途中船上で死去した。享年27。

史料上では病死とされるが、伊東祐兵との家督争いを防ぐために暗殺されたという説もある。

### ② 伊東祐勝

伊東氏の家臣。伊東義益の次男。兄に伊東義賢。

伊東氏が没落すると母の縁者である大友宗麟の保護を受け、天正8年（1580）に大友宗麟の影響を受けてキリシタンとなった（洗礼名ジェロニモ（ゼロニモ））。安土のセミナリオに留学し、天正遣欧少年使節の代表の候補者となるが、安土留学中で出発に間に合わないため外された（イエズス会日本年報）。

天正15年（1587）、豊臣氏による九州征伐後、叔父・伊東祐兵が飢肥城に復帰すると帰参した。文禄の役では、兄の義賢や叔父らと朝鮮に出兵するも病気となり帰国。その途中で船が暴風雨に襲われ長門まで流されてしまい、同地で病状が悪化し死去した。24歳。

兄・義賢と前後して死去していることから、伊東祐兵との家督争いを防ぐために家臣により暗殺されたとする説もある（『日向纂記』巻7-9）。

### ③ 伊東 祐兵

伊東義祐の三男。伊東氏12代当主。日向国飢肥藩5万7千石の初代藩主。「伊東氏中興の祖」（「南家伊東氏藤原系図（通称「伊東氏大系図」）」や『伊東氏系図』）。

永禄11年（1568）から飢肥城に入り、島津氏と戦う。しかし天正5年（1577）に、福永祐友、米良矩重らの謀反に呼応した島津の侵攻によって父・義祐が佐土原を追われると、祐兵は父とともに同行する。

宗麟は義祐や孫・義賢のため、また日向国をキリスト教国にするという自身の大望のために天正6年（1578）、日向に攻め入り島津軍と衝突したが、耳川の戦いで大友氏は島津氏に大敗した。

大友氏の多くを失ったこの合戦の発端とも言える伊東一族は、大友領内で肩身が狭くなり、祐兵は義賢と祐勝を豊後に残して、父・義祐と自らの内室らと共に海を渡り、四国の伊予の河野氏を頼った。しかし主従は貧しく満足な暮らしは出来ず、家臣は酒造りを営んで生活していたという。

遠祖を同じくする同族である尾張伊東氏の紹介により、祐兵主従は織田家へ仕官することとなり、与力として羽柴秀吉の付属となった。本能寺の変による信長死後はそのまま秀吉の家臣団に組み込まれ、天正10年（1582）の山崎の戦いで活躍し、恩賞として「くりから竜の槍」と河内500石を領地として宛てがわれた。天正15年（1587）の豊臣軍の九州征伐の際に道案内役を務めた功績により、旧領のうち清武・曾井に2万8千石を与えられ、旧領に大名としての復活を成し遂げた。翌年、かつての本拠である飢肥も与えられ、3万6千石に加増された。その後、朝鮮出兵にも参陣した。

慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは、祐兵は大坂にいた。しかし重病の床に伏していたために自身は出陣せず、密かに嫡男・祐慶を領国へ送って軍備を整え、さらに官兵衛を頼って家康に通じた。領国では家老・稲津重政らが陣頭指揮を執り、西軍の高橋元種（種）の属城である宮崎城を攻撃した。実はこの時点で高橋氏は東軍に寝返っていたため、戦後に宮崎城は返還させられたが、東軍としての参加と貢献は認められ、戦後、徳川家康から所領を安堵された。同年のうちに大坂で病死した。

秀吉の手前、表向きは棄教をしていたように装っていたようだ。

あきいえ さきょうのすけ

## （15）宇喜多 詮家 / 左京 亮（坂崎直盛）

宇喜多詮家は、宇喜多忠家（直家の弟）の長男。宇喜多直家の甥、宇喜多秀家の従弟にあたる。のちに改名して坂崎直盛と名乗った。

### ① 宇喜多秀家との確執

従弟の宇喜多秀家に仕えたが（知行2万4千石）、折り合いが悪かった。そのため、慶長5年（1600）1月に宇喜多氏

において、御家騒動が発生すると、秀家と対立。御家騒動を仲裁した家康の裁定によってそのままだ家康のものに預けたいという、直家に発生した関ヶ原の戦いでは東軍に与し、戦後その功により石見国浜田（島根県浜田市）2万石を与えられ、後に同国津和野（島根県津和野町）に3万石を与えられた（大坂の陣の功により加増され4万3468石）。この時、宇喜多の名を嫌った家康より坂崎と改めるよう命があり、これ以降、坂崎直盛と名乗るようになった。

## ②千姫事件

本多忠刻の項ですでに述べた事件であるので、詳細は、中巻Q11の2（2）を参照頂きたい。

この騒動の結果、大名の坂崎氏は断絶した（中村家などが子孫として続いている）。

直盛の性格は、直情的で愚直、偏執気質だった。宇和島藩主で縁戚にあたる富田信高が、直盛が憎む宇喜多左門を匿っていたのを知ると引き渡しを求め、拒否されると武力衝突覚悟で一戦に及ぼうとしたり、引き渡しの一件を家康や秀忠に訴えてまで求めたりするなど、性格にかなりの執拗性が見られる（宇神『シリーズ藩物語、宇和島藩』）。

## ③キリシタンとしての詮家（直盛）

詮家は、文禄4年（1595）に受洗したようである。キリシタンとしての詮家は“若さ”が全面に出ている。次の教会側の記録からは、そういう詮家が見えてくる。

「備前、美作、備中の国主なる宇喜多備前宰相殿（引用者注 宇喜多秀家）の従兄弟に当たり、アゴステイノ（引用者注 小西行長）の非常な親友で、あたかもこの国主の養子のようにしていたおもだった貴人の若者（引用者注 詮家）が、大坂で洗礼を授かってから二ヶ月が経っている（引用者注 ここから受洗した時期が読み取れる）。

若者（引用者注 詮家）は洗礼を授かると備前国の自宅に帰った。彼が帰宅して後、妻は病気に罹り数日を経て死亡した。彼は妻の死去でひどく悲しんだが、それはその夫人が非常に高貴で賢明であり、また十一歳の娘をもっていたからであり、また生まれたときから彼はこんな辛い目にあったことは無かったからである。混乱した彼の心の中に、『それがお前に起こったのは、新しい宗教（引用者注 キリスト教）に入信したためではないか』という考えが入り始めた。非常に多くの仏僧のような他の人々や幾人かの親族たちには、同じようなことを彼の耳に入れた者がいた。

しかし彼はやがて気を持ち直し、目を天に上げて心の中で次のように言った。

『悪魔のこの誘惑は大きいが、デウス様は私の堅固さを確かめるために、この誘惑を許し給うているのだ。そのようなものであるのなら何も私の私から得るものはないであろう』と。

そこで彼は不屈の勇気をもって涙を抑え、亡妻の遺骸のもとへ進み出て彼女の高価な衣装、装飾品、その他すべての所有物を抛り出して、その場にいた人々にこう言った。

『彼女は別な宗派に属していたから、仏僧たちによって彼女は埋葬されるように配慮するが良い。私はキリシタンであるから、彼女のものについては何も口出しはすまい』と。

すると仏僧たちは反対にこう言った。「汝がキリシタンを棄教して、亡妻の宗派の信仰告白をしない限り、我らは指一本も遺体には触れぬであろう」と。彼はこれに対して激しく怒りに燃え反対にこう言った。

『仏僧らはこの件については、何もぐずぐず言わず、遺体についてはこちらが望むように処理して欲しい。もし彼らが望むなら、遺体を泥土に投げ込んで良い。自分は意見を変えるつもりはないであろう』と。

そこで仏僧たちは、彼の固い決心を知ると遺体を墓地へ運んだが、それと一っしょに部屋から抛り出されたすべての衣装を運んだ。

その若者は非常に高貴であったのでヴィセンテ修道士は国王閣白殿の耳に入って、若者自身と我らに何らかの危険が迫らぬよう、すべてのことを隠しておくように願った。彼はそうしようと約束したが、洗礼を授かって恩恵を受けると驚くほど熱心で気が強くなり、すべてのことをいとも自由に仲間たちに言いふらし始めた。

その後、彼は大坂から生地の備前国に行き、毎日自分がキリシタンであることをいっそう宣伝し、我らの宗教の奥義を称賛するだけでは満足でなくなかった。ついてはすべての諸侯が驚嘆し、とりわけ宇喜多備前宰相殿の母がそうであった。彼女は、かの全領国の者とともに、日本中でも非常に邪悪な一向宗に帰依していた。

この若者は、この宗派に決してはいることを望まず、いつも非難を浴びせ、その誤謬と不正を暴いた。しかし彼が高貴な素性であるため、このことで誰も彼をあえて咎めようとせず、そのみならず多くの人々は、彼がデウスのことについて話すのに非常に熱心に耳を傾けた。

我らは彼に、こちらから一枚の金貨とデウス像のメダル一個を贈った。我らは彼が十日もたてば大坂に帰り、それからもう詳しく聖なる信仰箇条を学ぶために都に行くことを期待している」（オルガンティノ、1595年2月14日付、イエズス会総長宛書翰 傍線引用者）

とあり、まず詮家は文禄4年（1595）頃に受洗していたことが読み取れる。明石掃部はこの翌年に詮家の勧めもあって受洗したと言われている。

しかし、詮家には性格的に若干難があった。キリシタンとしての自分を抑えきれずに（若さもあるが）、異教徒を非難し、仏僧や、秀家の母たちとの軋轢を生んでいる。妻の遺体を捨ててもいいと言い放つなど、非常に攻撃的だ。すでに、伴天連追放令が出され、この2年後には、長崎での26人のキリシタンの処刑が行われるなど、秀吉はキリシタン弾圧を強めていた。もし、詮家の振舞いが秀吉の耳に入ればどうなるか、とヴィセンテ修道士は詮家の身を危ぶんでいる。

千姫事件については、当初千姫をもらう約束があったのが本当だったにしても、それにより面目が潰されたとして、それを奪い返そうとしたというのは、いくら詮家が直情型だったとはいえ、不自然な気がする。家康を恐れて、さすがの詮家も手を引くのが自然ではないだろうか。彼が怒りっぽかったことを利用して、関ヶ原後の反乱分子の一

人として潰されたのかも知れない。宇喜多騒動のとき家康の画策で宇喜多家を出奔した重臣の戸川達安や岡利勝らは、それが家康にも伝わったことで警戒され、干姫事件の濡れ衣を着せられて肅清されたのかも知れない。

このあたりからも、官兵衛を含めた他のキリシタン大名たちの慎重さとの違いが浮き彫りになる。

ちなみに、宇喜多騒動で家康側についた人々は、どうなったのであろうか。

#### ④戸川達安

戸川達安は家老（知行2万5,600石）であつたが出奔し、関ヶ原の戦功で備中庭瀬3万石を与えられた。大坂の陣にも参陣し、徳川家臣として重用されたという。跡は次男の正安が嗣いだ。長男に平助（一斎）がいたことが分かっているが、廃嫡されている。また、三男の令安、四男の安尤、五男の安利は旗本としてそれぞれ分家を興している。備中庭瀬藩は4代藩主戸川安風が延宝7年（1679）に無嗣断絶し、庭瀬は一時幕府領となっている。

#### ⑤岡利勝

宇喜多騒動後、徳川家康に仕えたが、息子が明石全登とともに大坂の陣にて豊臣方に与したため、自害している。ということで、それぞれ明暗が分かれている。

#### （16）寺沢広高

棄教後は迫害者に転じている。

広高がキリスト教へ改宗したという説については、イエズス会の記録などに否定的な見解がみられるが、長崎や天草などのキリシタンの多い地域に封じられており、改宗した可能性がないわけではない。

父・広政と共に豊田秀吉に仕えた。文禄元年（1592）からの朝鮮出兵に際しては肥前名護屋城の普請を務め、出征諸将や九州大名への取次を担当し、長崎奉行にまで出世。秀吉の朱印船貿易の創始に努めた。また、朝鮮に出兵した日本軍の補給や兵力輸送の任を務めた。

文禄5年（1596）に受洗したとされる。

秀吉死後は家康に近づき、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いでは東軍に与した。戦後に関ヶ原の戦功によって天草4万石を加増された。豊田政権の九州取次であつたことから、実権を握った家康と島津氏との戦後処理の交渉を仲介するなどしたが、時と共に取次の役割は家康の家臣に委ねられたので権力を失った。慶長7年ポルトガル船貿易をめぐる対立から長崎奉行を解任された。これは秀吉子飼いの外様大名寺沢氏が、徳川政権下で排除されたことを意味しているといわれる。

天草では、慶長18年（1613）の幕府禁教令をうけ、寺沢広高はキリシタン迫害を開始した。宣教師は長崎へ退去したが、司祭が2人隠住していたと言われる。寛永6年（1629）に天草で大規模な迫害が開始され、こども抑えつけられた。島原でも寛永2年（1625）になって過酷なキリシタン摘発が始まり、雲仙岳での処刑もあった。3年で島原地域のキリシタン勢力はほぼ逼塞した。これが、のちの島原の乱の一因となつた。

一方、肥前の唐津では、唐津城を築城し12万3千石を領した。寛永10年（1633）死去、享年71。墓所は唐津市鏡の鏡神社境内にある。地元では志摩様として慕われ、毎年春、桜の花見の時期に小宴が催されてきた。なお、側室の記録はない。

#### （17）板倉勝重



旗本、大名。江戸町奉行、京都所司代。板倉家宗家初代。優れた手腕と柔軟な判断で多くの事件、訴訟を裁定し、敗訴した者すら納得させるほどの理に合った妥当な裁きを見せ、大岡忠相が登場するまでは、名奉行と言えば誰もが勝重を連想したらしい。

勝重は息子の病気をフランシスコ会の病院で治してもらったことがあり、復活祭には教会に来て寄付もしたことがあったという。

その後、勝重は京都所司代となり、幕府の禁教令に反してできるだけキリシタンを捕縛しないように努めた。

「四旬節に、京都では最初の迫害の徴が見えた。將軍の禁令が布かれ、キリシタンは詮索された。異教徒の家に宿つてゐた若干のキリシタンも亦、追放された。然し、所司代板倉殿は、優しく思慮の深い人で、詮索を続ける気はなく、従つて、事はそのまま立消えになつてしまつた。」（『日本切支丹宗門史』第14章 傍線引用者）

しかし、慶長18年（1613）に徳川幕府によって出されたキリシタン禁教令と宣教師国外追放令の後、各地でキリシタンに対する取り締まりが厳しくなつていき、勝重は秀忠の直々の命令でキリシタン処刑をしなければならない立場に追い込まれた。

元和5年（1619）、徳川秀忠は迫害を強め、都でもキリシタン大弾圧がはじまつた。勝重は、多くの信者を捕らえ牢に入れた。10月6日、52名が火あぶりとなつた都の大殉教が起こつた――。

52名の信者たちは、牛車に乗せられて、都の大路を引き回された。男子26名、女子26名、その中の11人は、まだ15歳になっていなかった。鴨川の六条から七条の間、現在の正面橋のあたりに連れてこられた。將軍秀忠の命により、27本の十字架が立てられ、キリシタンたちは、2人、あるいは3人ずつ十字架に縛られた。

勝重は、彼らの長い苦しみを避けるため、薪を多く十字架の下まで積み上げさせ、十字架と十字架の間も薪で埋め

尽くした。殉教者たちはイエス、マリアの名を、声をあげて呼んだ。

この都の大殉教は、元和8年（1622）の長崎の大殉教、元和9年（1623）の江戸の大殉教とともに三大殉教と呼ばれている。

なお、側室の記録はない。

#### **（18）本多正純**

正純は父正信とともに家康の懐刀として吏務、交渉に辣腕を振るい、頭角を現して幕府内で権勢を有するようになる。慶長17年（1612）2月に起きた岡本大八事件（Q17の6（3）参照）における大八がキリシタンであったため、これ以後、徳川幕府の禁教政策が本格化する事になる。

幕府内の権力闘争に敗れ、本多家は改易、身柄は佐竹義宣に預けられ、出羽国横手に流罪となった。正純の失脚により、家康時代、その側近を固めた一派は完全に排斥され、土井利勝ら秀忠側近が影響力を一層強めることになった。

すでに述べたとおり、キリシタンに対して理解を示していた。

なお、側室の記録はない。



## 2・西軍について所領没収

### (1) 石田三成

石田三成は江戸期の御用史家によって姦臣あつかいにされ、筆誅されているが、作家の菊池寛は、「私は史学者ではないが、戦国武将の性格なり感情を理解するうえでは、如何なる歴史家にも、劣るとは思わない」と、断りながら、「とにかく太閤の死後、恩顧の謀將雲の如き中に、家康を相手として天下を争う気魄を示したのは石田三成只一人だった。一行政官三成が、東依西托の寄せ集めにせよ、三十六国四十余人の諸大名を動かして、信長、秀吉にさえ憚られたほどの家康と、国史を画する大決戦を敢行したのだから、成敗を超越して、当代第一流の大人物と言わねばならない。」と、三成を評価している。

おそらく有名な三成だが、評判はよくないようだ。

関ヶ原の戦いの裏でキリスト教団またはキリシタン武将たちが、三成方に勝たせてしまったら、秀吉時代と同様に布教がづらい状況が続くと考えて、家康に味方するように仕向けたという俗説があるほど、三成は秀吉の反宣教師の立場だと思われる。

しかし、その三成が一時キリシタンになった可能性を示す史料がある。

「これ以前に、高山右近はキリシタンとなったが、今は大坂に参集した諸侯を歴訪して、キリシタンの教理を説き、熱心に勧誘したので、小西行長は一族を挙げて、その宗教に帰依して、前田利家、蒲生氏郷、石田三成らをはじめ、多くの諸侯も、これを信仰するに至り、のちに、黒田官兵衛も右近の勧誘により、キリシタンとなり、洗礼を受け、「サイモン」と称した」（シュタイチェン著『キリシタン大名』）

とあるように、三成も一時的には信仰するに至った可能性がある。しかし、彼は秀吉への忠義から、伴天連追放令により少なくとも形の上では棄教したものと思われる。三成が順調に出世したところを見ると、形式的にせよ一度信仰を捨てて見せたのかも知れない。

イエズス会の宣教師の書簡には、秀吉が伴天連追放令を発令したときに三成がとった行動の内容が記されている。

「これらの不信仰の人々の中で重立った者の中に太閤様の非常な愛顧を受けていた博多の奉行がいた（引用者注 石田三成のこと）。彼は己がキリシタンたちに対して〔その数は千名にのぼっていた〕重大な脅迫に加えて、こう命令した。キリシタン（宗門）に対し背教し、すべてのロザリオを自分のもとへ返し、彼らの家々の門戸には異教徒たちが偶像神の名前や、その他の幾つかの文言を書くのを常とした板を打ち付けておくように、と」（1597年3月15日付、ルイス・フロイスのイエズス会総長宛、長崎における26殉教者に関する報告書）。

ただ、慶長元年（1596年）、京都奉行に任じられ、秀吉の命令でキリシタン弾圧を命じられている。ただし、三成はこの時に捕らえるキリシタンの数を極力減らしたり、秀吉の怒りをなだめて信徒達が処刑されないように奔走するなどの情誼を見せたともいわれている（日本二十六聖人の殉教）。

なお、側室を持たなかった。

### (2) 宇喜多秀家

秀家自身がキリシタンだったことを示す史料はないため、キリシタンではなかったものと思われる。ただ、宇喜多騷動の原因の一つは、豪姫がキリシタンであったことから家臣団に対してキリシタンへ改宗するよう命令するに至ったためともいわれる。しかし、家臣団にはすでに敬虔なキリシタンがおり、キリスト教徒と日蓮宗徒との軋轢というのは考えにくいとする説もある。

なお、側室はなく、4男1女ほかを設けた。子供たちは父に従って八丈島に流されている。

### (3) 豪姫



宇喜多秀家正室。前田利家・まつ（芳春院）の四女。豊臣秀吉と北政所の養女して秀家に嫁ぐ。洗礼名マリア。

慶長5年（1600）、秀家が関ヶ原の戦いで石田三成ら西軍方に属していたため、戦後に宇喜多氏は改易。秀家は薩摩に潜伏し島津氏に匿われる。この時に家康の探索を避けるため秀家の死亡偽装工作をしたとされる。しかし慶長7年（1602）、島津氏が徳川家康に降ったため、秀家は助命を条件に引き渡され、息子2人と共に慶長11年（1606）に八丈島に流罪とされる。

その間に豪姫は備前岡山城より娘と中村刑部、一色主善輝昌ら数名の家臣を伴い、兄の前田利長のもとへ戻された。当時の金沢はキリシタン大名として名高い高山右近が客将として住み、多くの藩士がその影響を受けていた。

その後、再婚することなく金沢西町に移り住み、賂を秀家に送り続け余生を送った。寛永11年（1634）に亡くなった（享年61）。葬儀は宇喜多氏の菩提寺浄土宗大蓮寺で行われ、宇喜多家の旧臣であった中村刑部・一色主善ら多くの有縁の者が立ち会った。

### (4) 吉弘菊子・大友義統

大友義統の正室。洗礼名ジュスタ。大友義統は、厳密には関ヶ原の戦い時点では所領がないため、所領没収ではないが、この項で述べることにする。

父は大友氏重臣・吉弘鑑理で、吉弘統幸、立花宗茂は甥に当たる。菊子姫という異名の他、洗礼名から大友ジュスタあるいは旧家の姓を取って吉弘ジュスタとも言われる。義統との間に4人の子供を儲けるが、元来病弱な女性で

あったという。

天正15年（1587）、舅・大友宗麟の命により改宗、洗礼名ジュスタを授かる。この時に息子と二人の娘も受洗、息子はフルゼンシオ、娘はサビイナ、マキシマという洗礼名を授かる。

文禄の役の時、豊臣秀吉の命により上阪し、大坂城下の大友屋敷にて人質となる。しかし、文禄2年（1593）、夫・義統の改易により大坂を追放、夫の配所への同行も許されず、幼い子供3人を連れ旧領の豊後国を供もなく放浪する悲惨な目にあう。その後、柳川城主となっていた甥・立花宗茂の元に身を寄せ筑後国下妻郡禅院村に屋敷を与えられるが、苦労がたたったため、程なく死去した。法号「尊寿院日正」、墓所は尊寿寺（福岡県みやま市）。

次女・桑姫（マキシマ）は「幼いときから長崎にいた祖母・ジュリア（大友宗麟の後妻）に引き取られてその地で死去した」というイエズス会側史料もあり、改易をきっかけに一家離散した可能性もある。

大友義統は、関ヶ原の後、徳川家康派の細川領豊後杵築城を攻めた理由で、常陸国宍戸に流罪に処された。流刑地では再びキリシタンとなったという話も伝わる。この流刑地で大友氏に伝わる文書を「大友家文書録」にまとめたが、このおかげで大友氏は零落した守護大名としては珍しくその詳細を知ることができ、大変貴重な史料となっている。慶長15年（1610年）に死去する。享年53。

大友家は嫡男の大友義乗が継ぎ、旗本として徳川家に召抱えられ、鎌倉以来の名家として高家として栄えた。

なお、義統には側室が1名おり、1男1女を設けた。

### （5）上杉景勝

家老の直江兼続が家康に弾劾状を送りつけ、石田三成と気脈を通じて家康打倒の挙兵をしたが、西軍が関ヶ原で敗れたため、戦後改易となった。

キリスト教に寛容であり、幕府が禁教令を出し、領内での取り締まりを命じられても「当領内には一人のキリシタンも御座無く候」と答えて、領内のキリシタンを護ったと『日本切支丹宗門史』に記載されている（記事の原文は、1629年7月、会津若松の宣教師からイエズス会総長に送られた報告書）。

一方、当時のイエズス会宣教師ペドロ＝モレホンは、景勝を評して「異教徒中の異教徒（大いなる異教徒）」と述べており、景勝自身がキリシタンに好意を有していた訳ではないといわれているが、それは長年苦業を共にしてきた有能な家臣たちを失いたくなかったためと伝えられている。

実際、元和6年（1620）の仙台藩を皮切りに、東北諸藩がキリシタンへの弾圧を開始するなか、米沢藩では景勝が元和9年（1623）3月に没するまでの間、幕府の禁教令を受ける形でキリシタン禁制の高札を領内に立てこそしたが、実際にキリシタンへの取締りや弾圧を行った記録などは残されていないという。

なお、側室（1名）おり、その側室との間に1男を設けた（他に子はいない）。

### （6）織田秀信



幼名、三法師。織田信忠の嫡男、信長の嫡孫。キリシタン大名。岐阜城主、官位は正三位中納言、世に岐阜中納言とも呼ばれた。

キリスト教への理解があり、グネッキ・ソルディ・オルガンティノを尊敬していたという。

文禄4年（1595）には弟・秀則とともに入信しており、「生まれもって位が高く、大きな期待がかけられる」とルイス・フロイスの年報に報告されている。慶長元年（1596）のサン＝フェリペ号事件以後、信仰を公に表す行動は控えていたが、慶長3年（1598）の秀吉没後は他のキリシタン同様、積極的に活動、慶長4年（1599）には岐阜城下に教会と司祭館・養生所を建設、また尾張・美濃は信者が増加し、秀信の家来は大勢信徒であるとアレッサンドロ・ヴァリニャーノにより報告されている。

一方で、寺社の建立を行い、領内の寺院にしかるべき保護も加えており、決してキリスト教一辺倒ではなかった。秀信の創建になる寺院の主だったところには、祖父・信長が甲斐国から美濃国へと移して保護を加えた善光寺如来の分身を祀った伊奈波善光寺堂があげられる。また、円徳寺・法華寺・崇福寺などの寺院を保護した。文禄4年（1595）には崇福寺が信長・信忠及び織田家先祖の位牌所であるため、寺中門前諸役一切の免除を安堵している。

関ヶ原の戦いに際しては、前年から戦支度を進めていた節が見られる。慶長4年（1599）閏3月、岐阜の家臣瀧川主膳に対し、石田三成の奉行職引退、佐和山城蟄居を受けて稲葉山、町口の防備を固めるよう書面で指示している。

慶長5年（1600）に入るとイエズス会宣教師らと面会を重ね、豊臣秀頼に拝謁して黄金200枚、軍儀2千ないし3千石を下賜されている。当初、徳川家康の会津征伐に従軍して出陣する予定であったが、軍装を整えるのに手間取り出発が遅延、この間に石田三成に美濃・尾張の2ヶ国を宛行うとの条件で勧誘されて西軍に加勢した。

降伏した秀信に対する助命はいかなるものかという声も上がったが、家中に秀信家臣の縁者も多かった福島正則が「自らの武功と引き換えに」と助命を主張したため、合戦終結後に岐阜13万石は没収されて高野山へと送られた。岐阜城攻防戦を生き残った秀信家臣の多くは岐阜城攻防戦で戦った福島家、池田家や浅野家などに招聘された。

改易された秀信は高野山で修行を積むことになったが、祖父・信長の行った高野山攻めが仇となって当初は入山が許されず、10月28日まで待たされた。出家が許された後も迫害を受けた。この間、慶長8年（1603）に伯母・三の丸

殿が亡くなった際にはその供養を行っている。

慶長10年（1605）、遂に高野山から追放されてしまう。追放の理由には僧を斬るなど自身の乱行が原因であるとの説があるが、秀信は仏教を迫害しておらず、高野山追放は完全なとぼっちりであるという説もある。

以後世に出ることなく、慶長10年（1605）5月8日、向副で生涯を閉じた。享年26。

なお、側室の記録はなく、3男1女を設けているとされるが定かでない。

## （7）織田秀則

織田信忠の次男、信長の孫。織田秀信は異母兄。洗礼名はパウロ。

慶長元年（1596）頃、大坂城下で暮らしており、キリスト教に入信し、パウロという洗礼名を得る。なお、兄秀信も同時にキリスト教に入信する。ルイス・フロイスは秀則を「素性を知らずに彼と少し話した場合、その品格によりドイツの貴族と判断してしまう」と評している。慶長3年（1598）京都妙心寺に見性院を創建する。見性院はのち美濃の石河氏により桂春院として現在も存続している。

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いに際しては、兄と共に西軍に属し、美濃岐阜城に籠城した。戦後、兄秀信は改易となり、秀則は豊臣家を頼り、大坂城下に移り住む。その後、豊臣家の滅亡にともなって、京都に移り住んだ。晩年は剃髪し、宗爾と称した。

### 3・所領安堵・減封

#### (1) 織田長益（有楽斎）



織田信長の弟。利休七哲の一人。有楽斎は号。洗礼名ジョアン。

関ヶ原戦後も豊臣家に出仕を続け、淀殿を補佐した。大坂冬の陣の際にも大坂城にあり、大野治長らとともに穩健派として豊臣家を支える中心的な役割を担った。冬の陣後、治長と共に和睦を締結させ、家康に人質を出すが、大坂夏の陣を前にして再戦の機運が高まる中、家康・秀忠に対し「誰も自分の下知を聞かず、もはや城内にいても無意味」と許可を得て豊臣家から離れた。

大坂退去後は京都に隠棲し、茶道に専念し、趣味に生きた。元和7年（1621）12月13日、京都で死去。享年76。

なお、側室の記録はなく、6男2女を設けた。

#### (2) 木下勝俊



若狭小浜城主。北政所（ねね）の甥。洗礼名ペテロ。

大名（備中足守藩第2代藩主）、歌人。一時期はキリシタンでもあって、洗礼名は「ペテロ」と伝わる。彼のキリシタンとしての記録はほとんど見当たらない。むしろ、歌人としての業績の方がたくさんある。

歌人としての作風は、近世初期における歌壇に新境地を開いたものとされ、その和歌は俳諧師・松尾芭蕉にも少なからぬ影響を与えている。

弟に小早川秀秋。叔母（父の妹）に北政所。娘は徳川家康の五男信吉の妻。

豊臣秀吉に仕え、数少ない縁者として重用された。

関ヶ原の戦いでは、東軍に属し鳥居元忠と共に伏見城の守備を任されたものの、西軍が攻め寄せる直前に城を退去することとなった。戦後、その伏見城退去の責を問われて除封となる。

京都東山、叔母高台院が開いた高台寺の南隣りに挙白堂を営み、そこに隠棲、長嘯子と号し、歌人として活躍した。小堀政一や伊達政宗といった大名をはじめとして、林羅山や春日局といった幕府の要職にあった人たちが、藤原惺窩とその息子の冷泉為景（叔父・冷泉為将の養子）、松永貞徳、中院通勝たち文化人らとも交流を持った。弟子には先に挙げた山本春正や岡本宗好、打它公軌といった人たちがいる。また、石川丈山、下河辺長流や山鹿素行にも私淑され、山鹿素行には住居の訪問を受けている。

後水尾天皇が勅撰したと伝えられる集外三十六歌仙にも名を連ねている。

慶安2年（1649）、同地で死去。遺された和歌作品の数々は、弟子の山本春正らによって、歌集『挙白集』として編纂されている。

#### (3) 宗義智



対馬領主。小西行長の娘マリアを妻に迎えたときに受洗したが（洗礼名ダリオ）、関ヶ原の合戦後すぐに棄教、マリアも離縁した。

宗義智は、天正18年（1590）キリシタン大名小西行長の娘（洗礼名はマリア）を妻とし、義父の小西行長の影響を受けてキリシタンにもなっていた。この時秀吉は既に禁教令を出しており、大名がキリシタン信者となるのを非常に嫌っていたが、翌年の天正19年（1591）に宗義智はマリアの勧めに従って、インド副王の使者として来日していた巡察使ブアリニアーノにより極秘に洗礼を受け「ダリオ」と言う洗礼名を授かっていた。

朝鮮の役で日本軍を慰問したグレゴリオ・デ・セスベデス神父は「極めて慎み深い若者で、学識があり、立派な性格の持ち主」と評している。

さらに文禄・慶長の役の時のイエズス会の宣教師セベデス神父と、日本人イلمマンの朝鮮の陣での二度の布教と、往復時の四度の来島による布教により、重臣と身分の高い家臣の殆どが洗礼を受け、一般の対馬島民の中にも洗礼を受けた者がいたことも分かっている。対馬は、義智が巡察使ブアリニアノーノやセベデス神父に約束した通り、キリシタンの国となろうとしていた。

しかし、関ヶ原の戦いでは西軍に与して伏見城攻撃に参加し、大津城攻めや関ヶ原本戦では家臣を代理として参加させた。関ヶ原の合戦での西軍の敗戦に伴い、家康への恭順の意を示すため、やむなくマリアを離縁。

文禄・慶長の役のために悪化した朝鮮との関係を修復するように徳川家康から命じられた義智は、慶長14年（1609）に朝鮮との和平条約を成立させた（己酉約条または慶長条約）。この功績を家康から賞され、宗氏は幕府から独立した機関で朝鮮と貿易を行なうことも許されている。

対馬は幕府の眼が行き届かなかったこともあり、禁教令後も、キリシタン信仰は潜行して続いたと言われている。

慶長20年1月3日（1615年1月31日）に死去。享年48。

なお、側室1名おり、全体として1男5女を設けている。

#### （4）毛利高政

森高次の子。豊後佐伯藩の初代藩主。安芸の毛利家とは血縁関係はなかったが、毛利輝元から毛利姓を与えられたといわれている。

天正11年（1583）の大坂城築城、同14年（1586）の方広寺建立の際には石材運搬の奉行を務めており、この年にキリスト教の洗礼を受ける。

関ヶ原の戦いでははじめは西軍に与し、丹後田辺城攻めに参加するも途中、東軍に寝返った。藤堂高虎のとりなしで改易を免れた要因の一つとなった。

慶長6年（1601）、豊後海部郡（現在の大分県佐伯市周辺）2万石へ転封となった。

レオン・バジェスの『日本切支丹宗門史』によれば、慶長11年（1606）、「エルナンド・デ・サン・ヨゼフ師（アウグスチノ会）は、当時豊後から佐伯近くに行き、城下に小さな修道院を建て、聖ヨゼフの保護の下に置いた。伊勢守殿（高政）という大名は一度改宗したことのある背教者であり、自費で天主堂、もう一つさらに大規模な修道院を建てた」とある（傍線引用者）。

この時点で棄教していなかったかも知れないし、棄教していたが、豊後国内にはキリシタンが多かったことから、領内のキリシタンに配慮していた可能性がある。

寛永5年（1628）11月、70歳で死去した。蜂須賀家政や京極高知と同様、静かに隠居してキリシタンを迫害をしなかったといわれている。

なお、側室の記録はなく、2男1女を設けた。

#### （5）毛利秀包



キリシタンであったため、熊谷元直、天野元信らとともに不自然な死を遂げている（上巻注釈6参照）。

なお、側室はおらず、3男1女を設けた。ちなみに、娘は黒田直之の養女に出されており、黒田家の重臣吉田重成に嫁ぎ、加藤清正が朝鮮の役で捕縛した朝鮮王子の子・日延上人を博多に招いて香正寺を開かせている。

#### （6）筑紫広門

筑後国上妻郡の国人領主で、肥前国の勝尾城主。なお、妻は高橋紹運の妻と姉妹関係にある。1595年頃、キリシタンになったといわれている。

父の筑紫惟門が大夫氏に降伏し、まもなく没したため（自害説もある）家督を継ぐ。耳川の戦いの後に反旗を翻すなど大夫氏に反抗的であったが、天正14年（1586）には高橋紹運の次男・高橋統増（立花直次）に娘を嫁がせて縁戚となり、再び大夫氏の傘下となった。そのため、同年に起こった岩屋城の戦いの際には大夫氏に味方し、島津氏に攻められて領地を奪われた。島津軍の捕虜となって幽閉されてしまうが、翌年に豊臣秀吉の九州征伐がはじまり、島津軍が撤退すると幽閉先から脱出し、家臣を集めて旧領を奪回。その功を賞されて、筑後国上妻郡に1万8千石の所領を与えられた。

島津軍に敗れ、幽閉の身となっていた際に、「忍ぶれば いつか世に出ん折やある 奥まで照らせ 山のはの月」という和歌を詠んだというが、これを聞いた人達は、「昔は広門、今は狹門」と嘲笑したとされる。しかし、和歌の内容と同じように旧領は取り戻している。

文禄・慶長の役にも参陣し、小早川隆景の配下の部隊として奮戦する。1600年、関ヶ原の戦いで西軍に属して京極高次が守る大津城を攻め、戦後改易された。その後は剃髪して夢庵と号し加藤清正を頼り、加藤家改易後は細川氏を頼った。死後、息子の筑紫主水正広門は、大坂の役の戦功で寛永4年（1627年）に3千石の所領を与えられ、子孫は旗本として存続した。



## （7）島津義弘

天正18年（1590）島津義弘、イエズス会に山川港寄進を申し出たという記録がある。

また、1549年9月29日、ザビエルが日本最初にキリスト教の布教が行ったのが、島津義弘が少年時代を過ごしていたのが伊集院城である（JR伊集院駅前には島津義弘の銅像が建てられている）。

しかし、島津氏は異教徒であるから、義弘はキリシタンを弾圧した側であった。

## 4・国外追放

### (1) 高山右近

Q17参照。追放され、マニラで客死。

### (2) 内藤忠俊（<sup>じょあん</sup>如安）

追放され、マニラで客死。洗礼名ジョアン。如安はキリスト教への受洗名ジョアンの音訳名。

天文19年（1550）頃、三好氏重臣・松永久秀の弟・松永長頼の子として生まれる。つまり、松永久秀の甥にあたる。

永禄7年（1564）、ルイス・フロイス（またはガスパル・ヴィレラ）によりキリスト教に入信したという。

さらに畿内では当時、將軍足利義昭と織田信長が対立していたが、如安は丹波守護代内藤家として足利義昭を支持し、信長に敗れた義昭が京都を下向した後も織田氏に敵対する行動を取った。天正6年（1578）、織田氏の家臣・明智光秀の攻撃に遭い八木城は落城し、所領を没収された（フロイスの文書によると如安はこのとき堺にいた足利義昭に随行していたという）。

その後、足利義昭が備後・鞆（現在の広島県福山市鞆町）に幕府を移すと、出仕した。如安は丹波守守護代の内藤家の血のもとに生まれ、零落していく足利最後の將軍吉昭にまごころをもって仕えた。如安は義のために生きた男であった。

天正13年（1585）頃に小西行長に仕えるようになった。行長は如安を重用して重臣に取り立て、小西姓を名乗ることを許した。ちなみに小西氏は如安の外曾祖父にあたる内藤貞正の弟内藤久清に始まる家系であり、如安は行長より一世代下に当たる。この優遇は同族一門としての処遇の可能性もある。

文禄の役では小西隊の副将として戦い、明との和議交渉では使者となり、北京へ赴いている。、この際の明・朝鮮の記録では如安を「小西飛（ソソビ、소서비）」（小西飛驒守の略）として表記している。小西行長と同様、戦争を早く終わらせようという意図があったと言われている。

慶長5年（1600）9月、関ヶ原の戦いで主君の行長は西軍の主力として戦って敗れ、斬首された。如安は、小西行長の留守部隊をあずかって宇土城に籠城し、加藤清正軍と互角の戦いをした。如安は同じキリシタンである肥前の大名・有馬晴信の手引きで平戸へ逃れ、その後加藤清正や前田利長の客将となった。前田氏の居城・金沢城には同じくキリシタンである高山右近がおり、ともに熱心に布教活動や教会の建設に取り組んだ。しかし慶長18年（1613）、家康からキリシタン追放令が出され、前田氏にも通達が及んだ。

翌慶長19年（1614）9月、如安は高山右近や妹のジュリアと共に呂宋（今のフィリピン）のマニラへ追放された。到着先のマニラでは、高山右近と同様、総督以下住民の祝砲とともに迎えられるなど、手厚い歓迎を受けている。

マニラではイントラムロス近くに日本人キリシタン町サンミゲルを築き、12年後の寛永3年（1626）、病死。享年77歳。現在はサンミゲル近くの聖ヴィンセント・ポール教会に終焉の地の記念の十字架が建っている。

## 5・その他（関ヶ原の戦いに無関係）

### （1）池田教正

三好義継（長慶の養嗣子）が若江城主であったころの筆頭家老。はじめ三好氏に属した。池田丹後守という名は、室町幕府13代將軍足利義輝が暗殺された際に襲撃者の一人として登場する。教正の経歴から、この池田丹後守は教正だと推測されている。

その後松永久秀に属し、久秀が信長に降った後は、これに同調。1573年、三好義継が信長と敵対した際は、若江城に佐久間信盛の軍勢を手引きし、かつての主君・義継の敗死に一役買っている。義継の死後は、河内国の北半分を統治。対石山本願寺戦の大將である佐久間信盛の与力となっていた。茶道好きの佐久間の与力となっていたためか、3人とも津田宗及の記録にたびたび登場し、盛んに茶会に参加している様子が窺え、茶道に造詣が深かったとされる（『宗及記』）。

キリシタンとしても当時は著名な存在であった。キリスト教関連の史料には「イケビタフゴノカミ」という音で表記されているが、これは池田丹後守（イケダタンゴノカミ）が宣教師などには前記のように聞こえたものと思われる。また、洗礼名はシメアンという（官兵衛の洗礼名はシメオンと書きます）。

秀吉が伴天連追放令を出す前のキリシタンとの蜜月時代に、高山右近、小西行長、安威了佐（秀吉の祐筆）らとともに、大いに宣教師のために尽力していた。秀吉の大奥にさえ幾人かのキリシタンがいたくらいであった。

本能寺の変後から池田恒興（清州会議に出席した四家老のひとり）に仕え、小牧・長久手の戦いにも参加し、池田隊の先鋒に名が見える（『太閤記』『イエズス会日本年報』）。戦後、父兄の戦死により池田家の跡を継いだ池田輝政の美濃転封にも従っている。

のち豊臣秀次に仕えて、文禄2年（1593）に清洲奉行、木曾木材奉行を任命されている（『駒井日記』）。同年（1595）の秀次事件に際して、秀次自決の後に秀吉の命で処刑されたともされるが、その最期は詳しくはわかっていない。

### （2）和田惟政

近江国甲賀郡和田村（滋賀県）の有力豪族であった。はじめは六角氏および室町幕府13代將軍・足利義輝の幕臣として仕えた。

永禄8年（1565年）、義輝が家臣の松永久秀らによって暗殺されると、軟禁されていた義輝の弟・覚慶（足利義昭）を仁木義政とともに一乗院より救い出して一時は自身の屋敷にも匿い、のちに放浪する義昭に付き従っている。

越前国の朝倉義景、尾張国の織田信長の援助を得て還俗した義昭が15代將軍に就任すると、信長によって摂津国芥川山城、のちに高槻城を与えられ、足利義昭からは池田勝正、伊丹親興とともに摂津国の守護の1人として任命され「摂津三守護」と称された（『足利季世記』）。

以後、足利幕臣として京都周辺の外交・政治に大きく関与しながら、織田氏家臣としても信長の政治や合戦に関わるという義昭と信長の橋渡しの役割を務めている。特に永禄12年（1569年）10月には、信長に援軍を要請した播磨国の赤松氏の援軍として、備前国の浦上氏攻めに参加している。

その後、惟政は所用で美濃国にいる信長のもとへ向かう途中、信長から塾居を命じられた報を受け取る。ルイス・フロイスによれば他に「引見の不許可」「惟政が近江に持っていた城の破壊」「収入のうち2万クルザーの没収」という厳しい処分だった。フロイスはこれを朝山日乗が信長に讒言したためと記しているが、同時期に信長と足利義昭の関係が悪化している事が大きな原因と推測されている（惟政は幕臣）。惟政はこれに刺髪して抗議した。

元亀元年（1570年）、惟政は京で越前攻めに向かうとしている信長に謁見すると、信長はその地位を回復した。フロイスによれば3万クルザーの俸禄を加増されるなど、非常に厚遇されたという。6月28日の姉川の戦いには織田氏方として参加したようである。

11月、多方面に敵を抱える形となった信長は將軍・義昭の権威を利用して六角氏と和睦をしているが、この際に、三雲成持・三雲定持宛てに惟政が宛てた書状（福田寺文書）があり、かつて六角氏の影響下で同じ甲賀の土豪であった三雲氏との繋がりから、この六角氏との和睦にも一役買っていたものらしい。

元亀2年（1571）、松永氏三好三人衆と手を結んだ池田知正を討つため、伊丹氏や茨木氏と共に摂津国白井河原の戦い（茨木川畔）で池田氏家臣の荒木村重に敗れ戦死。多くの貫通銃創、刀傷を受けた上、首を取ろうとした相手にも傷を負わせて死んだという、壮絶な最期であった。

惟政の没後まもなく、子の惟長は高山友照、右近父子により追放され、まもなく死亡し、和田氏は没落することになる。

惟政はキリスト教を自領内において手厚く保護したことが、ルイス・フロイスの『日本史』に詳細に書かれている。フロイスが織田信長と会見するときに仲介役を務めたほか、教会に兵を宿泊させないよう他の武士たちに働きかけたり、内裏が伴天連追放の論旨を出すのを撤回させようとしたり、宣教師をむりやりにでも自分の上座に座らせたりと、大変な熱意だったようである。畿内におけるキリスト教の布教にも積極的に協力した。

しかし、惟政自身は洗礼の儀式を受ける前に戦死したために、その死をフロイスは大変嘆いた。なお、キリスト教と出会う前は禅宗に属していたといわれる。

### （3）一条兼定

土佐国の国司。土佐一条氏の事実上の最後の当主。

天文12年（1543）、一条房基の嫡男として生まれる。天文18年（1549）、父・房基が自殺したため7歳で家督を継

このため、土佐一条氏出身で関白となっていた大叔父（兼定の祖父・一条房冬の子）の一条房通が養父となつて後見する。房通が亡くなった弘治2年（1556）以後に元服、房通の跡を継いだ義兄の一条兼冬より偏諱（「兼」の字）を受けて兼定と名乗る。

永禄元年（1558）に伊予国の宇都宮豊綱の娘を娶るが、永禄7年（1564）に離別して豊後国の大友義鎮の次女を娶り大友氏と結んだ。また、伊予国の覇権をめぐる永禄11年（1568）には豊綱を支援して伊予に進出するが、安芸国の毛利氏の援兵を受けた河野氏と戦って大敗。また、京都の一条家本家（当主は兼冬の子・内基）とも次第に疎遠になってきていた。

この頃から土佐国において長宗我部元親が台頭すると、妹婿の安芸国虎と呼応してこれを討とうとしたが、永禄12年（1569）に国虎が逆に元親に討たれた。その後は長宗我部氏によって領土を侵食され、また重臣の土居宗珊を無実の罪で殺害したために信望を失い、他の三家老である羽生、為松、安並などの合議によって天正元年（1573）9月に隠居を強制され、天正2年（1574）2月に豊後臼杵へ追放されて大友氏を頼った。兼定の追放を知り憤慨した加久見城主・加久見左衛門は平素から一条氏老臣に反感を抱いていた大岐左京進、大塚八木右衛門、江口玄蕃、橋本和泉らと謀りに挙兵して中村を襲い一条氏老臣を討伐した。この混乱に乗じ、叛乱鎮定に名を借りた元親により中村を占領されることになった。

翌天正3年（1575）、キリスト教に入信し、宣教師ジョアン・カブラルから洗礼を受けた。洗礼名はドン・パウロ。同年7月、兼定は大友氏の助けを借り再興を図って土佐国へ進撃したが、四万十川の戦いで大敗し滅亡した。その後は瀬戸内海の戸島に隠棲したが、旧臣に暗殺されかけるなどの苦難にあった様子がアレッサンドロ・ヴァリニャーノの書簡などから伺える。

天正13年（1585）に戸島で死去。

一代で土佐一条氏を滅ぼしたため『土佐物語』など軍記には暗愚な人物として描かれている。ただこれらは時代が下ってから記されたものであるため信用性に疑問が残る。追放後も、四万十川の戦いに際して伊予・土佐の国人領主の支持を受け、更に長宗我部氏の工作に買収された旧臣に殺されかかるなど、兼定は最後まで旧領回復の強い意思を示し、反対に長宗我部氏はその存在を警戒し続けたことがうかがえる。

## （4）大友宗麟（義鎮）

### （1）概観

豊後の戦国大名。大友氏第21代当主。宗麟は法号で出家前は義鎮。

海外貿易による経済力と、立花道雪をはじめとする優れた武将陣、巧みな外交により版図を拡げ、大内氏や毛利氏をはじめとする土豪・守護大名などの勢力が錯綜する戦国の北九州東部を平定した。

当初は禅宗に帰依していたが後にキリスト教への関心を強め、ついに自ら洗礼を受けた。最盛期には九州六ヶ国に版図を拡げたが、耳川の戦いに大敗して「キリシタン王国」建設間近で島津義久に敗れ、晩年には豊臣秀吉傘下の一大名に甘んじて豊後一國までに衰退した。

義鎮がキリスト教に関心を示してフランシスコ・ザビエルら宣教師に大友領内でのキリスト教信仰を許可したため、これが大友家臣団の宗教対立に結びついて、義鎮の治世は当初から苦難の多いものであった。

義鎮は九州における最大版図を築き上げ、大友氏の全盛期を創出した永禄5年（1562）に出家し休庵宗麟と号した。

毛利氏は山陰の尼子氏を滅ぼすと、再び北九州へ触手を伸ばすようになる。永禄10年（1567）、豊前国や筑前国で大友方の国人が毛利元就と内通して蜂起しこれに重臣の高橋鑑種も加わるという事態になったが、宗麟は立花道雪らに命じてこれを平定させた。

また、この毛利氏との戦闘の中で宗麟は宣教師に鉄砲に用いる火薬の原料である硝石の輸入を要請し、その理由として「自分はキリスト教を保護する者であり毛利氏はキリスト教を弾圧する者である。これを打ち破る為に大友氏には良質の硝石を、毛利氏には硝石を輸入させないように」との手紙を出している。

天正4年（1576）、家督を長男の大友義統に譲って丹生島城（臼杵城）へ隠居する。このときから義統と二元政治を開始した。

なお、耳川の戦い直前の7月、宗麟は宣教師のフランシスコ・カブラルから洗礼を受け、洗礼名をフランシスコと名乗り、正式にキリスト教徒となった。以後、家臣へ宛てた書状の中などでは自身の署名として「府蘭」を用いている。

天正5年（1577）、薩摩国の島津義久が日向侵攻を開始すると、宗麟も大軍を率いて出陣した。しかし天正6年（1578）に耳川の戦いで島津軍に大敗し、多くの重臣を失った。

さらに天正7年（1579）頃からは、筑後の諸勢力が大友氏の影響下から離れ、また、家督を譲った大友義統とも、二元政治の確執から対立が深まり、以後の大友氏は衰退の一途をたどる。

天正12年（1584）に沖田畷の戦いで龍造寺隆信が義久の弟の島津家久に大敗北を喫し戦死すると、立花道雪に命じて筑後侵攻を行い、筑後国の大半を奪回に成功した。しかし天正13年（1585）に道雪が病死してしまい、これを好機と見た島津義久の北上が始まることとなる。もはや大友氏単独で島津軍には対抗出来なくなっていた。

このため天正14年（1586）、宗麟は秀吉に大坂城で謁見して、豊臣傘下になることと引き換えに軍事的支援を懇願する。

しかし島津義久はその後大友領へ侵攻し、天正14年（1586）12月には島津家久軍が戸次川の戦いで、大友氏救援

に赴いた豊田軍先発隊（仙石秀久を軍監とする四国勢）を壊滅させ、さらに大友氏の本拠地である豊後府内を攻略する。

この時、臼杵城に籠城していた宗麟は大砲・国崩し（フランキ砲のこと。その大きな威力からこのように名づけられた）を使って臼杵城を死守し戦国大名としての意地を見せた。しかし大友氏はもはや数ヶ月すら持ち堪えられないところまできており、島津義久により滅亡寸前にまで追い詰められた。

天正15年（1587）、大友氏滅亡寸前のところで豊田秀長率いる豊臣軍10万が九州に到着。さらに遅れて秀吉自身も10万の兵を率いて九州征伐に出陣、各地で島津軍を破っていく。

宗麟は戦局が一気に逆転していく中で病気に倒れ、島津義久の降伏直前に豊後国津久見で病死した。58歳。死因はチフスが有力とされる。

九州征伐後、秀吉の命令で大友義統には豊後一国を安堵された。秀吉は宗麟に日向国を与えようとしていたが統治意欲を失っていた宗麟はこれを辞退した、もしくは直前に死去したとされている。

墓は大分県津久見市内と京都大徳寺の塔頭寺院である瑞峯院にある。さらに津久見市上宮本町の響流山長泉寺に位牌がある。肖像画は瑞峯院に所蔵されている。宗麟の死の直後はキリスト教式の葬儀が行われ墓は自邸に設けられたが、後に嫡男・義統が改めて府内の大知寺で仏式の葬儀を行い墓地も仏式のものに改めた。その後、墓は荒廃したが寛政年間（1789～1801年）に宗麟の家臣の末裔である臼杵城豊が自費で改葬した。津久見市内の現在の墓所は昭和52年（1977年）に当時の大分市長・上田保によって新たにキリスト教式の墓として、従来の場所から移されたものである。

## （2）キリシタンとしての活動

キリシタンとなったのは従来の仏教を見限りキリスト教に帰依した為であった。天正6年（1578）に宗麟はキリシタンに改宗したが、それにとりなう家臣の集団改宗が進められて領内の信者数も1万人を超える勢いであった。しかし、キリシタンになったことが大友家臣団の離反を招き、晩年に国人の反乱多発という形で表面化する事となる。

また、宗麟はキリスト教信仰の為に、神社仏閣を徹底的に破壊する（「住吉大明神破却」「彦山焼き討ち」「万寿寺炎上」宇佐八幡宮を焼き払ったことなど）、金曜日・土曜日には断食をする、それまで家に伝わっていたるまをも破壊する等の破壊行為も行なっている。

ただ、義鎮がキリスト教の為に徹底した神社仏閣破の破壊解体を行ったのは、主にキリスト教国建設を夢見たとされる侵略先の日向国に於いてであり、本拠である豊後国内や筑後国内で行われた神社仏閣の徹底的な破壊は、次期当主義統が行っており、義鎮が主導したという資料は見当たらない。これは当然に宗教心が発した行動であり、仏僧の奢侈を嫌い、寺社領を取り上げる政治的意図があったにせよ、単に寺社を破壊するだけでなく仏像や経典の類まで徹底して破壊されている。しかし、義鎮が積極的に神社仏閣の破壊を命じたのは主に日向であり、豊後等での神社仏閣の破壊や寺社料召し上げは義統によるものである。

臼杵城に籠城する際に、宗麟はキリスト教徒もそうでない者も城に避難させ、自ら握り飯等を配った。宣教師はそうした行いを記録にまとめ、その中で宗麟のことは「王」と記している。キリスト教には「汝、殺すなかれ」という教えがあるが、宣教師はキリスト教信仰に基づく宗麟の質問に対して、戦の上で殺生は何の問題も無いと返答している。

若い頃、南蛮人が持ってきた鉄砲が試し撃ちの際に暴発して弟が手に怪我をしたが、その時に西洋医学による応急処置を見ている。また、弘治3年（1557年）に府内（現在の分県庁舎本館のある場所）で日本初の西洋外科手術をポルトガル人医師1名と、助手に日本人医師2名の計3名で手術を行なった。当時の豊後はらい病が風土病になっており、らい病の手術と大分県史に記されている。日本人医師2名は否葉紋・苗字・太刀を宗麟から賜っている。現在、大分県庁舎本館前には「日本における西洋外科手術発祥の地」の記念碑が立っている。加えて宗麟は領内に、宣教師が伝えた西洋医学の診療所を作り、領民は無料で診察を受けることが出来た。

天正10年（1582年）に九州のキリシタン大名らがローマへ派遣した天正遣欧少年使節では、伊東マンショを名代として派遣しているが、義鎮本人が関知していなかった可能性が高いという説もある。

## （3）まとめ

当初は禅宗に帰依して宗麟と号したが、キリスト教に帰依したあたりは、官兵衛と似てなくもない。葬儀もキリスト教式で行われたが、のちに義統により仏式の葬儀も行われたあたりも、官兵衛と似ていなくもない。

大友家の最大版図を築いたが、キリスト教を信じて神社仏閣を破壊した行為などが、家臣領民の離反を招き、衰退を招いた点は異なっていた。宗麟が秀吉に救いを求め、これに応じた官兵衛が九州に出兵していて、その混乱状況を見ていたはずであり、官兵衛がその混乱ぶりを他山の石としていた可能性が十分にある。

## （4）一族

### ① 大友親家

大友義鎮（宗麟）の次男。母は奈多夫人。田原親賢の養子。

霸気があり気性が荒かったため、はじめ家督争いを避けようとした父・宗麟によって僧籍に置かれるが、親家はこれに反して還俗し（父に従い臼杵の教会を訪れ、キリスト教に感化されたためともいわれる）。天正3年（1575）11月にはキリシタンとなって（ドン・）セバスチャンという洗礼名を得た（この後、降誕祭に伴い町中の寺院数ヶ所を破壊したともいわれる）。

天正14年（1586）からの島津氏との豊薩合戦において、犬猿の仲であった兄・義統に不満を抱き、島津義久に通じた。そのため九州を平定した豊田秀吉からその不忠を咎められ、父の取り成して助命されたが、役職は罷免され、所



領は没収されたという。また、『フロイス日本史』によると、この前後の時期に片目の視力を失ったと記されている。

その後は、宗麟のもとに引き取られ臼杵に移り、父の臨終に立会いその葬儀も執り行った。天正19年（1591）8月には、再び加判衆に再任され、天正20年（1592）の文禄の役にも参陣した。大友氏が改易された後は、立花宗茂の軍に付けられ、のち、1609年には細川忠興に100石30人扶持で客分として仕官し、利根川道孝と改名した。

寛永18年（1641）、死去。墓所は熊本市にある岫雲院（春日寺）。子の大友親英の子孫は細川氏の直臣となり、松野氏を称した。

## ② 大友親盛

大友宗麟の三男。母は奈多夫人。田原親賢の養子。

天正8年（1580）に洗礼を受けキリスタンとなる、洗礼名はパンタレアン。大友氏の有力家臣で叔父である田原親賢が養子の田原親虎を廃嫡し武蔵田原家の後継者が不在となると、天正9年（1581）、親賢の婿養子となり、名を田原親盛と改め、妙見嶽城に入った。

父の宗麟は子の中でも親盛を最も信頼したとされ、島津氏との戦いである豊薩合戦においては、主に妙見嶽城を拠点に、秋月・島津両氏と内通した豊前国人衆の反乱への対処に奔走して豊前方面で活躍、戸次川の戦いでは先陣を務めた。また、豊後府内を脱出した兄・義統やキリスト教宣教師らを妙見嶽城に保護している。

天正20年（1592）の文禄の役にも参陣したが、兄・義統の敵前逃亡を咎められたため、文禄2年（1593）に大友氏が改易され、細川忠興に2000石で仕え（後に1000石加増）、名も松野平斎と改めた。

寛永20年（1643）、死去。墓所は兄・親家と同じ熊本市岫雲院（春日寺）。

## ③ 志賀親次

大友氏の家臣・志賀親度の子として誕生。親次は武勇に優れ、母が大友宗麟の娘ということもあって重用された。

天正12年（1584）9月に父・親度が主君の大友義統と不和になって失脚すると、19歳の若さで家督を継ぐことを命じられた。天正13年（1585）にはキリスタンとなり、ドン＝パウロという洗礼名を得ている。

天正14年（1586）、島津氏が豊後国に侵攻して来ると（豊薩合戦）、父の親度や他の南郡衆が島津氏に味方する中で、親次は居城・岡城に立て籠もって徹底抗戦し、島津義弘や新納忠元が指揮する島津の大軍をわずかな兵力で何度も撃退した。豊臣秀長の援軍が豊後国に上陸すると、反乱した南郡衆を滅ぼし、父を自刃させる。この戦いで見事な采配を振るった親次に対し、豊臣秀吉に厚く絶賛され、敵将の島津義弘からも「天正の楠木」と絶賛された。

その後は祖父・親守の後見を受け、岡城を拠点に日田にも所領を拡大し、島津侵攻で多くの家臣を失った（戦死・反乱・独立等）大友家中において、抜群の武功で名を上げかつ名族でもある親次は発言力を強めていたようである。ところが、こうしたことから主君・吉統からはかえって疎まれることになった。中でも、宗麟の死後にキリスト教は禁教とされ、親次は棄教を拒否し豊後におけるキリスタンの事実上の保護者となっていたが、親次が大友義乗の大版訪問に随行中に吉統によって宣教師たちは豊後から追放される仕打ちをうけている。

天正20年（1592）の文禄の役に参陣したとき、誤報を信じたため戦況を見誤り撤退を義統に進言してしまい（戦さ自体に大義がなく、戦闘を避けたとも言われている）、これを敵前逃亡とみなした豊臣秀吉の怒りに触れて、大友氏は改易され親次も所領を失った。なお、『フロイス日本史』の大友氏に関する記述は、このときに親次が仕官先を求めて上京するところで終わっている。

その後は、秀吉や福島正則、小早川秀秋、細川忠興にそれぞれ仕えた。子孫は熊本藩士として明治まで続いたという。

まな　せどうさん

## （５）曲直瀬 道三

戦国時代の医師。道三は号。正盛（しょうせい）。日本医学中興の祖として田代三喜・永田徳本などと並んで「医聖」と称されることも。戦国時代・日本随一の名医で、診察・治療した相手として、將軍足利義輝・三好長慶・松永久秀・正親町天皇・織田信長・毛利元就などが名を連ねている。養子に曲直瀬玄朔（正紹）。

晩年の天正12年（1584）、豊後府内でイエズス会宣教師オルガンティノを診察したことがきっかけでキリスト教に入信し、洗礼を受ける（洗礼名はベルシヨール）（フロイス「日本史」）。

難病で激痛に苦しんでいたフィゲイレドが府内から、治療を受けるために訪ねてきた時、名医・曲直瀬道三は77歳で診察した。耳がよく聞こえなくなっていましたので、司祭は彼の耳に口を寄せて話したという。司祭は、道三の疑問や不安に、丁寧かつ適切に答えたという。たとえば、

道三「この年齢になった今、道三、何が悲しくて新たな考察などに耽る必要がござろう。」

司祭「御身にとり、今ほどそれが大切な時はない。御身はもはや、人生の終りに達しておられるからだ。」

道三「私にはもう、遠い所にあるあなた方の教会まで説教を聞きに行くだけの体力がない。」

司祭「もし御身が、教会へお出かけになることが出来ないなら、我らの方から喜んで御身の許へ伺うであらうし、もし必要とあらば、我らのうち誰かが御身の家に同居して説教いたすであらう。」

結果的には、自宅から半里へたった都の教会へ再三出向いていき、説教を聞き、導きを受け、ついに、オルガンティノから洗礼を受けた。霊名は、フィゲイレドと同じ「ベルシヨール」。

小牧・長久手の戦いで伊勢方面に出陣していた高山右近にも、この朗報が伝えられ、更に力を得て、友人である大名たちにキリストを伝えたことも記されている。道三の入信の経緯の中には道三がキリスタンになったことは1万人

の信者を得たより大きな力であり、時の天下をとっていた羽柴秀吉がキリシタンとなったより影響力が大きかったと述べられている（1585年（天正13年）8月発のルイス・フロイスの書簡）。800名の門弟を擁していたとも書かれている。

日本一の名医・曲直瀬道三のキリスト教入信は、社会的に大きな反響があったはずだが、日本側の文献には、なら記録されていない。

文禄3年（1594）1月没した。死後、正二位法印を追贈された。墓は、十念寺（京都市上京区。浄土宗西山派の寺院）にある。

## （6）天正遣欧使節の少年たち

### ① 伊東マンショ（祐益）

天正遣欧使節の首席正使（大友宗麟の名代）。日向の伊東家の一族で、イエズス会に入会して司教として布教活動を行ったが、迫害にあっている。

永禄12年（1569）頃、日向国都於郡（今の宮崎県西都市）にて、伊東祐青と伊東義祐の娘との間に生まれた。

伊東氏が島津氏の攻撃を受け、伊東氏の支城の綾城が落城した際、当時8歳だったマンショは家臣の田中國廣に背負われ豊後国に落ち延びる。同地でキリスト教と出会い、その縁で司祭を志して有馬のセミナリヨに入った。

そのころ、巡察師として日本を訪れたアレッシンドロ・ヴァリニャーノは、キリシタン大名・大村純忠と知り合い、財政難に陥っていた日本の布教事業を立て直すと、次代を担う邦人司祭育成のため、キリシタン大名の名代となる使節をローマに派遣しようと考えた。そこでセミナリヨで学んでいたマンショを含む4人の少年たちに白羽の矢が立てられ、マンショは大友宗麟の名代として選ばれた（異説あり）。これはマンショが宗麟の姪（一条房基子女）の夫である伊東義益の妹の子という遠縁の關係にあつたため、本来は義益の子で宗麟と血縁關係にある伊東祐勝（Q18の1参照）が派遣される予定であつたが、当時祐勝は安土（現・近江八幡市安土町）にいて出発に間にあわず、マンショが代役となったという。

遣欧使節の旅の途中で立ち寄ったトスカーナ大公国で舞踏会に使節たちが招かれた時、マンショはトスカーナ大公妃・ピアンカと踊ったという記録もある。

天正18年（1590）、日本に戻ってきたマンショらは翌年、聚楽第で豊臣秀吉と謁見した（中巻Q15の2参照）。秀吉は彼らを気に入り、マンショには特に強く仕官を勧めたが、司祭になることを決めていたため断った。

その後、司祭になる勉強を続けるべく天草にあつた修練院に入り、コレジオに進んで勉強を続けた。文禄2年（1593）7月、他の3人と共にイエズス会に入会した。

慶長6年（1601）には神学の高等課程を学ぶため、マカオのコレジオに移った（この時点で千々石ミゲルは退会）。慶長13年（1608）、伊東マンショ、原マルティノ、中浦ジュリアンはそろって司祭に叙階された。

マンショは小倉を拠点に活動していたが、慶長16年（1611）に領主細川忠興によって追放され、中津へ移り、さらに追われて長崎へ移った。長崎のコレジオで教えていたが、慶長17年（1612）11月に病死した。

のりかず

### ② 千々石ミゲル（紀員）

天正遣欧使節の正使（有馬晴信・大村純忠の名代）。

天正遣欧使節に派遣された正使の一人として、そして4人の正使の中で唯一棄教してキリスト教から離れた事で知られている。

大村純忠の甥、大村喜前及び有馬晴信の従兄弟。肥前有馬氏当主有馬晴純の三男であり、肥前国釜蓋城城主であつた千々石直員の子として生まれる。

父は肥前有馬氏の分家を開き、千々石氏の名を用いていた。肥前有馬氏と龍造寺氏の合戦で父が死に、天正5年（1577）に釜蓋城が落城するとに乳母に抱かれ、戦火を免れたと伝えられている。

その後は有馬晴純の次男として大村氏を継承していた叔父の大村純忠の元に身を寄せていたが、天正8年（1580）にポルトガル船司令官ドン・ミゲル・ダ・ガマを代父として洗礼を受け、千々石ミゲルの洗礼名を名乗る。これを契機にして同年、有馬のセミナリヨ（イエズス会の神学校）で神学教育を受け始める。

天正10年（1582）、正使として共にヨーロッパへと渡った。東洋からの信徒として教皇グレゴリウス13世と謁見し、フェリペ2世ら世俗当主からの歓迎を受けながら見聞を広めた。

天正18年（1590）、日本に戻ってきた。翌年、聚楽第で豊臣秀吉と謁見、秀吉から仕官を勧めたが、一様に神学の道をしてそれを断った。司祭叙任を受けるべく天草にあつた修練院に入り、コレジオに進んで勉強を続け、文禄元年（1593）に他の3人と共にイエズス会に入会した。

だが千々石は次第に神学への熱意を失つてか勉強が振るわなくなり、また元より病弱であつた為に司祭教育の前提であつたマカオ留学も延期を続けるなど、次第に教会と距離を取り始めていた。欧州見聞の際にキリスト教徒による奴隷制度を目の当たりにして不快感を表明するなど、欧州滞在時点でキリスト教への疑問を感じていた様子も見られている（この点は、コラム3参照）。

慶長6年（1601）、キリスト教の棄教を宣言し、イエズス会から除名処分を受ける。棄教と同時に洗礼名を捨てて千々石清左衛門と名を改め、叔父の後を継いだ従兄弟の大村喜前が大村藩を立藩すると藩士として召し出された（600石）。

彼は棄教を検討していた大村喜前の前で公然と「日本におけるキリスト教布教は異国の侵入を目的としたものであ

る」と述べ、主君の棄教を後押ししている。また藩士としても大村領内の布教を求めたドミニコ会の提案を却下し、更に領内に「修道士はイペリア半島では尊敬されていない」と伝道を信じない様に論じたという。イエズス会の日本管区区長に推挙された原マルティノやマカオへ派遣された伊東マンショと中浦ジュリアンらが教会への忠誠を続けた中、共に欧州でキリスト教の本山を見聞きて来た千々石が反キリストに転じた事は宣教師達の威信を失わせた。

こうした出来事は後に日蓮宗への改宗を迫った加藤清正と並んで大村喜前の棄教とキリシタン弾圧の後押しとなったとする論もある。

一方、自身も喜前と（原因は定かでないが）不仲となり、藩政からは遠ざけられた。加えて本家筋として肥前有馬氏を継いでいたもう一人の従兄弟で、やはりキリシタン大名であった有馬晴信の遺臣による暗殺未遂が起きるなど親キリシタン派からも裏切り者として命を狙われた。

晩年については現在も謎に包まれているが、2003年に自らの領地であった伊木力で子息の千々石玄蕃による墓所と思われる石碑が発見されており、領内で隠棲したものと考えられる。

伊木力の伝承では大村喜前に対する恨みを弔う為、伊木力から大村藩の方を睨む様にして葬られたという。

### ③ 中浦ジュリアン

天正遣欧使節の副使。江戸幕府による禁教令後も地下活動をしていたが、捕縛されて殉教。

ローマに残っている資料によれば中浦ジュリアンの父は肥前国中浦の領主中浦甚五郎とされる。ジュリアンは司祭を志して有馬のセミナリヨに学んでいたが、当時のセミナリヨは信仰堅固である程度の家柄の子弟しか入学させなかったもので、それなりの身分の家の出身であったと考えられる。

ローマへ向かった使節たちはローマ教皇・グレゴリウス13世と謁見したが、ジュリアンだけは高熱のために公式の謁見式には臨めなかった。しかし「教皇様に会えば熱もたちどころに治る」と教皇への目通りを切望するジュリアンの願いを聞いたある貴人の計らいで、ジュリアンのみが教皇と非公式の面会を果たした。

なお、トスカーナ大公国の舞踏会の際は、初めての出来事であった余りにジュリアンは終始緊張しており、いざ自分が踊る番になった時に思わず誘った相手が老婦人だったというエピソードも残る。

天正18年（1590）、日本に戻ってきた彼らは翌年、聚楽第で豊臣秀吉と謁見した。秀吉は彼らを気に入り、仕官を勧めたが、みなそれを断った。その後、司祭になる勉強を続けるべく天草にあった修練院に入り、コレジオに進んで勉強を続けた。文禄2年（1593）、他の3人と共にイエズス会に入会した。

慶長6年（1601）には神学の高等課程を学ぶため、マカオのコレジオに移った（この時点で千々石ミゲルは退会）。慶長13年（1608）、伊東マンショ、原マルティノ、中浦ジュリアンはそろって司祭に叙階された。

司祭叙階後は博多で活動していたが、慶長18年（1613）領主黒田長政がキリシタン弾圧に乗り出したため、そこを追われ長崎に移った。翌年（1614）の江戸幕府によるキリシタン追放令の発布時は、殉教覚悟で地下に潜伏することを選んだ。ジュリアンは九州を回りながら、迫害に苦しむキリシタンたちを慰めていた。

20数年にわたって地下活動が続いていたジュリアンであったが、寛永9年（1632）ついに小倉で捕縛され、長崎へ送られた。そして翌寛永10年9月17日（1633年10月18日）、イエズス会員神父のジョアン・アダミ、アントニオ・デ・スーザ、クリストファン・フェレイラ、ドミニコ会員神父のルカス・デ・スピリト・サントと3人の修道士と共に穴吊りの刑に処せられた。穴吊りの刑では全身の血が頭にたまり、こめかみから数滴ずつ垂れていくため、すぐに死ぬずに苦しみが続くという惨刑であった。あまりの苦しみに人事不省の状態だったクリストファン・フェレイラが棄教し、ほかの人々は教えを捨てずにすべて殉教した。最初に死んだのは中浦ジュリアンで、穴吊りにされて4日目の9月20日（10月21日）であった。65歳没。「わたしはローマに赴いた中浦ジュリアン神父である」と最期に言い残したといわれている。

なお、殉教から374年が経過した2007年（平成19年）6月、ローマ教皇ベネディクト16世は、中浦ジュリアンを福者に列するのを発表し、2008年（平成20年）11月24日に長崎で他の187人と共に列福式が行われた。天正遣欧少年使節の一員で福者になるのは彼が初めてである。

### ④ 原マルティノ

天正遣欧少年使節の副使で、使節の少年4人の中では最年少であったが、語学に長け、ローマからの帰途のゴアでラテン語の演説を行い有名になる。

ローマに残された資料によると肥前国（現在の長崎県佐佐見町）出身といわれ、大村領の名士・原中務の子。両親共にキリスト教徒であり、司祭を志して、有馬のセミナリヨに入った。

マルティノは副使としてローマにいった。

天正18年（1590）、日本に戻ってきたマルティノらは翌年、聚楽第で豊臣秀吉と謁見した。秀吉は彼らを気に入って、仕官を勧めたが、みなそれを断った。その後、司祭になる勉強を続けるべく天草にあった修練院に入り、コレジオに進んで勉強を続けた。1593年7月、他の3人と共にイエズス会に入会した。

慶長6年（1601）には神学の高等課程を学ぶため、マカオのコレジオに移った（この時点で千々石ミゲルは退会）。慶長13年（1608）、伊東マンショ、原マルティノ、中浦ジュリアンはそろって司祭に叙階された。

マルティノは当時の司祭の必須教養であったラテン語にすぐれ、語学の才能があった。彼は宣教活動のかたわら、洋書の翻訳と出版活動にも携わり、信心書『イミタチオ・クリスティ』（Imitatio Christi、『キリストになろう』）の日本語訳「こんてんつすむんち」などを出版している。渉外術にすぐれ、小西行長や加藤清正とも折衝にあたり、当時の日本人司祭の中でもっとも知られた存在であった。



慶長19年(1614)、江戸幕府によるキリシタン追放令を受けて11月7日マカオにむかつて出発。マカオでも日本語書籍の印刷・出版を行い、マンショ小西やベトロ岐波らがローマを目指した際には援助した。

寛永6年(1629)に死去。遺骸は(正面のファサードのみ残る)マカオの大聖堂の地下に生涯の師アレッシンドロ・ヴァリニャーノと共に葬られた。

## はせくら (7) 支倉 常長

伊達氏の家臣。慶長遣欧使節団を率いてヨーロッパまで渡航し、ローマでは貴族に列せられた。洗礼名はドン・フィリップ・フランシスコ。

慶長14年(1609)、前フィリピン総督ドン・ロドリゴの一行がヌエバ・エスパーニャ副王領(現在のメキシコ)への帰途台風に遭い、上総国岩和田村(現在の御宿町)の海岸で座礁難破した。地元民に救助された一行に、徳川家康がウィリアム・アダムスの建造したガレオン船を贈りヌエバ・エスパーニャ副王領へ送還した。この事をきっかけに、日本とエスパーニャ(スペイン)との交流が始まった。

こうしたエスパーニャとの交流ができたことにより、常長の主君である伊達政宗はヨーロッパに遣欧使節を送ることを決定した。遣欧使節はエスパーニャ人のフランシスコ会宣教師ルイス・ソテロ(Luis Sotelo)を副使とし、常長は正使となり、180人から組織され、エスパーニャを経由してローマに赴くことになった。遣欧の目的は通商交渉とされているが、エスパーニャとの軍事同盟によって伊達政宗が倒幕を行おうとした説もある。

慶長17年(1612)、常長は第一回目の使節としてサン・セバスチャン号でソテロとともに浦賀より出航するも、暴風に遭い座礁し遭難。再度仙台へ戻り、現・石巻市雄勝町で建造したガレオン船サン・ファン・パウティスタ号で慶長18年9月15日(1613年10月28日)に月ノ浦(現・石巻市)を出帆した。出航後、北アメリカ大陸の太平洋岸にあるアカブルコ(メキシコ・グレーロ州)を経由して、大西洋を渡り、コリア・デル・リオ(スペイン・アンダルシア州セビリア県)に上陸した。慶長20年1月2日(1615年1月30日)にはエスパーニャ国王フェリペ3世に謁見している。その後、イベリア半島から陸路でローマに至り、元和元年9月12日(1615年11月3日)にはローマ教皇パウルス5世に謁見した。また、その後もマドリードに戻ってフェリペ3世との交渉を続けている。

しかし、エスパーニャやローマまで訪れた常長であったが、この時すでに日本国内ではキリスト教の弾圧が始まっており、そのこともあって通商交渉は成功することはなかった。常長は数年間のヨーロッパ滞在后、元和6年8月24日(1620年9月20日)に帰国した。

はるばるローマまで往復した常長であったが、その交渉は成功せず、そればかりか帰国時には日本ではすでに禁教令が出されていた。そして、2年後に失意のうちに死去した。享年52。

その後の支倉家は嫡男常頼が後を継いだが、寛永17年(1640年)、家臣がキリシタンであったことの責任を問われて処刑され断絶した。しかし寛文8年(1668年)、常頼の子の常信の代にて赦され家名を再興した。このあたりもききな臭いと感じるのは私だけだろうか。

常長が持ち帰った「慶長遣欧使節関係資料」は仙台市博物館に所蔵されており、平成13年(2001)に国宝に指定されている。その中には常長の肖像画があり、日本人を描いた油絵としては最古のものとされる。また、常長自身が記録した訪欧中の日記が文化9年(1812)まで残存していたが、現在は散逸しており幻の史料となっている。

## (8) 原胤信(ジョアン)

江戸時代初期の旗本。原胤義の嫡男。幼名は吉丸。洗礼名はジョアン。受領名が主水助であったために、原主水の名で知られている。

豊臣秀吉の小田原征伐の最中に祖父・胤栄が急死、父も敵軍に包囲された小田原城に籠城し、居城臼井城も落城し没落。父は千葉氏の後北条氏への加担責任を追及されて失踪する(自害したとも出奔したともいわれるが不明)。

その後、名族出身である事から徳川家康により小姓として召しだされる(千葉氏は源頼朝を助けた関東の名族)。慶長5年(1600)ごろ、キリスト教の洗礼を受け、若くして御徒組頭や鉄砲組頭に抜擢されている。

ところが、慶長17年(1612)の岡本大八事件を機に江戸幕府は本格的なキリシタン弾圧が開始し、キリスト教を信じる旗本に対しても棄教が命じられた。胤信はこれを拒んで岩槻藩に住む親族の元に出奔して現地でも秘かに布教を続けた。

しかし、慶長19年(1614)に藩主高力忠房によって捕らえられて棄教を迫られるものの、胤信はこれを拒んだため、激怒した家康の命によって額に十字の烙印を押され、手足の指全てを切断、足の筋を切られた上で元和元年(1615)に追放された。

胤信はその後も布教活動を続け、江戸・浅草のハンセン病患者の家を拠点とするが、後に密告によって捕らえられ、元和9年(1623)に宣教師ら47名とともに江戸市中引回しの上、高輪の辻の札(高札場)にて火刑に処された。死の直前に「私がここまで苦難に耐えてきたのは、キリストの真理を証明するためであり、私の切られた手足がその証である」と述べたと伝えられている。

## (9) 牧村利貞(政治)

利休七哲の一人。稲葉一鉄の孫。別名政治、政吉、高虎。通称：長兵衛。兵部大輔。

織田信長の死後、豊臣秀吉に仕えて馬廻となる。天正12年(1584)、高山右近の勧めを受けてキリシタンとなった。小牧・長久手の戦い、四国征伐、九州征伐にも参加した。天正18年(1590)、秀吉より伊勢国内において2万650石を与えられた。

文禄元年(1592)からの文禄・慶長の役にも舟奉行として参加するが、文禄2年(1593)7月10日、朝鮮において

48歳で病死した。

## （10）毛利重政

森高次の子で、毛利高政の兄。豊後速水郡の内で1万石。豊後国日出城代。

中国大返しするとき毛利氏へ人質として送り出されたのが重政、弟高政である。高政が毛利輝元に気に入られて、毛利姓を贈られたので、以後名乗るようになる。

天正15年（1587）の九州平定、文禄元年（1592）の文禄の役では舟奉行を務めた。

文禄3年（1594）、前田玄以の与力となり、豊後速水郡の内1万石の朱印を受け、日出城を預けられた。併せて同郡の蔵入地代官も兼務。旧城主の大神親長の女を後室に迎える。

キリシタンであったことから、日出の若宮八幡宮の社殿を破却せしめ、神体を海中に投じたともいう。慶長2年（1597）5月6日、日出にて死去。享年47。

日出の若宮八幡宮は、天徳3年(959)郡司・清原高秀が八津島大明神(日出町豊岡)から二神を勧請し、翌天徳4年(960)大神郷司緒方惟季が山城国の石清水八幡から勧請して社殿を現在地に建て、日出・津島・川崎三か村の産土神に奉じたのが由緒。

キリシタンであった重政は社殿をことごとく破壊し、御神体を海に捨て、境内に館を建てたという。しかし、御神体は村民たちにより秘かに引き上げられ、宗行の天満社など安全な場所で密かに奉祭され続けていた。

慶長7年(1603)、日出藩主となった木下延俊が御神体を復して神殿建立、社領寄進などおこない、復興した。

## （11）志岐鎮経（麟泉）

天草五人衆の志岐氏当主で天草の志岐城主。諱の「鎮」字と号の「麟」字は友友義鎮（宗麟）からそれぞれ一字ずつ拝領している。洗礼名ジョアン。後に棄教し、迫害側に回る。

永禄9年（1566）、イエズス会士ルイス・デ・アルメイダを招き布教を許したことは、天草にキリスト教が広まるきっかけとなった。豊臣秀吉の九州征伐では領地も安堵された。天正17年（1589）の小西行長の宇土城の城普請では命令に服さず、これに他の天草豪族も同調し行長と対立することとなる（天正天草合戦）。行長は志岐城を落とすべく三千の兵で袋浦（現在の富岡湾）へ進軍するが、麟泉は小西軍が上陸したところに夜襲をしかけてこれを破った。しかし行長は加藤清正、有馬晴信、大村喜前に助勢を依頼、これにより総勢万余を相手にすることとなり、志岐城は小西・加藤らの連合軍に打ち破られ、島津氏を頼り、出水へ逃れた。

熱心なキリシタンではなく、目的は海外貿易の利益だったようだが、鎮経の領内には良港が存在しなかったため、思ったほど利益は出ず、後に棄教して元龜2年（1571）には一転してキリシタンを迫害した。そのためフロイス『日本史』では非難されている。

## （12）税所敦朝

北郷三久家臣。薩摩の殉教者。

平佐（現在の鹿児島県薩摩川内市平佐町）領主北郷三久の家臣。通称は七右衛門。レオ税所七右衛門。薩摩国初の殉教者。

永禄12年（1569）、日向国都城生まれ。慶長元年（1596）、主君である北郷三久の転封に従って平佐へ移住。そこで、パウロ吉右衛門からキリスト教のことを聞き、京泊教会へ行き、1608年7月22日に洗礼を受けレオと名乗る。後に、次男の敦吉も受洗しミカエルと名乗る。

当時すでに、北郷氏はキリスト教を禁止していたので、三久はレオに死刑を宣告した。親戚や友人は3日間にわたり棄教を勧めたが、レオはこれを拒否し十字架にかけられることを希望した。結局、十字架ではなく、屋敷前の十字路で斬首され、遺体は京泊教会に埋葬された。翌年、薩摩に宣教師退去命令が出され教会も解体された。レオの遺骨は長崎へ移され、さらにマニラに渡ったが、慶安2年（1649）の地震により失われた。

2007年、教皇ベネディクト16世がペトロ岐部と187殉教者の列福を承認し、税所敦朝は福者となった。



## 【コラム2】大名の改易

江戸時代において、幕府は諸大名の改易をし、牢人が増えて社会不安が増大したといわれている。実際、どのような改易が行われたのかみてみよう。

改易は、律令制度では現職者の任を解き新任者を補任することを、鎌倉時代・室町時代には守護・地頭の職の変更を意味した。江戸時代においては大名・旗本などの武士から身分を剥奪し所領と城・屋敷を没収すること。除封ともいう。所領を削減されることを減封という。現代社会では「更迭」に近い処分となる。

江戸時代は160家の大名が改易された。江戸時代の藩の数が540（支藩68を含む）であったので、（大雑把にいうと）3割の大名家が処分されていることになる。この数字が多いかどうかの評価は見方によって変わるが、3家に1家は処分を受けているから決して少ない数ではなかったといえる。

まず、次の数字を見ていただきたい。

- ・関ヶ原の戦い以降、江戸時代を通じて248家が改易  
外様大名127家、親藩・譜代大名121家の計248家が改易
- ・関ヶ原の戦いの戦後処理により88の大名家が改易（5家が大幅減封）

石田三成（近江）、小西行長（肥後）、宇喜多秀家（備前岡山）、長宗我部盛親（土佐）を始め西軍についた88の大名家が改易され、毛利家（毛利輝元及び吉川広家、毛利秀元）、上杉家（上杉景勝）など5大名家が大幅な減封を受けた。

- ・江戸時代初期、外様大名82家、親藩・譜代大名49家が改易

旧豊臣系大名を中心に大名廃絶政策が取られたために、家康、秀忠、家光の三代の時代に外様大名82家、親藩・譜代大名49家が改易された。

大坂の役で豊臣家が滅ぼされて以後、武力抵抗をした大名は皆無であり、全て無抵抗で城と領地を幕府へ明渡している。戦争が無くなると、世嗣断絶と幕法違反による改易が主なものとなり、末期養子（大名が危篤になってから養子を願い出ること）が禁止されていたため、多くの大名家が世嗣断絶により改易となった。

また、福島正則は広島城無断修築を咎められた幕法違反により改易されている。大久保忠隣や本多正純のように幕府内部の権力闘争に敗れて改易された大名もいた。

幕府は改易、減封によって生じた空白地を天領（直轄地）にし、親藩・譜代大名を新たに配置して、外様大名を遠隔地に転封するなどして幕府権力の絶対優位を確立していった。

しかし、改易によって大量の浪人が生じて社会不安につながり、浪人による反乱未遂事件（慶安の変）が起きた。このため幕府は政策を見直し、4代家綱の時代に末期養子の禁は緩和された。

5代綱吉の時代には廃絶政策は譜代大名に向けられ27家が改易された。これ以後は幕藩体制が確立して改易、転封は減少して大名は固定化されるようになり、幕末に至った。

【表①】江戸時代以降の改易大名一覧

本書で取り扱った大名。

No.	大名	没収領地・禄高	年代	改易理由	動向・その後
001	小早川 秀秋	備前岡山藩51万石	1602年	無嗣断絶	
002	武田 信吉	常陸水戸藩15万石	1603年	無嗣断絶	遺領は異母弟の徳川頼将が相続
003	堀 鶴千代	越後臈王堂藩4万石	1606年	無嗣断絶	遺領は後見人堀直寄に還付
004	松平 忠吉	尾張清洲藩52万石	1607年	無嗣断絶	遺領は異母弟の徳川義利が相続。後に藩庁を名古屋に移転
005	天野 康景	駿河興国寺藩1万石	1607年	殺人犯引渡し拒否・出奔	子天野康宗が旗本として存続
006	稲葉 通孝	豊後国内1.4万石	1607年	無嗣断絶	遺領は兄稲葉典通に還付。子稲葉通照が旗本として存続
007	津田 信成	山城御牧藩1.3万石	1607年	乱暴狼藉	
008	稲葉 通重	美濃清水藩1.2万石	1607年	乱暴狼藉	常陸筑波に流罪
009	筒井 定次	伊賀上野藩20万石	1608年	諸説あり（悪政、酒浸り、訴訟等）	大坂の役で自害
010	前田 茂勝	丹波八上藩5万石	1608年	発狂	堀尾忠晴に預け。弟前田正勝が旗本として存続
011	桑山 清晴	和泉谷川藩1万石	1609年	勘気を被る	領地は父桑山元晴に還付
012	小笠原 吉次	常陸笠間藩3万石	1609年	私曲連座	武蔵に隠棲
013	中村 一忠	伯耆米子藩17.5万石	1609年	無嗣断絶	
014	木下 勝俊	備中足守藩2.5万石	1609年	遺領の独占	京都東山に隠棲
015	松平 忠頼	遠江浜松藩5万石	1609年	殺害	1622年、子の松平忠重が大名復帰
016	水野 忠胤	三河水野藩1万石	1609年	松平忠頼殺害事件など	
017	皆川 広照	信濃飯山藩1万石	1609年	讒言	後に赦免、府中藩主
018	堀 忠俊	越後高田藩30万石	1610年	御家騒動	鳥居忠政に預け
019	金森 長光	美濃上有知藩2万石	1611年	無嗣断絶	
020	平岩 親吉	尾張犬山藩12万3千石	1611年	無嗣断絶	
021	有馬 晴信	肥前日野江藩4万石	1612年	岡本大八事件	切腹（もしくは家臣が処刑）
022	松平 忠清	三河吉田藩3万石	1612年	無嗣断絶	弟松平清昌が旗本として存続
023	山口 重政	常陸牛久藩1.5万石	1613年	嫡男・重信の無断婚姻	大坂の役の戦功で牛久藩に再封
024	大久保 忠佐	駿河沼津藩2万石	1613年	無嗣断絶	
025	里見 義高	上野板鼻藩1万石	1613年	大久保長安事件に連座（表向きは勤務怠慢）	
026	富田 信高	伊予宇和島藩12万石	1613年	坂崎直盛との争い	鳥居忠政に預け。次男の系統が後に旗本
027	石川 康長	信濃松本藩8万石	1613年	大久保長安事件に連座（表向きは領	毛利高政に預け

				地隠匿)	
028	高橋 元種	日向延岡藩5万石	1613年	富田信高に連座	立花宗茂に預け
029	石川 康勝	信濃奥仁科藩1.5万石	1613年	石川康長に連座	大坂夏の陣で戦死
030	大久保 忠隣	相模小田原藩6.5万石	1614年	諸説あり（大久保長安事件、讒言）	井伊直孝に預け
031	佐野 信吉	下野佐野藩3.9万石	1614年	富田信高に連座	小笠原秀政に預け。子佐野久綱・佐野公當が旗本として存続
032	里見 忠義	安房館山藩12.2万石	1614年	大久保忠隣に連座	倉吉藩に流罪
033	豊臣 秀頼	摂津大坂藩65.7万石	1615年	大坂の陣の敗戦	自害
034	古田 重然	不明1万石	1615年	大坂の陣での豊臣方加担	切腹
035	福島 高晴	大和宇陀松山藩3.1万石	1615年	大坂の陣での豊臣方密通	伊勢山田に蟄居
036	織田 信重	伊勢林藩1万石	1615年	所領相続における争論	
037	松平 忠輝	越後高田藩60万石	1616年	大坂の陣での遅参、旗本殺害、参内の懈怠	伊勢に流罪
038	藤田 信吉	下野西方藩1.5万石	1616年	無嗣断絶	
039	坂崎 直盛	石見津和野藩4万石	1616年	反逆	自害（家臣に殺されたとも）
040	村上 忠勝	越後村上藩9万石	1618年	家中騒動	松平康重に預け
041	関 一政	伯耆黒坂藩5万石	1618年	家中騒動	養子関氏盛が旗本として存続
042	福島 正則	安芸広島藩49.8万石	1619年	城の無断修理	高井野藩へ減転封
043	伊奈 忠勝	武蔵小室藩1.3万石	1619年	無嗣断絶	弟伊奈忠隆が旗本として存続
044	田中 忠政	筑後柳河藩32.5万石	1620年	無嗣断絶	兄田中吉興が2万石で再封
045	織田 長益	大和国内1万石	1621年	死去により収公	
046	最上 義俊	出羽山形藩57万石	1622年	御家騒動	大森藩へ減転封
047	本多正純	下野宇都宮藩15.5万石	1622年	不忠。宇都宮城釣天井事件。	佐竹義宣に預け。孫本多正之が旗本として存続
048	成田 氏宗	下野烏山藩3.7万石	1622年	無嗣断絶	
049	西尾 嘉教	美濃揖斐藩2.5万石	1623年	無嗣断絶	
050	内藤 清政	安房勝山藩3万石	1623年	無嗣断絶	1626年甥の内藤正勝が2万石で再封
051	田中 吉官	近江国内等2万石	1623年	家臣に連座	旗本
052	本多 紀貞	上野白井藩1万石	1623年	無嗣断絶	
053	福島 正則	信濃高井野藩2万石	1624年	幕府の検使到着前の火葬	子福島正利が旗本として存続
054	青山 忠俊	上総大多喜藩2万石	1625年	勘気を被る	蟄居。子の青山宗俊が1648年に大名復帰
055	根津 信直	上野豊岡藩1万石	1626年	無嗣断絶	
056	徳永 昌重	美濃高須藩5万石	1628年	大坂城石垣普請の遅延	1648年、子の徳永昌勝が赦免され旗本
057	別所 吉治	但馬八木藩2万石	1628年	仮病による参勤交代の懈怠	子の別所守治が赦免され旗本
058	桑山 貞晴	大和御所藩2.6万石	1629年	無嗣断絶	弟の桑山宗晴が名跡を継ぎ、旗本。
059	酒井 直次	出羽左沢藩1.2万石	1630年	無嗣断絶	

060	織田 長則	美濃野村藩1万石	1631年	無嗣断絶	
061	池田 政綱	播磨赤穂藩3.5万石	1631年	無嗣断絶	弟池田輝興が再封
062	三浦 重勝	下総三浦藩1万石	1631年	無嗣断絶	
063	脇坂 安信	美濃脇坂藩1万石	1632年	刃傷事件	
064	奥平 忠隆	美濃加納藩10万石	1632年	無嗣断絶	
065	加藤 忠広	肥後熊本藩51万石	1632年	諸説あり（座興、 法度違反など）	出羽丸岡藩に減転封
066	徳川 忠長	駿河府中藩50万石	1632年	不行跡	自害
067	朝倉 宣正	遠江掛川藩2.6万石	1632年	徳川忠長に連座	松平忠明に預け
068	鳥居 忠房	甲斐谷村藩3.5万石	1632年	徳川忠長に連座	鳥居忠恒に預け。
069	酒井 重澄	下総生夷藩2.5万石	1633年	勤務怠慢	水野勝成に預け（後に 自害）子酒井重知が旗 本として存続
070	堀尾 忠晴	出雲松江藩24万石	1633年	無嗣断絶	
071	竹中 重義	豊後府内藩2万石	1634年	密貿易等の不正	切腹
072	蒲生 忠知	伊予松山藩24万石	1634年	無嗣断絶	
073	鳥居 忠恒	出羽山形藩24万石	1636年	無嗣断絶	弟鳥居忠春が高遠藩3 万石
074	本多 政武	大和高取藩3万石	1637年	無嗣断絶	
075	松倉 勝家	肥前島原藩4万石	1638年	島原の乱による斬 首	
076	佐久間 安次	信濃飯山藩3万石	1638年	無嗣断絶	
077	成瀬 之虎	下総栗原藩1.6万石	1638年	無嗣断絶	
078	本多 大千代	下野榎本藩2.8万石	1640年	無嗣断絶	
079	生駒 高俊	讃岐高松藩17.3万 石	1640年	御家騒動	堪忍料矢島藩1万石
080	池田 長常	備中松山藩6.5万石	1641年	無嗣断絶	弟池田長信が旗本とし て存続
081	那須 資重	下野那須藩1.7万石	1642年	無嗣断絶	父那須資景が旗本とし て存続
082	堀 直定	越後村上藩10万石	1642年	無嗣断絶	
083	加藤 明成	陸奥会津藩40万石	1643年	御家騒動	堪忍料吉永藩1万石
084	加藤 明利	陸奥二本松藩3万 石	1643年	加藤明成に連座、 不審な死去	子加藤明勝が旗本とし て存続
085	松下 長綱	陸奥三春藩3万石	1644年	乱心	山内忠義に預け、子松 下長光が旗本として存 続
086	松平 清道	播磨姫路新田藩3 万石	1644年	無嗣断絶	
087	池田 輝興	播磨赤穂藩3.5万石	1645年	乱心	池田光政に預け
088	皆川 成郷	常陸府中藩1.3万石	1645年	無嗣断絶	
089	真田 信重	信濃埴科藩1.7万石	1647年	無嗣断絶	父真田信之に所領還付
090	松平 憲良	信濃小諸藩5万石	1647年	無嗣断絶	弟松平康尚が長島藩立 藩
091	菅沼 定昭	丹波亀山藩3.8万石	1647年	無嗣断絶	弟菅沼定実・菅沼定貴 が旗本として存続
092	寺沢 堅高	肥前唐津藩8.3万石	1647年	自害	

093	古田 重恒	石見浜田藩5.4万石	1648年	無嗣断絶	
094	稲葉 紀通	丹波福知山藩4.5万石	1648年	乱心、自害	
095	織田 信勝	丹波柏原藩3.6万石	1650年	無嗣断絶	叔父織田信当が旗本として存続
096	本多 勝行	大和国内4万石	1650年	無嗣断絶	父本多政勝に所領還付
097	松平 定政	三河刈谷藩2万石	1651年	幕閣の批判	松平定行に預け。子松平定知らが旗本として存続
098	平岡 頼資	美濃徳野藩1万石	1653年	家督継承問題	子平岡頼重が旗本として存続
099	加藤 忠広	出羽丸岡藩1万石	1653年	無嗣断絶	
100	杉原 重玄	但馬豊岡藩1万石	1653年	無嗣断絶	大叔父杉原義正が旗本として存続
101	片桐 為次	大和竜田藩1万石	1655年	無嗣断絶	弟片桐且昭が旗本となるが後に断絶
102	日根野 吉明	豊後府内藩2万石	1656年	無嗣断絶	
103	山崎 治頼	讃岐丸亀藩5万石	1657年	無嗣断絶	叔父山崎豊治が旗本として存続。幕末成羽藩を立藩
104	北条 氏重	遠江掛川藩3万石	1658年	無嗣断絶	義兄北条繁広が旗本として存続
105	堀田 正信	下総佐倉藩11万石	1660年	無断滞城	
106	松平 重利	下野皆川藩1.5万石	1665年	無嗣断絶	
107	一柳 直興	伊予西条藩2.5万石	1665年	勤務怠慢、失政など	前田綱紀に預け
108	京極 高国	丹後宮津藩7.8万石	1666年	親子不和、失政	南部重信に預け
109	水野 元知	上野安中藩2万石	1667年	乱心	水野忠職に預け。子水野元朝が旗本として存続
110	高力 隆長	肥前島原藩4万石	1668年	失政	伊達綱村に預け。子高力忠弘が旗本として存続
111	酒井 忠解	出羽大山藩1万石	1668年	無嗣断絶	
112	池田 邦照	播磨新宮藩1万石	1670年	無嗣断絶	弟池田重教が旗本として存続
113	伊達 宗勝	陸奥一関藩3万石	1671年	御家騒動（伊達騒動）	土佐に流罪
114	池田 恒行	播磨山崎藩3万石	1678年	無嗣断絶	
115	土屋 直樹	上総久留里藩2万石	1679年	乱心	子土屋達直が旗本として存続
116	戸川 安風	備中庭瀬藩2万石	1679年	無嗣断絶	弟戸川達富が旗本として存続
117	堀 通周	常陸玉取藩1.2万石	1679年	乱心	弟堀利雄が旗本として存続
118	内藤 忠勝	志摩鳥羽藩3.5万石	1680年	刃傷事件	切腹
119	永井 尚長	丹後宮津藩7.3万石	1680年	殺害、無嗣断絶	弟永井直円が大和新生藩立藩
120	加賀爪 直清	武蔵高坂藩1.3万石	1681年	領土問題	石川総良に預け
121	松平 光長	越後高田藩26万石	1681年	御家騒動（越後騒動）	松平定直に預け。養子松平長矩が津山藩立藩
122	真田 信利	上野沼田藩3万石	1681年	勤務怠慢	奥平昌章に預け。子真田信首が旗本となるが断絶
123	酒井 忠能	駿河田中藩4万石	1681年	在国中の逼塞	井伊直興に預け。後に赦免され旗本
124	本多 利長	遠江横須賀藩5万石	1682年	不行跡、失政	村山藩に減転封



125	桑山 一尹	大和新庄藩1.1万石	1682年	不敬	桑山一慶・桑山一英に預け
126	徳川 徳松	上野館林藩25万石	1683年	無嗣廃絶	
127	土方 雄隆	陸奥窪田藩1.8万石	1684年	御家騒動	榊原政邦に預け。弟土方雄賀が旗本として存続
128	有馬 豊祐	筑後松崎藩1万石	1684年	土方雄隆に連座	有馬頼元に預け。所領は久留米藩に還付
129	稲葉 正休	美濃青野藩1.2万石	1684年	刃傷、殺害	
130	松平 重治	上総佐貫藩1.5万石	1684年	不正	保科正容に預け。子松平勝秀が旗本として存続
131	松平 綱昌	越前福井藩47.5万石	1686年	乱心	江戸鳥越に蟄居
132	溝口 政親	越後沢海藩1万石	1687年	乱心	加藤明英に預け
133	那須 資徳	下野烏山藩2万石	1687年	家督相続問題	津軽信政に預け（後に旗本）
134	佐久間 勝親	信濃長沼藩1万石	1688年	不敬（詐病で側小姓出仕を拒否）	丹羽長次に預け
135	喜多見 重政	武蔵喜多見藩2万石	1689年	勤務怠慢（喜多見重治に連座とも）	松平定重に預け
136	山内 豊明	土佐中村藩3万石	1689年	不敬	青山忠重に預け
137	本多 政利	陸奥大久保藩1万石	1693年	失政	酒井忠真・水野忠之に預け
138	水谷 勝美	備中松山藩5万石	1693年	無嗣断絶	弟水谷勝時が旗本として存続
139	本多 重益	越前九岡藩4.3万石	1695年	家臣団の争論	池田仲澄に預け。後に旗本
140	小出 重興	和泉陶器藩1万石	1696年	無嗣断絶	叔父小出有仍が旗本として存続
141	小出 英及	但馬出石藩5万石	1696年	無嗣断絶	
142	森 衆利	美作津山藩18.6万石	1697年	発狂	森長直に預け。父森長継が赤穂藩2万石で再封
143	水野 勝岑	備後福山藩10.1万石	1698年	無嗣断絶	傍系で高祖父のひ孫水野勝長が名跡を継ぎ、減転封し存続
144	伊丹 勝守	甲斐徳美藩1.2万石	1698年	自害	
145	伊達 村和	陸奥中津山藩3万石	1699年	旗本との喧嘩	伊達綱村に預け
146	浅野 長矩	播磨赤穂藩5.3万石	1701年	刃傷事件（元禄赤穂事件）	切腹。弟浅野長広が旗本として存続
147	松平 忠充	伊勢長島藩1万石	1702年	乱心	子松平康郷が旗本として存続
148	前田 利昌	加賀大聖寺新田藩1万石	1709年	刃傷事件	切腹。遺領は大聖寺藩に還付
149	松平 宗胡	越前高森藩5万石	1711年	無嗣断絶	
150	屋代 忠位	安房北条藩1万石	1712年	失政（万石騒動）	旗本
151	毛利 元次	周防徳山藩4.5万石	1715年	宗家との争論	戸次正庸に預け。1719年、子毛利元堯が再封
152	小笠原 長崙	豊前中津藩4万石	1716年	無嗣断絶	弟小笠原長興が安志藩立藩
153	浅野 長経	安芸三次藩5万石	1719年	無嗣断絶	遺領は広島藩に還付
154	黒田 長清	筑前直方藩4万石	1720年	無嗣断絶	遺領は福岡藩に還付
155	浅野 長亮	安芸三次藩5万石	1720年	無嗣断絶	遺領は広島藩に還付
156	本多 忠烈	大和郡山藩5万石	1723年	無嗣断絶	
157	水野 忠恒	信濃松本藩7万石	1725年	刃傷事件	秋元喬房・水野忠毅に預け。叔父水野忠毅が旗本、1765年大浜藩立藩
158	京極 高寛	但馬豊岡藩3.5万石	1726年	無嗣断絶	弟京極高永が1.5万石で再封

159	松平 義真	陸奥梁川藩3万石	1729年	無嗣断絶	本家尾張藩の松平通春に再封、通春の尾張藩相続で廃藩
160	植村 恒朝	上総勝浦藩1万石	1751年	虚偽報告	植村家道に預け。養子植村寿朝が旗本として存続
161	金森 頼錦	美濃八幡藩3.8万石	1758年	藩内の騒動（郡上一揆）	南部利雄に預け。子金森頼興が旗本として存続
162	本多 忠央	遠江相良藩1万石	1758年	金森頼錦に連座	松平長孝に預け
163	小堀 政方	近江小室藩1万石	1788年	不正	大久保忠頼に預け。甥小堀政優が旗本として存続
164	酒井 忠全	播磨姫路新田藩1万石	1817年	無嗣断絶	
165	松平 頼徳	常陸穴戸藩1万石	1864年	天狗党の乱の責任	切腹。明治になり父松平頼位が再封
166	林 忠崇	上総請西藩1万石	1868年	新政府への反逆	江戸唐津藩邸に幽閉

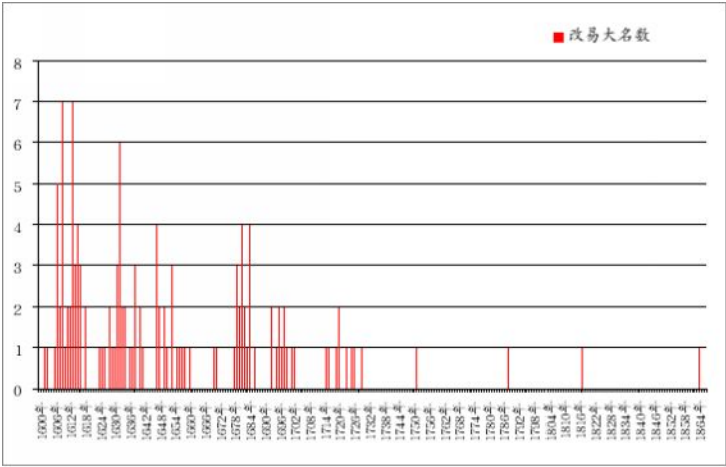
上表のうち、キリシタン大名（一時的に入信した者を含む）やキリシタンの理解者は9名ほど。  
 なお、上記の改易理由には表向きの理由も混在していて、真の背景についてまでは追究していない。本書の目的ではないため、ご理解いただきたい。

【表②】改易大名一覧（時期別サマリー）

時期	改易大名数（家）	割合	1年あたり（家）	備考
1600～1615	36	22%	2.3	大坂の陣までの時期（家康は1616年逝去）
1616～1623	16	10%	2.0	秀忠治世の時期
1624～1651	45	27%	1.6	家光治世の時期
1652～1680	22	13%	0.8	家綱治世の時期
1681～1709	29	17%	1.0	綱吉治世の時期
1710～	18	11%	0.1	家宣治世以降
合計	166	100%	0.6	

江戸時代初期の改易頻度が高かったことが理解できる。

【表③】改易大名数（年別）



【表④】改易理由

改易理由	大名数（家）	割合
無嗣断絶	67	40.4%
御家騒動	13	7.8%
連座	11	6.6%
乱心	11	6.6%
任務懈怠	8	4.8%
失政	7	4.2%
刃傷事件	6	3.6%
無断での処置	4	2.4%
不敬	4	2.4%
諸説あり	3	1.8%
不正	3	1.8%
勘気を被る	2	1.2%
他家との争い	2	1.2%
殺害	2	1.2%
自害	2	1.2%
大久保長安事件	2	1.2%
豊臣方加担	2	1.2%
不行跡	2	1.2%
乱暴狼藉	2	1.2%
その他（注）	13	7.8%
合計	166	100.0%

上記は、表①の改易理由をサマリーしたもの。

トップは無嗣断絶で4割を占めている。無嗣断絶とは、当主の跡継ぎは事前に幕府に届け出て許可を得る必要があるが、それが何らかの理由でないまま、当主が死去したケース（当主の急な逝去（暗殺？事故？））、子がおらず養子もいない、嗣子を正式決定していないなど）。のちに、幕府は末期養子の禁を緩和する。

なお、上記は表向きの理由も混在していて、真の背景についてまでは追究していない点、ご留意いただきたい。

（注）その他の中には、幕閣批判、収賄事件、殺害事件、旗本との喧嘩、領土問題、殺人犯引渡し拒否、出奔などがある。

### 【コラム3】キリスト教布教の光と影、むしろ影の部分は？

キリスト教布教は隠れ蓑で、ポルトガルやスペインは征服や奴隷貿易による利益獲得を目論んでいたともいわれる。その説の内容は何なのか。

は！？いきなり何ですか？と思われた方も多いと思う。キリシタンを題材に選んでおいて・・・最後にこれですか・・・

私はキリスト教徒ではないし、擁護者でもない。歴史の事実にできるだけ近づきたいと思っているだけだ。

先の大戦に対するスタンスを例にとると、愛国教育で戦争を“賛美”して負の側面から目を背けるわけでもなく、しかし、原爆や特攻の“悲劇”ばかり強調して戦争遂行の責任は国民一人ひとりにあったことから目を背けるわけでもない。なぜ戦争になったのか、アメリカとの太平洋や中国利権争いに負けた、しかし、日本の降伏を機にアジア諸国がヨーロッパ列強からの独立を果たした、と事実を色づけせずに淡々と見る。すぐに感情論に走ってはいけない。二度と戦争の惨禍を起こさないと誓うなら、そうならないように冷徹に事実を学ばないといけない。国際政治や外交の失敗はどこにあったのか、戦争以外の手段はなかったのか、などを考えていくしかないと思う。

それと同じように、キリスト教の問題も、可哀想に禁教令が出されて迫害され、天草島原の乱で多くが殺されて可哀想だとか、隠れキリシタンたちが可哀想だとか、そういう感情論で止まってしまつては何も見えてこない。なぜ為政者たちがキリスト教を危険視したのか、その点を見ていきたいと思う。



## 1・キリシタン宣教師の野望

天正遣欧使節団の一人千々石ミゲルは後に棄教しているが、彼は、キリスト教布教自体は隠れ蓑であって、世界征服の野望があることを述べている。

また、日本をカトリック化して明国征服の前線基地としようという野望があったのであって、秀吉が無謀だと語られることが多いシナ征服計画も、宣教師の野望の先手を打つての行動だったとも言われている。

たとえば、ポルトガルは1513年にマカオに初渡来し、明王朝との交易を開始し、その後、1557年に明から居留権を得ていた（領有権は明にあり、明がマカオに税関を設置するなど主権を有していた）。なお、この前後にフランシスコ・ザビエルが、ポルトガル政府の支援の下、マカオを拠点に東南アジア各地でキリスト教の布教活動を行っていた。この頃のマカオは、日本が鎖国するまでは長崎との貿易で繁栄を極めた。日本よりも中国との貿易利権は非常にうまみの大きいものであった。また、ちょうどこの頃、イエズス会の宣教師マテオ・リッチが明国での布教を行っており、明の万暦帝の宮廷に出入りすることに成功している。

## 2・“日本人”を奴隷に売却、しかも、50万人(！？)

### (1) 秀吉が伴天連追放令を出した経緯―奴隷貿易

豊臣秀吉が宣教師追放令を出した理由については、天の巻(上巻)Q5の4で述べた。

西国の大名たちが、軍資金や軍需物資を獲得するため領国内にポルトガル船の入港を望み、宣教師たちの布教を許可したことが大きな要因であった。肥前の大村純忠はキリシタンに理解を示すことで、当時、平戸でトラブルを起こしていたポルトガル船を自国内の横瀬浦に寄港させようと考え、永禄6年(1563)に受洗して初のキリシタン大名となり(洗礼名バルトロメウ)、長崎をイエズス会に寄進した。このあと、九州では天正6年(1578)に大友宗麟(フランシスコ)、天正8年(1580)有馬晴信(プロタジオ)が受洗した。

そして、キリシタン大名が日本人女性の大規模な奴隷輸出に関与していたことを、九州平定の折に秀吉が目当りにして、危惧したことが一つの理由だといわれている。

当時の世界では、ヨーロッパ人たちが奴隷貿易を盛んにやって利益を得ていた。アフリカからカリブ諸島、北米大陸への奴隷貿易は大規模で、ヨーロッパはその貿易で繁栄を築いた。

当時ヨーロッパ諸国が、左手に聖書、右手に銃を隠しもって、全世界で猛威を振るい、さらにヴァチカンはその宗教的権威により奴隷貿易にお墨付きを与えていたのは歴史的事実であった。

キリシタン大名は高山右近らに代表されるように、一般の日本人より高い倫理観や道徳を持っていたようなイメージをお持ちの方も多いと思うが、一部のキリシタン大名は、日本人女性の奴隷輸出ということを平然とやっていたのだ。

秀吉はこのような奴隷貿易に激怒したのである。

九州平定戦で九州に上陸して、秀吉のキリシタンへの態度が急変するにはそれなりの理由があったのである。

それ以前まで、高山右近の領内で仏僧からの訴えがあっても秀吉はまったく感知しなかったのであるが(フロイス「日本史」)、それに比べると九州の状況は看過できないほどに深刻なものであった。

#### ■施薬院全宗の讒言

そうしたなかで秀吉の側近中の側近であった侍医の施薬院全宗は、キリシタン大名による領内あげての奴隷取引や宣教活動の拡大に対して相当な危機感をもってキリシタン対策を度々秀吉に進言していた。この辺りの事情は「九州御動座記」に詳しく記されている。

「今度伴天連(宣教師)等能き時分と思ひ候らひて、種々様々の(たから)物を山と積(つみ)、・・・(中略)・・・伴天連どもは、諸宗を我邪宗に引き入れ、そのみならず日本人を数百、男女によらず異舟へ買いとり、手足に鉄の鎖をつけ、舟底へ追い入れ、地獄の荷責にもすぐれ、そのうえ牛馬を買いとり、生きながら皮をはぎ、坊主も弟子も手すらこれを食べ、親子兄弟も礼儀なく、ただ今生より畜生道の有様、目前のうちにあい聞こえ候。見るを見まねにその近所の日本人、いずれもその姿を学び、子を売り妻女を売り候由、つくづく聞きし召し及ばれ、右の一宗、もし御許容あらばたちまち日本は外道の法になるべきこと、案のうちなるべく候。しからば仏法も王法もあい捨てるべきことを歎き思しめされ、かたじけなくも大慈大悲の思慮をめぐらされて候で、すべて伴天連の坊主本朝追い払いの由仰せいだされ候」(傍線引用者)

#### ■秀吉のイエズス会への質問状

さらに秀吉はイエズス会に対してこんな質問状を叩きつけていた。

「何故ポルトガル人はこんなにも熱心にキリスト教の布教に躍起になり、そして日本人を買って奴隷として船に連行するのか」

「ポルトガル人が多数の日本人を奴隷として購入し、彼らの国に連行しているが、これは許しがたい行為である。従って伴天連はインドその他の遠隔地に売られて行ったすべての日本人を日本に連れ戻せ」

秀吉はポルトガル人が関与した奴隷取引について、事前に調べ上げていたのである。

「九州に来る西洋の商人たちが日本人を多く購入し連行していることをよく知っている。いままで誘拐して売り飛ばした日本人を返せ。それが無理なら、ポルトガル船に買われて、日本にいる監禁されている日本人だけでも解放しろ。そんなに金が欲しいなら、代金はあとで渡す。」

#### ■イエズス会側の開き直り

これに司教コエリユが、平然と答えて言う。

「日本人売買の禁止はかねてからのイエズス会の方針である。自分たちの罪ではなく、問題なのは、外国船を迎える港の領主など売る日本人がいるからであり、厳しく日本人の売買を禁止しない日本側に責任がある。彼らも厳罰にしてくれたれば問題は解決する」(傍線引用者)

#### ■秀吉、激怒

これに秀吉は激怒した。天正15年(1587)6月18日、秀吉は次のような朱印状を出した。

「伴天連門徒之儀ハ、其者之可為心次第事」

キリシタンになるかどうかは、その者の心次第である、キリシタンになることは何ら強制されるものではないという意味である。これは当時のキリシタン大名の多くが、自国の領民に対して強制的に改宗を迫ることが多かったので、それを止めさせるために出されたものである。

また、ポルトガル商人による日本人奴隷の売買を厳しく禁じた。

「大唐、南蛮、高麗え日本仁（日本人）を売遣候事曲事（くせごと＝犯罪）。付（つけたり）、日本におゐて人之売買停止之事。右之条々、堅く停止せられおはんぬ、若違犯之族之あらば、忽厳科に処せらるべき者也。」（伊勢神宮文庫所蔵「御朱印師職古格」）

検地・刀狩政策を徹底しようとする秀吉にとり、農村秩序の破壊は何よりの脅威であったことがその背景にあるといわれる。

秀吉は明国征服を掲げて朝鮮征討を強行した際には、多くの朝鮮人を日本人が連れ帰り、ポルトガル商人に転売して大きな利益をあげる者もあったといわれている。奴隷貿易がいかにも利益の大きな商業活動であったか、このエピソードからも十分に推察ができるだろう。

徳富蘇峰の『近世日本国民史』（初版）に、秀吉の朝鮮出兵従軍記者の見聞録が載っている。そこには、『キリシタン大名、小名、豪族たちが、火薬がほしいばかりに女たちを南蛮船に運び、獣のごとく縛って船内に押し込むゆえに、女たちが泣き叫び、わめくさま地獄のごとし』と。

ユダヤ人でマラーノ(改宗ユダヤ人)のアルメイダは、日本に火薬を売り込み、交換に日本女性を奴隷船に連れこんで海外で売りさばいたボスの中のボスであった。

#### ■伴天連追放令後のイエズス会の態度

コエリョはただちに、有馬晴信のもとに走り、キリシタン大名たちを結集して秀吉に敵対するよう働きかけた。そして自分は金と武器弾薬を提供すると約束し、軍需品を準備した。しかし、この企ては有馬晴信が応じずに実現されなかった。

コエリョは次の策として、2～3百人のスペイン兵の派兵があれば、要塞を築いて、秀吉の武力から教界を守れるとフィリピンに要請したが、その能力がないと断られた。

コエリョの集めた武器弾薬は秘密裏に売却され、これらの企ては秀吉に知られずに済んだ。

秀吉の朝鮮出兵の動機については諸説あるが、最近では、スペインやポルトガルのシナ征服への対抗策であったという説が出されている。スペインがメキシコやフィリピンのように明を征服したら、その武力と大陸の経済力が結びついて、次は元寇の時を上回る強力な大艦隊で日本を侵略してくるだろう。

そこで、はじめはコエリョの提案のように、スペインに船を出させ、共同で明を征服して機先を制しようと考えた。

しかし、コエリョが逆に秀吉を恫喝するような態度に出たので、独力で大陸征服に乗り出した。その際、シナ海を一気に渡る大船がないので、朝鮮半島経由で行かざるをえなかった。

文禄3年(1593)、朝鮮出兵中の秀吉は、マニラ総督府あてに手紙を送り、日本軍が「シナに至ればルソンはすぐ近く予の指下にある」と脅している。

慶長2年(1597)、秀吉は追放令に従わずに京都で布教活動を行っていた。フランシスコ会の宣教師と日本人信徒26名をわざわざ長崎に連れて行って処刑した。これはキリシタン勢力に対するデモンストレーションであった。一方、イエズス会とマニラ総督府も、すかさずこの26人を聖人にする、という対抗手段をとった。丁々発止の外交戦である。

## （２）天正遣欧使節の文書

キリシタン大名の太田、大村、有馬の甥たちが、天正少年使節団として、ローマ法王のもとにいったが、その報告書を見ると、

『行く先々で日本女性がどこまでいっても沢山目につく。ヨーロッパ各地で50万という。肌白くみめよき日本の娘たちが秘所まるだしにつながれ、もてあそばれ、奴隷らの国にまで転売されていくのを正視できない。鉄の枷をはめられ、同国人をかかるといって遠い地に売り払う徒への憤りも、もともとなれど、白人文明でありながら、何故同じ人間を奴隷にいたす。ポルトガル人の教会や師父が硝石(火薬の原料)と交換し、インドやアフリカまで売っている』

と書かれており、多くの“日本人”が世界に売りさばかれていた様子がわかる。日本人を奴隷として輸出する動きは、ポルトガル人がはじめて種子島に漂着した1540年代の終わり頃から早くもはじまったと考えられている。16世紀の後半には、ポルトガル本国や南米アルゼンチンにまでも日本人は送られるようになった。50万人も当時九州に若い女性がいたのかどうか分からないし、仮に50万人いたとしても、それらがほとんど連行されたわけではないので、おおげさな数字だとはいえ、行く先々で目についたというのは確かだろう。天正遣欧使節団としてローマに赴いた少年のうち、千々石ミゲルはのちに棄教するが、その一因となったのも、ヨーロッパで見た日本人奴隷の姿だったと言われている。

「我が旅行の先々で、売られて奴隷の境涯に落ちた日本人を親しく見たときには、こんな安い値で小家畜か駄獣かのように（同胞の日本人を）手放す我が民族への激しい念に燃え立たざるを得なかった。」「全くだ。実際、我が民族中のあれほど多数の男女やら童男・童女が、世界中のあれほど様々な地域へあんなに安い値でさらっていったり売られ、はじめに賤業に就くのを見て、憐憫の情を催さない者があろうか。」

といったやりとりが、使節団の会話録に残されている。

### （３）その他の文書

また、東南アジアでの日本人奴隷の需要は旺盛であり、文書も残っている。

「今までに行われた売却は、日本司教の書面による同意を得て行われた。・・・（中略）・・・彼ら（日本人）は非常に好戦的な国民で、戦争のためや、攻囲にあるいは必要に際して奉仕をする。少し前に、オランダ人たちのためにその必要が生じた際に見られた通りである。ゴア市から1人の妻帯者が、鉄砲と槍を持ったこれら従者7、8人を従えて出征した。というのはインディアにおいては、兵役を果たすことの出来る奴隷は日本人奴隷だけだからである。ゴアの如き大都市では、その城壁の守りのために必要な兵士に不足することがしばしばあるのだ。」（1605年、ポルトガル公文書148・「大航海時代の日本」高瀬弘一郎訳註）

とあり、日本人奴隷が戦闘のために重宝されていた様子が伺える。

このように、日本人が奴隷として売り飛ばされ、その売買にポルトガルが囁んでいたことは言い逃れのできない事実であったようである。



### 3・布教の費用

日本への伝道するための布教事業に必要な物的財源をいかにして調達するかの問題が、常に伝動者の面前に横たわっていた。調達するには、時に宣教師たちが説くところと矛盾するような行動をもあてなければならぬ場合もあった。伝道者自身の生活と彼等が組織する教会の維持、拡張、これには土木、建築、生活、施与、救済等々あらゆる部門にわたって出費が予想される。

#### (1) 宣教師たちの暮らしぶり

パードレやイルマン等の生活は、大体当時の庶民の生活そのままとされるほど、極めて質素だったらしい。パードレの書簡によれば、「冬は寒気甚だしいのに食糧が少なく、冷たい水を飲むために病人が甚だ多かった」「芋及び大根の夕食を供し、所有の藁を少し焚き大いなる友愛と歓喜とをもってわれらを接待」「当地の貯蔵室にあつて珍しいものは、大根の葉を吊るして乾かしたものと、ファサス及びかぼちゃの葉を日干しにしたもの。これらは一般庶民の主要食物であつた」また「当地において米と水とによつて得る精力は、ゴアにおいてさらに栄養のある食物によつて得たものよりも多い」「われらのごとく金銭の少ないものは」「油は日本において甚だ高く」というように貧乏暮らしをかこつてゐる記述が随所にみられる。ヨーロッパ人宣教師たちからしたら、地球の裏側くらい場所までやってくるだけでも大変なのに、さらに、貧乏暮らしをしなければならなかったのである。

このあたりの清貧な生活ぶりが腐敗していた仏僧たちと好対照を成し、そういう身ぎれいな人たちが説く教えであれば、間違いないだろうと思つた人たちもいたことが想像される。

#### (2) 教団の収入

これに対して、キリシタン大名たちや庶民たちの喜捨をした記録に枚挙にいとまがない。それほど、喜捨してもらつてうれしいということなのか、あるいは単に事実を克明に記録しただけなのか。

上記の喜捨はいわば臨時収入だった。では、イエズス会の定期的収入はどれくらいあつたのだろうか。吉田小五郎『キリシタン大名』では、ポルトガル王からマラッカ渡し500デユカット、コレジョとセミナリオを創設するためと称して1,000デユカットを増加し、ポルトガルがスペインに接収された年にフェリペ2世はさらに1,000デユカットを増加した。また、一時ローマ教皇から4,000デユカットの年金があつた時期もあつた。つまり、最大7,500デユカットの収入しかなかったということである。

また、大村純忠からの長崎・茂木(300クルザド)、有馬鎮純からの浦上(500クルザド)の税収も、秀吉の同地没収で無くなつてしまつた。

さらに、ヨーロッパからの送金も航海の安全性が乏しかつたこともあり、慶長以降、途絶えたこともあつた。ポルトガル王からの年金はポルトガル領マカオを通じて支払われていたが、支払時点で割引が行われていた。

#### (3) 費用面

一方で、パードレ2名、日本人イルマン2名、2～3名の青年が、大根の葉、祭日に塩イワシ少々を食して年間の経費が450クルザドを要する(1566年、ルイスフロイス、堺発信の書簡)ということ、慢性的に財政難であつたことは他の宣教師の書簡でも記録されている。クルザドもデユカットも同じものだと考えてよいようだから、7,500の収入だとせいぜいパードレ33名、日本人イルマン33名、青年33～50名ほどが何とか食いつないでいける程度だ。

しかし、教団の規模は以下のような形で推移している。

#### 宣教師(パードレ、イルマン)合算

1581年(天正9年) 59人

1588年(天正16年) 124人

1593年(文禄2年) 162人

1600年(慶長5年) 109人

1605年(慶長10年) 121人

1612年(慶長17年) 122人

1588年にはすでに足が出てしまつている。

この財政難を救つたのが、ルイス・デ・アルメイダであつた。彼はポルトガルのリスボン生まれで、インド、シナ、日本等の貿易に従事していたが、1555年に発心して豊後国府内でイエズス会に入会した。彼が全財産4,000デユカットを寄付した。その資本を元手に、シナから日本に運ぶ生糸を買い取り、1,600デユカットの利益を生んだ。宣教師が貿易に関与することについて、インド副王の許可を得て、ローマ教皇もしぶしぶ認可した。これは寛永9年(1632)まで続けられた。

また、慶長以後、送金が途絶え気味になつたとき、ある篤志家がインド国内において土地を購入して、そこからの収入を日本の伝道費にあてることができるようになったこともあつたという(パードレとイルマン120人、セミナリオの生徒と伝道師合わせて260人の費用を辛うじてまかなうことができる)。

ただ、これらは安定的にはいつてくるわけではなく、航海の安全性が乏しいことなどにより、減つてしまつたり無くなつてしまつた年もあつた。特に、慶長年間以降は減り方がひどかつたらしい。

ということで慢性的な財政難をどうやって補つていたのか・・・奴隷貿易や武器・火薬の転売などで利益をあげていたのでは?と疑念が生じてしまうのは私だけだろうか。

#### 4・国家の独立を守る戦い

秀吉が宣教師の追放を宣言したのは、我が国の思想的侵略行為の危険性を感じ取ったことはすでに述べた。

秀吉の死後、家康は当初キリスト教政策を穏当にしていた。家康がキリスト教びいきだったのではなく、幕府の権力基盤が確固としたものになるまで、時を待っていた感がある。

家康が何よりも恐れていたのは、秀吉の遺児秀頼が大のキリシタンびいきで（天草四郎は秀頼だったという説もある）、大坂城に籠城して、スペインの支援を受けて幕府軍と戦うという事態であった。当時の大坂城内には、宣教師がいたという。大坂攻めに先立って、家康はキリシタン禁令を出し、キリシタン大名の中心人物の高山右近をフィリピンに追放している。

家康の死後、1624年には江戸幕府はスペイン人の渡航を禁じ、さらに1637～38年のキリシタン勢力による島原の乱をようやく平定した翌39年に、ポルトガル人の渡航を禁じた。これは鎖国と言うより、朝鮮やオランダとの通商はその後も続けられたので、正確にはキリシタン勢力との絶縁と言うべきである。この場合、キリシタン勢力とは日本を植民地化しようと狙ったポルトガル・スペインのことである。

キリシタン宣教師達にとっては、学校や病院、孤児院を立てることと、日本やシナを軍事征服し、神社仏閣を破壊して唯一絶対のキリスト教を広めることは、ともに「人類の救済者」としての疑いのない「善行」であった。そのようなものが宗教だったのだ。

その独善性を見破った秀吉や家康の反キリシタン政策は、いわば国家の独立を守る戦いだった。これが成功したからこそ、我が国はメキシコやフィリピンのように、スペインの植民地とならずに済んだのである。キリスト教の宣教師や天草四郎たちが“可哀想”とか、悲劇だったとか言うのは、誰かがある意図をもってキリスト教のシンバを増やそうしてばらまいたものである可能性を、われわれ日本人は肝に銘じる必要がある（もちろん、現代のキリスト教にはそのようなものではなく、信教の自由が保証されているから、問題ないが。そういう歴史があったことは心にとどめる必要があろう）。

## 5・天草・島原の乱

### (1) 悲劇というイメージ

また、この反乱についても一般に伝えられているイメージと実態との乖離があるようだ。

一揆勢は現在の絵や小説やドラマに描かれているようなムシロ旗に竹槍の武装などしてない。鎧を着て、最新鋭の鉄砲で武装した組織的武士団だった。戦前までは、この事実はよく知られていたらしい。そのため、古い物語などに出てくる天草四郎は魔回転生に出てくるような化け物として描かれていたという。しかし、戦後は一転して日本人がキリスト教徒を迫害したのだと教科書で教育してしまった（キリスト教＝アメリカであり、親アメリカの思想を植え付けるため、アメリカが仕組んだ教育だったと思う）。そして、ムシロ旗に竹槍の武装で、鉄砲や戦艦の艦砲射撃まで繰り出した幕府軍に殲滅されたとか、天草四郎というあどけない少年が無残に殺されたとか、悲劇のような認識が生まれてきてしまった。

しかし、実際には天草四郎の背後には、キリスト教団がいた。また、金銀などの資源がない九州において、奴隷狩りが有力な資金源であったと思われる。

また、一揆勢が強かったのは、神のために戦って死ぬことで天国へ行けるとダマして戦わせていたからだ。このあたりは一向一揆と同じで、南無阿弥陀仏と言いながら死んだら極楽だとダマしていた。

四郎は「それぞれの持ち場をぬかりなく持ち固めよ。そうすれば天国へいけるであろう、しかしそれを怠れば地獄へ堕ちるであろう」と籠城の一揆勢に督戦した。戦って死ぬことで天国へ行ける、という支配者や指揮官側に都合がよいことを言いふらしていたという。

一揆軍の計画では、島原城を落とし、富岡城（天草郡苓北町）を陥落させ、長崎を占領したあと、西日本の諸侯から全国のキリシタンに呼びかけ、幕府を倒し、キリシタンの国家を築く・・・というものだったともいわれている。

## （２）天草四郎の正体

一揆の首領、天草四郎ってどんな人だったんだろう？

彼は元和7年（1621）、小西行長の遺臣・益田甚兵衛の子として、母の実家のある現在の熊本県上天草市大矢野島

ますだしろうときさだ

で生まれたと伝えられている。本名は益田四郎 時貞 と言い、洗礼名はジェロニモ。奇跡を起こしたとかで、キリストの再来かと信仰を集め、一揆の棟梁として担がれたといわれている。

しかし、彼は実在しなかった可能性がある。奴隸商人・大名・地方豪族の統治集団がシンボルとしてでっちあげた架空の人物とも考えられる。

なぜなら、絵や賛歌・銅像・エピソードはいくらでもあるが、その出生・生い立ちの話があまり具体的ではないからだ。当時の人口は今の10分の1程度で、武士階級だと数はそこからもっと少ないはず。そんな少数派の中で、身元不詳の指揮官などいるだろうか。

また、彼が起こした奇跡とは・・・「ある日、天から舞い降りた鳩が四郎の手のひらで卵を産み落とした。その卵を割ると中から聖書の一節が出てきた」と、ある。四郎は習わぬのに文字を読み、キリシタンの講釈を行い、また海上を歩いて見せたという。そして、次のような檄文が流布されていた。「キリシタンになり申さぬ者は、日本国中の者ども、デウス様（神）より左の御足にてインヘルノ（地獄）へ、御踏みこみなされ候間、その心得あるべく候。」

押し寄せた一揆勢は、城下町で放火・略奪を行い、逃げ遅れた女性を拉致した。城下の寺院、神社を焼き払い、住持の首を切り、指物にして、城の大手口に押し寄せた。キリシタンにならないものは誅伐して宗門を守るつもりであるとも言ったという。

### （３）天草をスペイン艦隊の基地に

全国統一をほぼ完成した秀吉との対立が決定的になると、キリシタン勢力の中では、布教を成功させるためには軍事力に頼るべきだという意見が強く訴えられるようになった。1590年から1605年頃まで、15年間も日本にいたペドロ・デ・ラ・クルスは、1599年2月25日付けで次のような手紙を、イエズス会総会長に出している。

要点のみを記すと、「日本人は海軍力が弱く、兵器が不足している。そこでもしも国王陛下が決意されるなら、わが軍は大挙してこの国を襲うことが出来よう。この地は島国なので、主としてその内の一島、即ち下（九州）又は四国を包囲することは容易であろう。そして敵対する者に対して海上を制して行動の自由を奪い、さらに塩田その他日本人の生存を不可能にするようなものを奪うことも出来るであろう。・・・

このような軍隊を送る以前に、誰かキリスト教の領主と協定を結び、その領海内の港を艦隊の基地に使用出来るようにする。このためには、天草島、即ち志岐が非常に適している。なぜならその島は小さく、軽快な船でそこを取り囲んで守るのが容易であり、また艦隊の航海にとって格好な位置にある。・・・

（日本国内に防備を固めたスペイン人の都市を建設することの利点について）日本人は教俗（教会と政治と）共にキリスト教的な統治を経験することになる。・・・多くの日本の貴人はスペイン人と生活を共にし、子弟をスペイン人の間で育てることになるだろう。・・・

スペイン人はその征服事業、殊に機会あり次第敢行すべきシナ征服のために、非常にそれに向けた兵隊を安価に日本から調達することが出来る。」

本国からは拒否されているが、そんな発想をしている者がいたこと自体、推して知るべしというところだろう。隙あらば侵略しようと考えていたのだろう。

キリシタン勢力が武力をもって、アジアの港を手に入れ、そこを拠点にして、通商と布教、そしてさらなる征服を進める、というのは、すでにポルトガルがゴア、マラッカ、マカオで進めてきた常套手段であった。また大村純忠は軍資金調達のために、長崎の領地をイエズス会に寄進しており、ここにスペインの艦隊が入るだけでクルスの計画は実現する。

つまり、キリスト教布教を名目にしたポルトガルの日本侵略の意図があったことがわかる（本国やローマ教皇庁の承認は得られなかったが）。



#### （４）アジア貿易のうまみ

もちろん純粋にキリスト教を布教したいという信仰熱だけをもっていった宣教師もいたと思うし、宣教師自体も世俗の勢力から利用されていた面はあるが、布教も金持ちの道楽ではなく、一個の事業であった。

単に純粋な布教活動であれば、船の建造費用・乗組員の給料・その他経費等がかかるだけで、事業としては赤字。某国の捕鯨反対を叫んで我が国の調査捕鯨船に体当たりし売名行為をしているような団体は、さも慈善団体かのようにみせかけて、単に寄付を集めてそのお金から“活動費”を天引きして、楽しく暮らそうなんていることが裏にあるが、イエズス会はどうかだったのか。どうして危険を冒して地球の裏側まで来たのか。

ずばり、儲かるからに他なりません。シナは古代ローマ帝国の時代からヨーロッパと交易があり、一大経済圏。マルコ・ポーロの東方見聞録によると、インドのはるか東方に黄金の国ジバングがあるらしい。インドや東南アジア、シナ。これらは香辛料などの“儲かる物産”がある。シルクロードはこの時代には海路が中心となり、海のシルクロードと呼ばれている。危険を冒してアジアに行き、うまくやれば元手の資金を何倍、何十倍にも増やすチャンスがあった。よし、行ってみよう！ってなわけで、大航海時代が始まったのである（大雑把に言うと）。

西回りでインドに向けて出発したアメリゴ・ベスプッチ（アメリカの語源です）やコロンブスは意図せずアメリカ大陸に遭遇します。このあと、スペインやポルトガルによって、侵略されインカ帝国やマヤ帝国は滅ぼされてしまいます。

一方、東回りでインドを経て、シナ南部に到達したポルトガル人は、苦難の末、日本に到達しました。当時日本は金・銀を相当産出し、特に銀はシナで貨幣となって流通していました。戦国時代の混乱に乗じて大軍を差し向けられたとしたら、もしかしたら、ポルトガルの植民地にされる地域が出てきたかも知れません。しかし、わが祖先はその隙を与えませんでした。そのことについて、まず祖先に感謝しなければならないと思います。

ポルトガルは侵略ではなく、貿易と布教を選択しました。布教によって“日本人”を感化し、その後、シナ侵略の前線基地にしようと考えたわけです。ヨーロッパで宗教戦争が起き、カトリック（旧教）がフロンティアを求めて海外に飛び出したのは、単に布教をして信者を増やして終わりではなく、そのことによる経済的効用にも着目していなかったとしたら、あのように命がけにならないのではないかと。

前に見た通り、布教事業は慢性的に赤字だったので、利益をあげねばならなかった。信者たちの寄付にいつまでも頼っているわけにはいきませんでした。そこで、前に述べたアルメイダをはじめとする商人たちは、日本の大名に鉄砲・大砲・火薬を売り込み、代償に非キリシタンの若い娘をさらって奴隷として売り飛ばして暴利を得ていたとするのが自然です。

## 6・キリシタンの残虐行為

すでにご存じの方も多いと思うが、清貧・純潔・品行方正なキリスト教、というのは全くの妄想であり、欲溢れる人間である以上、我々と何ら変わらない。欲が深い人間をコントロールして秩序を保つために、宗教があるのではないかと思えるほどだ。

キリシタンたちが過去どのようなことをしてきたのか、その中には次のような残虐な行為があった。

イスラム勢力が8世紀ごろに勃興し、11世紀ごろに聖地エルサレムがイスラム勢力に奪われる。そのため、キリスト教勢力から聖地奪回の熱情が湧き上がってきた。その中でエルサレムを占領した十字軍は、イスラム教徒やユダヤ人たちに対して殺戮を行っているといわれている。

また、少年十字軍も熱心な民間人の遠征隊の一つで、北フランスの少年エティエンヌが「神の手紙」を神から手渡され聖地回復をするようお告げがあったと説いて回り、それに感化された少年少女らが集まり結成された。最終的には数千人から2万前後の少年少女が集まったといわれている。

マルセイユへと出発した彼らだったが、聖地へ向かうための船がなかったのは勿論のこと、満足な遠征費すら持ち合わせていなかった為、大抵極めて酷い食糧事情だった。無償で船を提供すると接近してきた商人の支援により聖地へ向かったものの、7隻の船のうち、2隻の船がサルディニア島付近で難破、無事だった船もアレクサンドリアで奴隷商人の手に渡ってしまうという悲劇的な結末となった。

ドイツでも、狂信的な青年ニコラスに煽られた少年達が同様の悲劇に巻き込まれている。ニコラスはイタリアを目指し、アルプス山脈を越えてローマにたどり着いたが、教皇の説得によって故郷へと引き返した。結局、彼を含め故郷に戻れた仲間ほんのわずかであったという。

少年十字軍の名で知られているが、現在の主流の解釈では、大人の庶民も多く含んだ民衆十字軍だと考えられている。少年が神の啓示を受けて呼びかけたことと、後世の記録者が感動的な話にするために、主に少年・少女で構成された十字軍という話にしたとされる。

十字軍は「異教徒を大勢殺すほど、神の御心になう」と信じていたという。現代の取り澄ましたキリスト教のイメージとは大違いだ。

これ以外にもヨーロッパでは幾多の宗教戦争を経て、信教の自由と政教分離といった近代的概念が成立していくこととなる。

## 7・まとめ

以上のようにみえてくると、日本史の教科書や書籍に書かれていることよりも、もっとおどろおどろしい背景があったことが理解できよう。

キリスト教以外はダメだと信じて、異教徒は殺してもよいとか、改宗させて利用しようとか、そのような腹黒い意図を持った勢力があり、そんな者たちによって、多くの悲劇が生み出されたのだ。そこには、キリスト教の愛などというものは存在しない。キリスト教の教義自体にはそれなりにいいところもあると思うが、それを利用しようとする者たちの手で悲劇が作られたのである。その悲劇の教訓から、近代になって政教分離が確立されたのであった。

我が国においても戦国時代に宗教対立により幾多の血が流されてきた。それを踏まえて、官兵衛が目指したものが、政教分離や信教の自由が保証された世界だったというのは、合理的なことだったと頷ける。

(終)

## 終わりに

この巻では、官兵衛のキリシタンとして人生から一步ひいて、他のキリシタン大名の活動やキリスト教団の活動などをみてきた。長らくお読みいただき、本当に感謝している！

キリシタン武将にもさまざまな結末があったことがご理解いただけたと思う。そのうち、信仰が領内の混乱をもたして家が滅亡したり、追放されたり、殺害されたりしている者もいる中で、官兵衛はうまく振舞ったと思う。

現代の我々にとって、一つ肝に銘ずべきことは、どの宗教を信じるかで命の危険にさらされていた戦国時代の悲劇のうえに、われわれは信教の自由を勝ち取ることができたことと、戦国時代の祖先が、しっかりしてくれていたおかげで他国の侵略を受けずに済んだということである。

戦国時代の人々の命がけの信仰をとにかくいうことはできないが、ただ、キリシタン側に“悲劇のヒロイン”を演じられても困るので、キリシタン布教の裏の意図など別の側面をみる必要があるだろう。上巻からお読みいただいた読者の方は、著者の私がキリシタンなのか、キリシタンを賛美しているのか、と思われた方もいたかも知れない。私は特定の宗教に肩入れするつもりは毛頭なく、ただ、キリシタン寄りだとの誤解を与えてしまったなら、申し訳ない。下巻の最後で、その誤解は解けたことを期待している。

天の巻シリーズでは、官兵衛がキリシタンだったことを中心テーマに据えた。官兵衛の人生は最終的にキリシタンとして幕を閉じたのであるから、それだけで十分とも思える。しかし、今回はキリシタンとしてスポットを当てたところ以外には触れていない。彼にはいろんな側面があるから、別の側面から見ることもできる。また、もう少しいろんなテーマに沿った本があってもいいと思う。官兵衛の本はたくさん出版されているが、どれも同じような印象を受ける。官兵衛の人生をまんべんなく綴った本、軍師としての側面を強調した本や、情報収集能力にクローズアップした本、ナンバー２としての側面を強調した本が一部にみられる。ただ、残念ながら官兵衛の研究はあまり進んでいない。学者が書いた本もそのようなレベルであって、まだまだこれからという感じなのである（一部の学者は他の学者の本を丸写ししてしまっているような悲しい現状がある。研究している分野ではないから、丸写しするしかないのだろうが、そのような企画の本が“研究者が書いた本”として流布されているのが実情だ）。

初心者の方が読んで、すんなり理解できるような本で、なおかつ、もっと知りたい方にもご満足いただける本を、今後、私自身も出版していきたいと思う。

# 巻末史料

■キリシタン関連年表

西暦	和暦	キリスト教関連の出来事
1543	天文12	ポルトガル人乗船のシナ・ジャンク船、種子島に漂着し、鉄砲伝来。
1544	天文13	海賊許棟、日本に渡航。
1549	天文18	イエズス会宣教師ザビエル・トレス・フェルナンデス、鹿児島に到着、ベルナルド達に洗礼を授ける。
1551	天文20	ザビエル京都に上る。 11月豊後府内よりインドに帰還し大友義鎮使臣を伴う。
1552	天文21	ザビエル、ゴアに到着、5月中国渡航のためゴアを出発し、12月上川島で病死。 イエズス会のガーゴ神父府内到着。
1555	天文24 弘治元	ポルトガル商人アルメイダ、府内に育児院開設。
1556	弘治2	イエズス会インド副管区長ヌーネス・バレット、視察のためガスバル・ヴィレラ神父を伴い府内に到着。同年末府内に病院が建つ。
1557	弘治3	ポルトガル人、明政府よりマカオ居住を許される。 日本人最初の修道者ヨーロッパに初めて渡ったベルナルドが死去。
1559	永祿2	ヴィレラ、京都で宣教開始。
1560	永祿3	將軍足利義輝、ヴィレラに布教許可状交付。
1563	永祿6	肥前の領主大村純忠、大和沢城主高山図書ザリオ（飛騨守）キリスト教に改宗。 純忠イエズス会に横瀬浦を譲渡するが、焼き討ちされる。
1564	永祿7	高山右近、キリスト教に改宗。
1565	永祿8	將軍義輝暗殺される。勅命「大うすはらい」によりヴィレラ、フロイス神父ら京都から追放される。
1570	永祿13 元亀元	イエズス会上長カブラルとオルガンティーノ来日、前上長トレス死去。長崎開港。
1571	元亀2	大村純忠、長崎新町六町の地割を行う、ポルトガル船、長崎に初めて入港。
1572	元亀3	信長、カブラル神父を岐阜城で引見。
1576	天正4	京都に南蛮寺建立。信長、安土城を築城開始（完成は1579）。
1577	天正5	後通訳・日本語研究などに貢献した、ジョアン・ロドロイグス・ツツ（ツーズ） 16歳で来日。
1579	天正7	イエズス会東インド管区巡察師ヴァリニャーノ来日。
1580	天正8	ヴァリニャーノが有馬と安土でセミナリオ、府内でコレジオを開校し、70人前後がヨーロッパ風の教育を始める。
1581	天正9	信長、本能寺でヴァリニャーノを引見。
1582	天正10	2月天正少年使節、（伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアン、ロヨラ、ドラード）ヴァリニャーノ、メスキタ共に長崎を発つ。 6月本能寺の変で信長死去。
1583	天正11	秀吉、大坂城を築き、イエズス会に教会用地を与えた。 ペトロ・ゴメスは準管区長任命（1600年まで）。
1585	天正13	グレゴリオ13世、天正遣欧使節を引見して後程なく死去、シスト5世新教皇に就く。
1586	天正14	秀吉、大阪城で準管区長コエリョを引見。
		天正少年使節、メスキタと共にリスボンよりゴアに到着。

1587	天正15	大友義鎮・大村純忠死去。 秀吉、禁教令を出す（1587年7月24日）。高山右近改易
1588	天正16	教皇勅令により、日本に司教座を設置。細川ガラシャ夫人受洗。
1589	天正17	秀吉、耶穌教を厳禁し、宣教師を長崎に追放、京都南蛮寺を焼く。
1590	天正18	ヴァリニャーノ、メスキタ、天正少年使節と共に長崎に到着。 ロヨラ、ドロード持ち帰った印刷機でサンデ編『日本使節対話録』マカオで刊行。
1591	天正19	秀吉、ポルトガル印度総督に耶穌教の禁止を伝え、貿易を求める。 秀吉、フィリピンに入貢を要求。 マヌエル・バレットが「バレット写本」を著す。活版印刷機によりキリシタン版が始まる。 アレッサンドロ・ヴァリニャーノ神父、遣欧使節一行と聚楽第で秀吉に謁見し、印度総督の書簡を渡す。
1592	文禄元	フィリピン総督使節フアン・コーボ、肥前名護屋城で秀吉に謁見。
1593	文禄2	秀吉、名護屋城でフィリピン総督使節ベドロ・パウティスタを引見。 高麗戦争に出た兵士の司牧にゼスペダスとハンカン派遣。
1594	文禄3	この頃よりイエズス会と他会派の対立表面化する。
1596	慶長元	府内司教ベトロ・マルティンス、来日し伏見城で秀吉に謁す。 スペインの帆船サン・フェリペ号、土佐浦戸沖に漂着する。領主長曾我部元親乗客、乗員を抑留し、積荷を押収する。 マルチネス司教、長崎にイエズス会士を会議のために招集し、その席上、フランシスコ会士の国外退去を求める方針を決定。
1597	慶長2	サン・フェリーペ号についての交渉が難航し、キリシタン26名、長崎で処刑される（26聖人殉教）。日本でキリスト教の信仰を理由に最高権力者の指令による処刑が行われたのはこれが初めて。 オランダ船初めて平戸港に入港。
1598	慶長3	府内司教マルティンス、マラッカ近くで病没。秀吉、伏見城で死去、日本司教ルイス・デ・セルケイラ、日本の巡察師に任命されたヴァリニャーノと共に長崎に到着。
1599	慶長4	フランシスコ会士ヘロニモ・デ・ヘスース、徳川家康の許可を得て江戸に教会を建てる。
1600	慶長5	関ヶ原の戦い。細川ガラシャの死。 オランダ船リーフデ号豊後に漂着。イギリス人、ウィリアム・アダムス来日。
1601	慶長6	イエズス会宣教師マテオ・リッチ、北京に至る。
1603	慶長8	江戸幕府開かれる。八代で南・竹田家のキリシタン殉教（2008年列福）。 マニラ総督派遣のディエゴ・デ・ベルメオ神父、ルイス・ソテロ神父らフランシスコ会士来日。
1604	慶長9	幕府、系割符法を制定し、生糸貿易を統制する。 家康、伏見城でドミニコ会上長メーナを引見。
1605	慶長10	クレメンテ8世教皇に続いて、レオ11世（25日間で死去）、パウロ5世は任命される。ハビアンは『妙貞問答』を著し、仏教用語を用いて要理書を試みる。 長崎が幕府の直轄地（天領）となる。
1606	慶長11	家康、伏見城で日本司教ドン・ルイス・セルケイラ師を引見。
1607	慶長12	イエズス会準管区長バシオ、駿府に家康を、江戸に將軍秀忠を、大坂で秀頼訪問。 黒田直之、秋月に教会堂建設。
1608	慶長13	有馬晴信派遣朱印船関係者ら、マカオで市民と衝突し53人殺害される。
1609	慶長14	オランダ船、平戸に入港し、幕府の許可を得て商館を開設。
1610	慶長15	ポルトガル船ノツサ・セニョーラ・ダ・グラサ号、有馬晴信軍の攻撃を受け長崎沖で自爆（岡本大八事件）。 ドン・ロドリゴ、三浦按針（ウィリアム・アダムス）建造船でメキシコに帰還。
1612	慶長17	岡本大八事件が発覚し、幕府、江戸・駿府・京都の直轄地と有馬領に禁教令



1612	慶長17	を施行。
1613	慶長18	江戸のキリシタン8名処刑される、伊達政宗、支倉常長とフランシスコ会士ソテロをスペインとローマ教皇庁に遣わす。 キリシタン総奉行大久保忠隣上洛。平戸にイギリス商館設置。
1614	慶長19	幕府、全国に禁教令を布告し宣教師および高山右近らを国外に追放、長崎市内にある11教会被壊される。 大坂冬の陣始まる。ニアバラ・ルイスら難破。 10月 都の大殉教（四条河原でキリシタン52人が火刑）博多で最初の宗門改めが行われる。天草上津浦に残っていた最後の宣教師ママコス（マルコス・フェラロ）追放の時『未鑑』（未来書）を遺す。
1615	慶長20 元和元	高山右近、マニラで病死。 支倉常長、マドリードでキリスト教に改宗し、ローマで教皇バウロ5世に謁す。 ベトロ岐部マニラに渡航。
1616	元和2	家康死去、幕府、外国船の入港を長崎・平戸の2港に制限し、キリスト教を厳禁。 支倉常長一行、ローマを発ち帰路に着く。
1617	元和3	9月 長崎の大殉教（元和の大殉教）（カルロ・スピノラ神父ら55名、長崎西坂で殉教）。
1620	元和6	教皇バウロ5世、重ねて大赦令を発し、日本キリシタン宛書状を送る。
1622	元和8	イグナチオ、ザビエル列聖される。 スピノラ、木村セバ스티アン、木村レオナルドら殉教（元和大殉教）。
1623	元和9	ベトロ岐部、リスボンからゴアに向かう、オランダ、アンボynaでイギリス人・日本人らを虐殺。12月 江戸の大殉教。
1624	元和10 寛永元	仙台、出羽秋田でディエゴ・カルヴァーリョらとキリシタン41名処刑、大村でソテロら4名処刑。
1626	寛永3	長崎の住民、キリスト教の信仰を禁じられる。
1627	寛永4	二十六聖人のうち、23名列福される。
1628	寛永5	踏絵制度開始。（1858年まで）
1629	寛永6	二十六聖人のうち、イエズス会の3名（バウロ三木、ヨハネ五島、ヤコブ喜斎）列福される。
1630	寛永7	ベトロ岐部、松田ミゲルら、ルバン島を出航し帰国。
1632	寛永9	7月31日、ニコラオ福永ケイアン、長崎、西坂で殉教（享年63歳）。 10月21日、ジュリアン中浦、西坂で殉教（享年64歳）。
1634	寛永11	長崎の商人、幕命により出島を築く。
1636	寛永13	幕府、ポルトガル人と日本人との混血児287名をマカオに追放（カスタ流し）。 ディオゴ結城了雪殉教。
1637	寛永14	島原の乱発生（1638まで）。
1639	寛永16	7月?日、ベトロ岐部、江戸で殉教（享年52歳）。 幕府、ポルトガル人の日本渡航を禁止（鎖国の完成）。
1640	寛永17	幕府、マカオ使節61名を西坂で処刑しポルトガル船を焼く、大目付井上政重、宗門改役に就く。
1642	寛永19	イエズス会日本巡察師ルビノ一行、下甕島に渡航し捕えられてのち処刑される。
1643	寛永20	管区長マルケスの一行、上陸し捕え、ディエゴ・モラレスら殉教。
1644	寛永21	ポルトガル国王ジョアン四世、マカオ・長崎間貿易再開のため特使シケイラを日本に派遣。日本残留最後の神父、小西マンショ殉教。
1647	正保4	ポルトガル国王使節シケイラ、長崎に来航、幕府、ポルトガルとの通交を許さず同使節を帰国させる。

■キリシタン大名等の改宗年表

洗礼年 (西暦)	和暦	名前	洗礼名	領地
1563	永禄6	大村 純忠	バルトロメウ	大村
1563	永禄6	高山 飛騨守	ダリオ	高槻
1563	永禄6	高山 右近	ジュスト	高槻、明石
1564	永禄7	池田 教正	シメオン	八尾（河内）
1564	永禄7	小西 立佐	ジョアチン	室津
1564	永禄7	小西 行長	アゴスティニョ	宇土（肥後）
1568	永禄11	志岐 麟宗	ジョアン	志岐（天草）
1568	永禄11	内藤 飛騨守思俊	ジョアン	丹後、亀山
1570	永禄13 元亀元	大村 喜前	サンチョ	大村
1576	天正4	一条 兼定	パウロ	土佐
1578	天正6	大友 義鎮（宗麟）	フランシスコ	豊後
1580	天正8	有馬 晴信	プロタシオ・ジョアン	有馬
1580	天正8	京極 高吉		近江
1580	天正8	京極 室マリア		（近江）
1582	天正10	伊東 祐勝	ジェロニモ	日向
1582	天正10	伊東 義賢	バルトロメオ	日向
1582	天正10	伊東 祐兵		日向
1584	天正12	（森）毛利 高政		佐伯
1584	天正12	牧村 利貞 （長兵衛）		岩手（伊勢）
1584	天正12	黒田 孝高 （官兵衛）	シメオン	中津
1585	天正13	蒲生 氏郷	レオ	宮券、松坂、会津若松
1585	天正13	志賀 親次	パウロ	岡城
1586	天正14	有馬 直純	ミゲル	有馬
1586	天正14	毛利 秀包	シモン	久留米
1586	天正14	黒田 直之	ミゲル	秋月
1586	天正14	織田 秀信	ベトロ	美濃、揖斐郡
1586	天正14	熊谷 元直	メルキオル	三人城（安芸）
1587	天正15	細川 玉子	ガラシャ	
1587	天正15	黒田 長政	ダミアン	福岡
1587	天正15	大友 義統	コンスタンチノ	豊後
1590	天正18	宗 義智	ダリオ	対馬
1592	文禄元	筒井 定次		伊賀上野
1595	文禄3	細川 興元		常陸、谷田部
1595	文禄3	筑紫 広門		山下城、筑後
1595	文禄3	宇喜多 左京亮 （坂崎直盛）	パウロ	津和野
1595	文禄3	前田 秀以	パウロ	丹後亀山

1595	文禄3	前田 茂勝	コンスタンチノ	亀山
1595	文禄3	織田 秀信	ベトロ	岐阜
1595	文禄3	織田 秀則	パウロ	
1595	文禄3	松浦 隆信		平戸
1596	慶長元	明石 掃部	ジョアン	岡山
1596	慶長元	津軽 信枚	ジョアン	津軽弘前
1596	慶長元	寺沢 広高	アゴスティニョ	唐津
1596	慶長元	蜂須家 家政		徳島
1596	慶長元	京極 高知	ジョアン	宮津
1602	慶長7	京極 高次		小浜
1604	慶長9	宇喜多 秀家室 （豪姫）	マリア	岡山
1607	慶長12	津軽 信建		津軽

## 参考文献

「日本切支丹宗門史」レオン・パジェス

「日本史」ルイス・フロイス

「キリシタン大」シュタイチェン

「小西行長伝」木村紀八郎 島影社刊 2005年

「キリシタン大名の妻たち」新人物往来社 1991年

★☆☆★☆☆☆☆★☆☆★☆☆★☆☆★☆☆★☆☆★

キリシタン武将 黒田官兵衛

ー「軍師」官兵衛の実像 天の巻（下巻）ー

（Ver 1.0.）

著者：西山隆則

編者：黒田官兵衛生きるヒントラボ）

発行日：2014年2月14日 ヴァレンタイン・デ〜kiss

当コンテンツは著作権保護の対象です。

★☆☆★☆☆☆☆★☆☆★☆☆★☆☆★☆☆★☆☆★

#### 【著者略歴】

福岡市生まれ。歴史研究家。

普段は企業経営や投資アドバイス業務、広告ビジネスを営む。

戦国～安土桃山時代を中心に、幅広いデータベースを駆使して、歴史関連の著作物を刊行。城郭、神社仏閣、茶の湯、書画骨董の情報発信をはじめ、NHK大河ドラマの解説記事の発信を行っている。

東京大学経済学部経営学科卒業後、公認会計士登録。上場会社や非公開大会社の監査経験と、一般事業会社での部長職・役員を経て、独立。

（なお、生きるヒントラボは宗教団体、政治団体等とは一切関係ありません。）